

◆はじめに◆

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんは、現代社会において世界の人々が最も注目している「環境」を学術の対象とする「地域環境科学部」の、しかも、ランドスケープとしての環境計画・設計、環境の資源としてのランドスケープ資源・植物、環境を具現化する景観建設・技術の各分野へ果敢に挑んでいる「造園科学科」で、これから4年間の大学生生活を送ります。今、まさに造園家への道の第一歩を踏み出しました。実学主義の東京農業大学のこの学科で「地についての環境科学から、造園（ランドスケープ）科学まで」を自ら積極的かつ貪欲に学び、地球環境問題の解決に「造園学」の知識と技術で貢献できる人材に育てていただくことを希望いたします。

さて、本冊子は、地域環境科学部造園科学科の歴史と沿革、教育の目標と方法、教員スタッフ、研究室、将来の進路など、造園科学科の内容を総合的に解説し、皆さんの勉学に役立つよう編さんしたものです。まずは、全体を通読することによって、早くこの学科の全体像を理解し慣れていただくと同時に、これから4年間にわたって、大いに活用されることを願っています。

ところで、造園科学科は、その前身である東京高等造園学校が、1924（大正13）年に創立されてから、2014（平成26）年で90年を迎えました。これまで、それぞれの時代の社会的ニーズを受け入れながら、また多くの卒業生の協力を得ながら、教育プログラムの改善に努め、造園分野の教育機関としては世界でもトップクラスにまで発展してきました。そして環境の世紀といわれる今日、環境回復の切り札とされる生物を中心とした多様性ある社会の構築が期待されています。造園科学科は、それを具現化するランドスケープの創成に立ち向かっているのです。

なお、造園科学科の教育プログラムは、「日本技術者教育認定機構」（通称 JABEE）の認定を受けています。本学科の造園技術者養成教育プログラムは、カリキュラムの進行にあわせて教育内容の見直しを検討するとともに、常に新しい時代の社会的ニーズに応えるべく、また国際的にも通用する世界水準の教育システムを目指して、学部・学科の教員スタッフ、学生、卒業生が総力を挙げて、自己点検と改善を行いながら日々努力しています。

私たちは、造園学に対する教員スタッフの熱い思いを託して、この冊子を学生の皆さんに贈ります。

◆造園科学科指針 目次◆

はじめに

1. 東京農業大学造園科学科の特徴	1
1-1 造園教育のスタートと造園科学科 (1)	
1-2 教育理念と人材育成の目標 (1)	
1-3 教育の分野と研究室 (2)	
1-4 教育の施設と設備 (4)	
1-5 東京農業大学造園科学科の設立と歩み (4)	
2. 教育カリキュラム	19
2-1 カリキュラムの大枠 (19)	
2-2 地域環境科学部で開講する学部共通科目 (19)	
2-3 造園科学科のカリキュラム (19)	
2-4 造園科学科の学習・教育目標 (25)	
2-5 実習・演習科目 (32)	
2-6 学年進行と科目の配当 (33)	
2-7 選択科目の履修について (33)	
2-8 専門分野と専門家育成シナリオ (33)	
2-9 特別教育プログラム (35)	
2-10 資格取得 (36)	
2-11 技術士および技術士補について (36)	
2-12 「登録ランドスケープアーキテクト (RLA)」および「RLA 補」 (37)	
3. スタッフのプロフィールと専門分野	41
3-1 教員のプロフィールと専門分野 (41)	

3 - 2	客員教授・非常勤講師 (44)	
3 - 3	造園科学科研究室位置図 (45)	
3 - 4	学部事務室 (46)	
4.	研究室ガイド	47
4 - 1	環境計画・設計分野の研究室 (47)	
4 - 2	ランドスケープ資源・植物分野の研究室 (49)	
4 - 3	景観建設・技術分野の研究室 (51)	
5.	造園の職能と卒業生の活躍	53
5 - 1	造園の職能と職域 (53)	
5 - 2	大学院進学のおすすめ (53)	
5 - 3	卒業生の活躍 (55)	
5 - 4	東京農業大学緑友会 (56)	
6.	造園科学科の技術者教育と JABEE	57
6 - 1	JABEE の目的 (57)	
6 - 2	JABEE 認定と技術者の資格 (57)	
6 - 3	「技術士」の資格取得までの仕組み (57)	
6 - 4	JABEE プログラムの修了生 (58)	
6 - 5	JABEE の定める技術者として修得すべき知識・能力 (58)	
付属資料		61
1.	レポート・課題の作り方と表現方法 (61)	
2.	卒業論文・卒業制作ガイド (63)	
3.	ポートフォリオの作り方 (66)	
4.	定期刊行物一覧 (68)	
5.	造園科学科ホームページ (70)	

1. 東京農業大学造園科学科の特徴

1-1 造園教育のスタートと造園科学科

「造園」という分野は、対象とする空間の特性から、またその空間の創成に用いられる手法や技術によって説明することができます。

ヨーロッパの文芸復興期には「造園 (garden)」に一つの様式が誕生しましたが、そこにみられるような作庭技術 (gardening) は、造園の起源にあたるといわれています。その後の産業革命の進展期に「公園 (public park)」が誕生しましたが、その技術は公園の造成整備の過程で風景造園術 (landscape gardening) へと発展しました。さらに、「公園系統 (park system) 思想」や「国立公園 (national park) 思想」にもとづく環境整序を目指した都市計画や地域計画にまで造園技術を応用する範囲が拡大し、ここに近代造園学 (landscape architecture) が成立しました。遡ると160年程前のことです。

農業革命、産業革命から数えると3つ目の変革期にさしかかっていると言われる今日、自然と人間の調和共存を実現する知識と技術の体系を有する「造園科学 (landscape architecture science)」は、新しい時代の要求に応える学術と言えます。

本学科の歴史は長く、前身である東京高等造園学校の1924 (大正13) 年の創立から数えると、実に90年以上の歴史を刻むことになります。これは、120年の歴史を数えるハーバード大学 (1901年創立)、およそ110年になるカリフォルニア大学バークリー校 (1913年設立) に続く伝統であり、本学科の卒業生数は約10,000名に達していて世界最大規模と言えます。

さて、東京高等造園学校が創設されたのは、関東大震災 (1923年) 直後に当たります。この時代における日本の造園史をひもとくと造園学の萌芽期といえる時期です。東京ではヨーロッパの造園を参考にして日比谷公園 (1903年) や新宿御苑 (1906年) が造られてしばらく経ち、明治神宮の内苑 (1920年) と外苑 (1926年) がほぼ出来上がった時期に当たります。この神宮の森造成事業に情熱を燃やし真摯に取り組んでいた若き造園家が上原敬二 (1889 - 1981) であり、東京高等造園学校はこの上原敬二先生によって創設されました。その後、この学校が東京農業大学に吸収合併され、東京農業大学の一教育組織となりました。戦後の新制大学令によって旧農学部緑地学科、そして新制農学部造園学科となり、1998年4月に地域環境科学部の造園科学科 (Department of Landscape Architecture Science) として生まれ変わりました。



図 1-1 上原敬二先生 肖像

1-2 教育理念と人材育成の目標

1998年に創設された地域環境科学部は、生物に対する深い理解を基調とし、自然と人間の調和ある地域環境と生物資源の保全・利用・管理のための科学技術を確立することを目指しています。また、ミクロな地域環境問題の解決はもとより、さらにはグローバルな地球環境問題の解決に貢献する人材を養成することを目的としています。

地域環境科学部造園科学科は、1956 (昭和31) 年に設置された農学部造園学科を発展的に移行させ、新しいビジョンのもとで設立した学科です。「造園 (landscape architecture)」に対する社会的認識は、この50年間における社会的需要の絶対量の増大や多様化にともなって変化し、造園技術者に求められる職能の多岐化をもたらす結果となりました。

地域環境科学の中でも造園は、空間を創る「術」に特徴をもつ分野です。特殊な社会における庭園主流の時代から公共的な環境空間整備が求められた時代、そして地域環境にアプローチすることを通じて地球環境問題の解決を目指す時代に移りました。そこで、そうした「術」を支える「学的基盤」が以前に増して求められるようになりました。自然科学と社会科学の双方にまたがる学の構築、従来の経験的知識 (暗黙知) に加えて「形式知」の充実が求められるようになったという見方もあります。

そうした変化に応えるために、本学科では、造園教育の本質的部分は伝統として残し、新しい知識を教育プログラムの中に組み込み、また教育の手法改革を進めてカリキュラム改定を重ねてきました。そして造園科学科は、庭園文化を踏まえ、人間と自然の調和する共生社会の実現をめざし、都市から田園、自然地域にわたる国土の環境と景観を保全・活用し創造するための、調査・計画・設計・施工・管理・運営及び構成要素に関する理論と応用を教授し、豊かな感性と表現力、

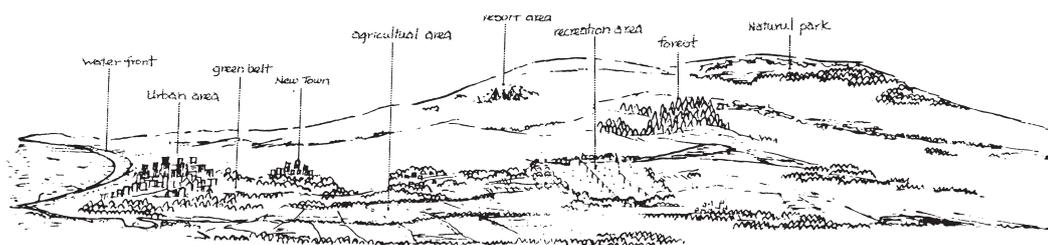


図 1-2 造園の対象空間

確かな倫理観を持つ造園家、造園技術者（Landscape Architect）の養成をおこなっています。

以上の理念のもとに、造園科学科では具体的に次のような人材を養成することを目指しています。

1) 植物に代表される自然の要素とそれらが有機的につくりあげるシステム、つまり生態系とそれを構成するものに対する知識をもち、自然環境の保全と育成に科学的かつ実践的に対応できる技術をそなえた人材。具体的には、環境・緑化・公園等行政の技術者、自然環境保全、生物資源調査、自然復元・緑化コンサルタントの技術者など。

2) 造園家独自としてはもとより、建築、土木、アートなど、隣接分野の専門家との協働 (collaboration) もできて、環境創造に取り組むに必要な感性と知識をもち、新たな環境の創成を計画的、デザイン的に遂行できる人材。具体的には、都市計画・公園緑地のプランナー、環境計画コンサルタント、ランドスケープ・デザイナーなど。

3) 人間の環境を整序する施設や空間を創世する先鋭化された技術と実践力を有し、とりわけ自然環境の利活用を生態技術的、環境芸術的に処理できる人材。具体的には、建設産業分野の造園技術者、造園材料及び資材生産の専門家など。

1-3 教育の分野と研究室

大学に来て、研究室という文字が頻繁に目につき、また知らず知らずの内にその言葉が耳に入ったりするようになります。研究室とは一体なんだろう？と思った人も多いでしょう。実験室かな？ 学習室かな？ 果ては高校にあったような職員室かな？ いろいろに思われます。

大学の研究室は、いわゆる企業の研究室や研究専門機関のそれとはちがって、教育機関の中に位置付けられた研究室といえます。したがって、そこでの研究活動は、学生への教育効果を配慮し、かつその成果は教育へフィードバック（還元）

されるものでなければなりません。

造園科学科の研究室の性格を理解するには、これに該当する英語でみるのが判りやすいと思います。「研究室」を辞典でみると、そこには、study room、laboratory、seminar が並んでいます。study room は学習室であり、laboratory は、これが特に化学系の研究室に当てられることからもうなづけるように、実験機器の備わった部屋ということになります。また、seminar は、特定のテーマを設定して、教員の指導の下、学生が集まって共同研究をするところです。比重の差こそあれ、造園科学科の研究室にはこれら3つの性格が共存しているといえます。

造園科学科の教員はそれぞれの専門領域に応じていずれかの研究室に所属し、研究室を拠点として学生の指導や研究活動に従事しています。

学生諸君は4年生になると卒業論文（または卒業制作）に多くの時間をついやすこととなりますが、その際に各研究室に所属する教員の指導を個別に受けることとなります。

□ 研究室における教育と研究

また、本学科が教育し、研究を推進している応用学としての造園学は、長い歴史をもつ造園活動の変遷の中で、「近代造園学 (landscape architecture)」として体系化を目指してきました。その使命は、人間と自然との広範な調和共存環境を創造することにあります。「近代造園学」体系化への努力は、全ての造園学研究者に課せられた使命ですが、同時に各研究室の使命でもあります。各研究室は、それぞれの分野の主要研究や専門的研究を通して、造園学の発展と体系化を目指しています。これには、高度に分化・先鋭化させていく方向の研究と、総合化していく方向の研究があり、これらはそれぞれ並行して展開されています。また、研究室の名称からも理解されるように、研究の視点を背景としたものと、造園活動の対象領域がその表面にあらわれているものがあります。それぞれの研究室が主要な研究対象と研究方法を合せ持ち、それぞれの研究分野を把握しているといえます。

こうした研究分野にもとづき、各研究室では研究資料や

表 1-1 研究室の構成

◇環境計画・設計分野
○景観計画学研究室
○ランドスケープデザイン・情報学 研究室
◇ランドスケープ資源・植物分野
○造園植物・樹芸学研究室
○緑化植栽学研究室
◇景観建設・技術分野
○庭園技法材料学研究室

データの収集・蓄積と、それらの整理をおこない、なるべく多くの学生諸君がそれを活用できる体制を整えています。

□教育の分野と研究室の構成

造園科学科には、教育研究の括りとして、「環境計画・設計分野」、「ランドスケープ資源・植物分野」、「景観建設・技術分野」3つの分野があります。

環境計画・設計分野は、造園科学の応用の着地点である各種環境の空間創成に向けて、造園の総合化を計画科学およびデザイン面からアプローチする分野で、地域環境計画における保全、ランドスケープ計画、ランドスケープデザインの理論と実際を扱います。

ランドスケープ資源・植物分野は、造園科学のバックボーンである植物、植生そして自然を科学し、生物技術による環境創成を扱う分野で、造園樹木や地被植物などの造園材料、快適空間をつくりだす造園植栽、特殊環境地などの緑化技術の理論と実際を扱います。

景観建設・技術分野は造園科学が適用される空間を建設するエンジニアリング部門であり、造園工法や造園施工法に着目して、建設技術工学、建設施工管理などの理論と実際を扱います。

造園科学科は、造園学の教育と研究を、体系的、効果的に推進するために、3つの柱を立てており、研究室の構成もこれに沿って3分野5つの研究室が設けられています。そして、

この分野の異なる5研究室のとり研究手法、方法論は必ずしも同一ではありません。それぞれが独自の研究アプローチを必要とする5つの研究室で構成されています。したがって、造園科学科の研究室は、自然科学的アプローチの他、社会的、論理的、数理科学的アプローチなど、様々な方法論を駆使できる研究室を揃え、総合的な造園科学研究の系統的体制を確立しています。

□環境計画・設計分野

<景観計画学研究室>：私たちの研究室では、人と自然の関係として現れる景観に着目し、造園の最小単位である庭から、まち、その広がりである都市域から中間山地域・自然地域まで、幅広いフィールドを対象に研究を行っています。研究アプローチの基盤は、計画学ならびに管理・運営論です。庭からはじまり、公園や緑地、都市近郊に残る里地里山、中山間地域の農山漁村の景観、自然地域の国立・国定公園、自然風景地に展開する空間・景観の持続可能な保全と活用を探究し続けています。地域らしさを創出している固有の地形や植生、文化・歴史や生業の特徴を明らかにし、それらを生かした景観計画、観光計画やレクリエーション計画のあり方を造園的観点から模索するのが私たちの使命です。

<ランドスケープデザイン・情報学研究室>：本研究室では、人口減少、都市の縮退、気候変動への適応といった課題に対してオープンスペース（屋外空間）を活かした住みやすく、持続的な都市の創成に貢献する研究をおこないます。庭、空地、公園緑地、街路、農地など、小空間から数百haの都市まで幅広いスケールにおける調査・計画・設計理論と技術の探求、さらにはICTやGISによる分析・視覚化、空間の質を検証するシミュレーション解析などのデジタル技術を活用します。それにより、社会課題解決に向け「デザインの思考や技術」と「工学的な空間情報技術」が融合するランドスケープデザインを探求します。学生は調査研究や実践的な取り組みを通じてランドスケープデザイン・情報学の基礎的な技術を取得し、自然・歴史・文化を活かした都市づくりに貢献することを目指します。

□ランドスケープ資源・植物分野

<造園植物・樹芸学研究室>：私達の生活は、様々な生物によって支えられています。なかでも植物は、その生理・生態・形態的機能によって、環境調節に大きく貢献しています。造園は、植物を構成要素として、快適性と美を追求する営みです。私達の研究室では、造園植物の特性や役割等を、生物学的視点から究明します。例えば、里山の希少種の保全と効果的な維持や管理、サクラやユリ科植物等の園芸植物の都市空間への利用、生理・生態学的な特徴からみた雑草等を含む草本植物の利用や管理、樹木医の視点による巨木・老木の在り

方について、野外調査や実験により探求します。また、造園植物の時代背景、文化等の社会的調査も実施し、これらを次代に継承するための環境教育も行っています。人の生活と植物の普及、生育との関係を問い、生活の中の植物を自然科学の視点で捉え、みどりとのより良い関係を考えます。

<緑化植栽学研究室>：私たちの生活する都市には、身近な空間の緑として地域の公園や運動施設などから、高層のビル群が立ち並ぶ空間の緑として屋上庭園や壁面緑化、室内のアトリウムなどがあり、これらのさまざまな場所の緑化空間は、私たちの生活の質を高めています。ところが、これらの場所は植物にとって健全な生育が困難な環境であることが多いです。このような環境での植栽について緑化技術(造成・維持管理)の開発および研究をおこなっています。また、花や緑が人間心理や都市環境に与える効果について解明をする研究や環境要因と地被植物の生育特性(成長量や糖・イオン等の体内分布等)との関係を解明する研究など幅広いテーマを設定しています。研究対象は都市空間から沙漠地や災害地等の過酷な環境で人の生活と密接した場所が主となっています。

□ 景観建設・技術分野

<庭園技法材料学研究室>：思想・芸術・技術の総合体ともいべき日本庭園は、土・石・木といった自然材料の特性を發揮させる知恵と、地形・光・風・水・音を活かす技法から成立します。当研究室は、庭園の工法(庭園の創造、育成、維持、管理に関する技術)、材料(石材・木材・竹材・左官材料の種類、産地、特性、加工)、施設(庭園建築、石造物、垣根等)の研究を通じ、庭園の保存修復と技術の伝承とともに、先人の知恵と工夫を現代の造園空間へも応用することを射程します。さらに東アジアや欧米を含む国内外の造園史研究と庭園様式・空間構造の分析、日本庭園の感性工学的研究とデジタル化への挑戦から、庭園の本質と真実に迫ります。研究室活動では、庭園と材料産地のフィールドサーベイ、技術に関する実地研修、庭園の調査修復ワーキング、他大学との学術交流等を展開します。

1-4 教育の施設と設備

造園科学科は研究室の他に、演習・実習施設として環境計画・設計分野演習室(200人収容グループ演習室、120人収容製図室、100人収容グループ演習室)、景観建設・技術分野演習室、植物系実験室(70人収容の顕微鏡設置教室)、造園情報センターなどを整備し、さらに人工環境調節、GIS解析、ネットワーク型情報処理などの必要な設備を有し、これらを活用した教育と研究を進めています。その他、世田谷キャンパスのフィールドはもちろんのこと、大学農場、植物園、演習林も利用できます。

造園情報センター

造園科学科創立70周年を記念して企画された「東京農業大学造園情報センター」が1996(平成8)年5月にオープンしました。これは卒業生の寄付金をもとに本学造園科学科内に設けられたもので、在校生だけでなく本学OBにも広く利用していただくというものです。

これが開設されたことにより、本学造園科学科がまさに「産」「学」をつなぐ造園情報のサービスステーションとなり、学生にとっても幅広い情報が手軽に入手できるようになりました。

造園情報の体系を整理しつつ、造園学関係古典、造園学基本図書、関連学術論文、関連産業論文、関連図面(庭園、公園、都市、地域)、造園空間パンフレット、造園資材パンフレット、造園材料資料などの閲覧と同時に、膨大な情報の検索機能の拡充により利用の便宜充実に努めています。

また、造園の古典といわれる図書で既に絶版となっているものを集めた貴重本コーナーや学科の歴史を物語る資料を揃えた記録本コーナーもあります。

学術雑誌をはじめとした関連定期刊行物は、現在購読中のものが和洋約60誌、これに既に廃刊となっている雑誌を含めると計約100誌が閲覧できます。この他、主要図面約3,000点を有する図面ライブラリー、造園技法や庭園・公園を紹介したビデオなどを収集したビデオライブラリーなども整備しています。

なお、この「造園情報センター」の利用については、貴重な情報を多くの学生が共有できるように情報センター内で閲覧する方法としています。

1-5 東京農業大学造園科学科の設立と歩み

上原敬二『造園学汎論』序

術としての造園学は学に先立って何れの国にも発達して来たのであるが、然しその多くは斯学の一部門である庭園学の領域に限られて居た。

造園も他の新しい学術と同じ径路を踏んで今正に学界の水準線に上って来たのである。そこに組織と体系とを整えて従来の術に一步を進め系統的に学としての価値を将来せねばならぬ。

果して然らば造園は学としての待遇を学界より受け得るであろうか、若し受け得るとせばその内容は如何なるものであろうか。

本書は我が国において造園を学として体系化し、組織立てたる最初の著述であると信ずる。不敏なる著者が微力を顧みずその価値を高唱し、普及を高調したる最初の試作である。内容は著者の創意になれるもの多く、欧米に於ける造園のそ

れと趣を異にするもの尠なからざるにより一々国情に照応せしめ、独特の排列樹立したつもりである。素より浅学その任に非ず将来の大成を期して益々本邦独自の造園学を完成せしめんことこそ著者畢生の願である。

造園は著者のライフワークである、併せて著者全人格の反映である。従って本書の所論悉く造園に対して懐抱せる著者の主観である。その研究と普及との為には何物を犠牲に供するも厭はざる真摯と熱愛との情に於ては敢て人後に落ちないつもりである。

顧みて我国に於ける軌近造園界の発達を聞するに遅々として振わず、常に前途尚お遼遠の感なきを得ず。既往を通じて将来を案ずるに何れの日か彼岸に達することが出来よう。さりながら霧深き学海の怒濤に棹すパイオニアの使命広漠たる未開の領域に瘴癘と闘うは著者に授けられたる試練の天命と信じ、忠実なる本書を伴侶とし、これによって斯界に投ぜられたる一石の波紋を追って斯学研究の一路に精進したいと思う。幸いに著者と志を同うせられ造園発達の将来に望を嘱せられる諸賢の忠言によってこの小著をして益々価値あらしむる機運の到らんことを切望するのである。

本書著述中先輩諸賢の言説に対し忌憚なき妄評を取てせる節々少からず。一つに斯学発達に貢献せんとする好学熱愛の余情として寛諒せられんことを読者諸君に懇請する次第である。

大正十三年三月一日

(上原敬二『造園学汎論』 大正13年10月 林泉社 より)

本校教授要項

- ▽本校は詰め込み主義を排す
- ▽本校は生徒の自由自習を尊重す
- ▽本校は教授よりも指導に重きを置く
- ▽本校は生徒の個性発達に重きをおく
- ▽本校は学と術の並行を期す

創立主旨

海外諸国に於ては已に造園に関する技術を修得する機関として専門学校の特徴を見ること久し、然るに我が国に於てはその必要性を唱導すること数年の久しきに亘るも、未だその創設を見ず。然も時世の進運、社会の欲求は遂に這般の方面に及び日に日に痛切を加えつつあり。

茲に本校は時世に鑑み新興學術の研究と欽如せる造園技術者の養成とを目的とし最も新しき教材と教育方針の下に、斯界の權威者たる専門家中の専門家を講師として招聘し、目下創業勿々に際し二ヶ年を以て専門教育に従事せりと雖も近く三ヶ年の課程に改め専門学校としての内容充実を図り所期の目的を達せんことを期す。

教授は公園、庭園、住宅、園芸、都市計画、田園都市、土地経営、建築工芸の全般に亘り、技術家として必修の學術技術を受け新しき領域を開拓して社会に貢献せしむるを理想とし、一つは時世の要求に応じ併せて新しき使命を奉じ、国家の文化的発展に資せんとす。

大正十三年四月

(大正13年「学校規則」より)

◇東京農業大学造園科学科の設立と歩み◇

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
明治元年	1868			戊辰戦争、王政復古 明治と改元、神仏分離
2年	1869			東京遷都 五稜郭の戦い(北海道・榎本武揚)
3年	1870		居留外国人のための、彼我公園(現山手公園・横浜)設置	平民の苗字使用認可
4年	1871			廃藩置県
5年	1872			学制公布
6年	1873		太政官正院達第16号(公園制度の発祥)	徴兵令布告 地租改正条例公布
7年	1874		銀座煉瓦街に並木誕生	「明六雑誌」創刊
8年	1875		居留外国人のための、東遊園地(神戸)設置	樺太・千島交換条約調印
9年	1876			札幌農学校開校
10年	1877		第1回内国勲業博覧会開催(東京・上野公園)	西南戦争 東京大学発足
11年	1878			パリ万国博覧会参加
12年	1879			琉球処分(沖縄県設置)
13年	1880		岩崎弥太郎、深川別邸を深川親睦園と命名(現清澄庭園)	刑法・治罪法公布
14年	1881		農商務省設置	国会開設の勅諭 自由党結成
15年	1882			日本銀行設立 上野博物館開館
16年	1883			鹿鳴館落成
17年	1884			華族令制定 上野駅で白熱電灯点灯
18年	1885			内閣制度を採用 兌換銀行券発行
19年	1886			学校令公布
20年	1887		ヘルマン・エンデヴィルヘルム・ベックマン(独)「日比谷官庁集中計画」立案	伊藤博文憲法起草開始
21年	1888		東京市区改正条例公布、日比谷練兵場跡を公園とする事業が決定	史町村制公布 枢密院設置
22年	1889	2.5 上原敬二先生、東京・深川に生まれる。	『園芸考』(横井時冬)	大日本帝国憲法公布 東海道線開通
23年	1890		小澤圭治郎「園苑源流考」執筆開始	府県制・郡制公布 教育勅語発布
24年	1891	3.徳川育英会を母体に私立育英農科が設置される(麹町区飯田河岸/現在のJR飯田橋駅構内)。		ニコライ堂完成
25年	1892	10.東京市小石川区大塚窪町に移転し、私立育英農科に改称。		
26年	1893	5.私立東京農学校に改称。	東京市が日比谷公園の事業を決定 『Landscape Gardening in Japan』(J.コンドル)	条約改正交渉開始
27年	1894			日清戦争勃発
28年	1895			下関条約調印、三国干渉
29年	1896			近代第一回オリンピック開催(アテネ)
30年	1897	1.私立東京農学校、大日本農会の附属となり、8.経営も大日本農会に移管。		
31年	1898	10.東京府豊多摩郡渋谷村(現渋谷区)常盤松御料地内に移転。		日本美術院創立(岡倉天心)
32年	1899			第二次恐慌
33年	1900		日比谷公園改良委員会設置	治安警察法公布
34年	1901	7.大日本農会附属私立東京高等農学校に改称。		『武蔵野』(国木田独步)
35年	1902		新宿御苑アンリ・マルチネの図で大改造着手	日英同盟協約調印
36年	1903	専門学校令による許可を受ける。	日比谷公園開園(本多静六設計、東京)	F.オルムステッド逝去(1822-、米国・セントラル・パーク設計者)
37年	1904			日露戦争開始 日韓議定書調印

◇東京農業大学造園科学科の設立と歩み◇

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
38年	1905			ポーツマス条約調印
39年	1906		新宿御苑洋風庭園完成	鉄道国有法公布 南満州鉄道設立
40年	1907	4.校長に横井時敬就任。	福羽逸人・白沢保美「東京市行道樹改良案」	小学校令改正(義務教育6年)
41年	1908	3.上原敬二先生、東京府立第三中学校卒業。	東京市公園改良委員会設置 東京府立園芸学校創立	増税法公布
42年	1909		千葉県立園芸専門学校創立	国技館落成
43年	1910			朝鮮総督府設置 『白樺』創刊
44年	1911	7.上原敬二先生、第一高等学校大学予科卒業。 9.上原敬二先生、東京帝国大学農科大学入学。 11.私立東京農業大学と改称し、初代学長に横井時敬就任。	工場法公布	関税自主権確立
45年 大正元年	1912			7.30明治天皇崩御(大正に改元) 中華民国成立(清朝滅亡)、孫文臨時 大總統に就任
大正2年	1913		運河法公布、東京市による郊外公園構想樹立、宮 内省井の頭御料地を東京市に下賜	
大正3年	1914	7.上原敬二先生、東京帝国大学農科大学林学科卒業。 9.上原敬二先生、東京帝国大学農科大学院(森林美学専 攻)入学。		第1次世界大戦開戦、東京駅開業
大正4年	1915	5.上原敬二先生、東京帝国大学農科大学院退学、明治 神宮造営局技手に任命。		二十一カ条要求提出 大戦景気
大正5年	1916	用賀第二農場設置。		吉野作造・民本主義を唱導
大正6年	1917		『明治園芸史』出版、小澤の「明治庭園記」を登載 明治神宮内苑着工	ロシア革命
大正7年	1918	5.上原敬二先生、明治神宮造営局技手依願免官。 9.上原敬二先生、東京帝国大学農科大学院再入学。	明治神宮外苑着工 東京市区改正条例を5大都市に準用 『造園概論』(田村剛)、『樹木根廻り運搬移植法』(上 原敬二)、機関誌「庭園」創刊、日本庭園協会設立	シベリア出兵宣言 第一次世界大戦終結
大正8年	1919	4.上原敬二先生、東京農業大学講師(林学担当)を委嘱さ れる(-20.7)。 9.上原敬二先生、東京帝国大学大学院退学。	史蹟名勝天然記念物保存法公布、旧都市計画法 制定	クライナガルテン法成立(独)
大正9年	1920	4.上原敬二先生、『神社林の研究』論文によって文部大臣 より林学博士学位授与。 7.上原敬二先生、造園学研究の為に欧米留学(-21.11)	明治神宮内苑完成	国際連盟成立・加盟
大正10年	1921		東京市に公園課設置	ワシントン会議参加
大正11年	1922	2.上原敬二先生、東京帝国大学講師(森林経理学担当) を委嘱される(-22.7)。		ワシントン海軍軍縮条約調印
大正12年	1923	10.上原敬二先生、帝都復興院技師任命(-24.5)。	帝都復興特別都市計画法公布、帝都復興院設置	9.1関東大震災
大正13年	1924	4.1東京高等造園学校(本学科前身)、渋谷町常盤松(現 渋谷区渋谷四丁目)東京農業大構内に開校(事務上の手 続きミスで正式の設立認可は大正13.9.12付となってい る。)初代校長上原敬二就任。 5月より1期生の授業が、当時一流の講師陣により開始され る。開設科は本科2年、専科1年、研究科2年。初年度だけ 実科1年を設けた(聴講生制度も別にあった)。設立時の 理事は、岩崎潔治・井下清・上原敬二・龍居松之助・筒井 春香。顧問は、白沢保美・本多静六・横井時敬の各氏。こ の時制定の校章は奥山恒五郎氏の図案による。 6.東京高等造園学校新緑会『造園』を創刊。(その後校友 会文芸部として発行が続いた。) 10.15上原敬二『造園学汎論』を著し、造園学の領域を明 示。従来の徒弟技術の造園から脱却した学的体系と教育 を目標とした授業を目指す。	帝都復興計画告示 『造園学汎論』『都市計画と公園』(上原敬二)	アムステルダム国際都市計画法会議開催
大正14年	1925	4.東京高等造園学校関係者を中心として、(社)日本造園 学会を設立(理事、上原敬二・井下清・龍居松之助・岩崎 潔治・永見健一・波多腰豊)。学会本部を目黒の東京高等 造園学校事務局内に置き、同11月学会誌『造園学雑誌』 を創刊。11.東京上野に於ける全国副業展覧会会場前庭 及び、全国農村めぐり展示会場が、在校生の設計施工に より完成。その作品を含む絵葉書4種が発行される。	日本造園学会設立	日ソ基本条約(国交樹立) 治安維持法公布 普通選挙法公布 ラジオ放送開始

◇東京農業大学造園科学科の設立と歩み◇

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
大正15年 昭和元年	1926	4.1 東京府荏原郡目黒町下目黒510(現・目黒区目黒三丁目5)の林学博士中鉢氏所有地を借り受け独立校舎完成。2期生から8期生の授業がここでなされる。 3.10 目黒校舎にて第1期本科生の卒業式(挙行)同校地は、在校生の実習により整備された。	日本造園学会「造園学雑誌」創刊 明治神宮外苑完成、初の風致地区指定	12.25大正天皇崩御(昭和に改元)
	2年	1927		金融恐慌勃発 地下鉄開通(上野-浅草)
	3年	1928		普通選挙実施
昭和3年	1928	1. 東京高等造園学校植物研究会『雲葉』(ふさざくら)を創刊(昭和6、第9号までつづく)。 4. 制服をこれまでの背広、中折帽から黒詰襟に変更。(研究科や事情あるものは黒色背広を着用した)	大阪市「総合都市計画」策定(100万坪の公園計画)	三・一五事件
昭和4年	1929		(財)国立公園協会発足、東京帝国大学農学部に造園学教室開設 千葉県立高等園芸学校が千葉高等園芸学校と改称	東京・大阪・福岡間定期航空開始
昭和5年	1930	2.1 東京高等造園学校関係者が中心となり、日本造園学会編『造園芸術』を創刊。	日本造園学会編『造園芸術』発刊 帝都復興大小55公園完成(内務省復興局・折下吉延、東京市公園課・井下清)	特急「つばめ」が東京～神戸間を9時間で運行開始
昭和6年	1931	3. 上原敬二校長辞任。理事・井下清(常任)、小山正一(監事)、白沢保美、龍居松之助(常任)、田中仙樵(監事)、田村剛、本多静六、安岡勝也(常任)、結城礼一郎、吉田亨二。 4.1 第2代校長に龍居松之助就任。	国立公園法公布	満州事変
昭和7年	1932	4. 校則改正により本科2年を3年とする。校誌『造園学報』を創刊。 11.5 「東京造園高等学校同窓会」設立。	東京緑地計画協議会発足 『理論実際造園学』(永見健一)、『都市の公園計画一応の理論』(北村徳太郎)	上海事変
昭和8年	1933	3.26 「常盤松造園研究会」設立(その後同会は昭和10.2、『造園研究報告』を創刊)。		アテネ憲章採択 ブルーノ・タウト(独)来日
昭和9年	1934		「造園学雑誌」を「造園雑誌」に改称、8国立公園指定	満州国帝政実施
昭和10年	1935		東京市・八柱霊園(千葉・松戸)開設	天皇機関説(美濃部達吉)問題化
昭和11年	1936	7. 東京市大森区調布大塚町639(現・大田区雪谷大塚町14)東京共立女子薬科専門学校分校跡地に移転。生徒の手により目黒校舎からの樹木の移植と、構内整備が行われ沈床花壇、藤棚、テニスコート、バスケットボールコート等が設けられた。 9.1 雪ヶ谷校舎(池上線雪ヶ谷駅に近い)にて授業開始。11期生から18期生までの授業がここでなされる。	公園緑地協会(後の日本公園緑地協会)発足 「公園緑地」創刊	二・二六事件
昭和12年	1937	4. 東京高等造園学校同窓会名簿昭和12年版が体裁を整え発行される(昭和9、にすでに名簿の発行があり、昭和12、14、5、16、5に発行される)。 8. 在校生による造園勤労奉仕活動として、六義園内園路等の整備が実施される。		日中戦争始まる
昭和13年	1938	4. 日本造園士会設立(高等造園ゆかりの人々为中心)	厚生省設置	国家総動員法公布
昭和14年	1939		東京緑地計画 『日本庭園史図鑑』(重森三玲)	第二次世界大戦開戦
昭和15年	1940		都市計画法改正(緑地の法文化)	日独伊三国同盟調印 紀元二千六百年記念事業
昭和16年	1941	10.15 東京高等造園学校の経営の一切(含む教職員、学生、施設)を東京農業大学に移譲。同校設立者並びに校長龍居松之助との間に契約を締結。	防空法改正、空地を設けるための地区指定により建築制限を規定	真珠湾攻撃 住宅営団設立
昭和17年	1942	4.1現在在籍の2・3年生の授業は、引き続き東京農業大学内にてもたれた。以後、東京高等造園学校卒業生の学業成績、卒業証明書等の発行は東京農業大学が行う。専門部造園科(後に緑地土木科となり更に緑地科と改名)を新設した(大森区調布大塚町639)。初代科長に龍居松之助が就任。 11.29 造園科学生報国隊25名は常盤松、李健公邸で庭園の手入れ奉仕。この頃、農場は用賀農場(9.09ha)、千歳農場(4ha)、富士分場(20.1ha借地)の3ヶ所があった。	環状空地帯、および防空空地設定について閣議決定	ミッドウェー海戦 関門海底トンネル開通
昭和18年	1943	3.24 東京高等造園学校最後の卒業式を行う(高造時代卒業生534名)。 5.12 東京高等造園学校の廃校が認可された。 5.22 専門部造園科主催戦時「造園報国祭」を挙行。 8.1 造園科が渋谷の本部に、大学予科が大森区調布大塚町に交換される(昭和19に移転完了)。 12.1 兵役についた学生の要求から造園科を緑地土木科と改め、同時に永見健一(農学博士)が科長に就任。	防空法に基づく空地帯を指定 『日本風景美論』(上原敬二)	ガダルカナル撤退 学徒出陣

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
昭和19年	1944	4.1 専門部緑地土木科が渋谷区常盤松での授業を開始。 7 造園実習地(千葉県我孫子町)で、食糧増産実習実施。	千葉高等園芸学校が千葉農業専門学校と改称	サイパン陥落 本土爆撃本格化
昭和20年	1945	7.1 専門部緑地土木科一年、帝都各緑地に出動し食糧増産に従事。	戦災復興院設置	第二次世界大戦終結
昭和21年	1946	3.31 科名を緑地科と改め、永見健一科長就任。 4.1 世田谷区世田谷四丁目(現桜丘一丁目)に大学が移転し授業を開始。 7『緑地研究』創刊号発行(4号まで発行される)。	特別都市計画法、自作農創設特別措置法、政教分離により社寺境内の公園解除 都市計画協会発足	住宅営団廃止
昭和22年	1947		厚生省国立公園部設立、国民公園公開 国土緑化運動開始	日本国憲法施行
昭和23年	1948	8. 世田谷キャンパスの造園計画実施(担当平山勝蔵)。 緑地科長に龍居松之助就任(永見健一病気の為)。	IFLA(International Federation of Landscape Architects)イギリス第1回大会(国際造園家会議)で創設 建設省設置法、内務省解体、自治省・農林水産省設置「造園雑誌」第11巻1号復刊、雑誌「国立公園」復刊 東京都公園協会発足、軍用跡地の公園化がはじまる	極東国際軍事裁判
昭和24年	1949	4.1 新制東京農業大学発足、農学部緑地学科設置、学科長に龍居松之助就任。学校教育法による新制大学設置の認可を受け、農学科・林学科・畜産学科・農芸化学科・農業工学科・農業経済学科・緑地学科・協同組合格科の8学科を設置した(林学科・畜産学科は茂原に設置)。専門部廃止。このときの東京農業大学学長は佐藤寛次。この頃農場で井下清教授のもと東京都の公園からさし穂をもらい、樹木の繁殖を始める。 6.24 緑地学科主催でG.H.Q.天然資源局ボバン氏の特別講演(演題は日本のNational Park)実施。	林野庁発足 土地改良法 国立公園法改正 国土美化運動開始 千葉農業専門学校、千葉大学園芸学部となり造園学科を設置	ドッジライン発表 日本工業規格(JIS)制定 単一為替レート(1ドル=360円)設定
昭和25年	1950		国土総合開発法、建築基準法、首都建設法、文化財保護法公布、国立公園協会設立、ガーデン協会発足・機関誌「ガーデン」発刊、国土緑化推進委員会発足、文化財保護委員会設置	朝鮮戦争開戦 特需景気 住宅金融公庫発足 金閣寺放火で全焼
昭和26年	1951	3.1 東京農業大学国土計画研究所規定制定(所長・北村徳太郎)。	建設省都市局「公園施設基準」制定、日本自然保護協会発足、日本都市計画学会設立	サンフランシスコ講和条約調印、日米安全保障条約 日本ユネスコ・ILOに正式加盟
昭和27年	1952	3.2 永見健一教授逝去。	道路法、農地法 江山正美「現代の造園形態」	日米行政協力調印 東京国際空港(羽田)供用開始
昭和28年	1953	5. 井下清教授、日本造園学会会長就任。	琉球政府「都市計画法」制定	内灘基地反対闘争、新教育委員会法 NHK白黒テレビ放送開始
昭和29年	1954	12.4 緑地研究会を「造園同窓会」と改称再発足。用賀農場時代、「農業経営係(通称・農経)」はサツマイモや蔬菜の他に樹木を一部含む総合農業経営を実習指導した。	土地区画整理法、東京造園建設工業組合設立 日本造園学会、IFLA(ウイーン)に日本代表を初派遣	警察法、防衛庁設置法、自衛隊法
昭和30年	1955	4.1 上原敬二、学科長就任。	日本住宅公団発足	55年体制成立、初の統一地方選挙 日本政府ガットに正式加入
昭和31年	1956	4.1 緑地学科を廃し、造園学科を設置、科長に上原敬二就任(学科主事・56.5-59.3近藤龍雄)	首都圏整備法、都市公園法、東京都公園協会機関誌「都市公園」発刊、日本道路公団発足	神武景気
昭和32年	1957	学生サークル「観光研究会」発足(後に「造園観光研究会」と改称)。この頃造園実習は90名をA・B班に分け樹木のスケッチ・四ツ目垣・剪定・さし木・除草(芝生内の除草)・冬囲い・石垣・消毒・天地返し等を、交互に年間12回午後の半日実習を昭和35年度まで実施。	自然公園法(国立公園法改正) 技術士法	なべ底不況 東海村原子炉に火ともる 国連総会で安保理事会非常任理事国に当選
昭和33年	1958	4.1 農場の「農経」を「樹木係」に名称変更。	文化財指定庭園保護協議会設立	東京タワー完成 八郎干潟干拓開始
昭和34年	1959	4.1 造園学科長に江山正美(農学博士)就任、(学科主事・59.4-64.3近藤龍雄/64.4-68.3金井格/68.4-71.3北沢清/71.4-75.3岸塚正昭/75.4-77.3永嶋正信) これ以後近代造園学の立場から科学的側面を強調し、環境計画学としての造園が強調される。	工場立地法、首都高速道路公団発足	岩戸景気 伊勢湾台風起こる
昭和35年	1960	この頃農場で毎年さし木、種子まき、安行への買出し等樹木生産に力を入れ、見本用も蓄える。 9.「造園学生会」結成、機関誌「LASA」創刊号発行。	新宿副都心再開発計画 『都市のイメージ』(K・リンチ)、「自然公園」創刊、「自然保護」創刊、世界デザイン会議(池原・田畑ら参加)、(財)日本自然保護協会設立	ヴェトナム戦争開戦 国民所得倍増計画閣議決定、(自民党・経済成長、所得倍増計画を公表)
昭和36年	1961	1. 東京農業大学造園同窓会『会員名簿』発行。 4.『LASA』2号発行。 5. 用賀農場売却、厚木農場へ移転、昭和25以来用賀農場で庭園樹木500余種培養、新農場に樹木約200種15,000本(2t車20数台、1日2台にて2週間)移送、90%活着。61~62年にかけて4回社会人を対象に造園技術講習会開催。	特定街区制度、宅地造成規制法 『Landscape architecture』(サイモンズ)、『造園技術』(関口鉄太郎) 災害対策基本法、農業基本法 国民休暇村協会設立	全国的に土木工事急増

◇東京農業大学造園科学科の設立と歩み◇

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
昭和37年	1962	3.厚木農場へは行かず本校にて5班で造園実習を実施(一44.3)。研究室を木造校舎から総合研究棟(現2号館)に移転。 6.16・17東京農業大学創立70周年記念学術展示会に参加。 9.農大主庭(図書館前)を整形的デザインに整備(担当平山勝蔵)。	全国総合開発計画、都市樹木保存法 『風景の美と特質の保存に関する勧告』がユネスコで採択 『沈黙の春』(R・カーソン)	キューバ危機 首都高速開通 名神高速道路(栗東I.Cー尼崎I.C間)
昭和38年	1963	5.佐藤昌教授、日本造園学会会長就任。	区分所有法、新住宅市街地開発法、新鳥獣保護及狩猟ニ関スル法	オリンピック景気 黒四ダム完成
昭和39年	1964		新河川法、工業整備特別地域建設法、土地改良法、厚生省国立公園部設立、児童施設研究会『こどものおそびば 計画・設計のすべて』、IFRA日本大会実行委員会『日本の造園』、第9回国際造園家会議(IFLA東京大会)、造園設計事務所連合設立、東都造園建設業協同組合設立	10.10東京オリンピック開会 海外旅行の自由化実施 東海道新幹線開業 名神高速道路全線開通
昭和40年	1965	12.18 上原敬二先生、喜寿、勲四等瑞宝章叙勲、著書白冊刊行祝賀会が開催さる(私学会館)。	公害防止事業団法、建設省「河川敷地の占用許可について」、日本造園緑地組合連合会設立、河川敷地公園の誕生、研究学園都市建設開始	ILO87号条約 日韓基本条約調印
昭和41年	1966		古都法、首都圏近郊緑地保全法、住宅建設計画法、「造園設計技術者名簿」の作成(造園設計事務所連合)、植物園協会設立	いざなぎ景気 東京海上ビル美観論争
昭和42年	1967	5. 江山正美教授、日本造園学会会長就任。 11.1 造園学科『造園学関係文献集(単行和書部)』発行(わが国初の造園書文献目録)。	「経済社会発展計画」(経済審議会)、公害対策基本法、近畿圏の保全地域の整備に関する法律、日本造園設計事務所連合設立(造園設計事務所連合を改称)、海中公園センター設立、平城宮東院庭園発掘調査開始、東京海上ビルを契機に美観論争が起ころ	美濃部都政 資本取引自由化決定
昭和43年	1968	3.1 造園学科『造園学関係雑誌索引集其の一』発行(わが国初の雑誌文献目録)。 4.1 農場の「樹芸係」を「造園樹木係」と名称を改める。	文化庁設立 新全総 林野庁自然休養林制度制定 新全国総合開発計画発表 観光資源保護財団設立 東海自然歩道構想 佐藤昌『欧米公園緑地発達史』 「ランドスケープジャーナル」創刊 明治の森(東京高尾・大阪箕面)	5月革命、学園闘争 川端康成ノーベル文学賞受賞 大気汚染防止法 小笠原返還協定に調印 イタイイタイ病の原因がカドミウムと認定
昭和44年	1969	Lαマークこのころ(昭和44～45)から使用。(江山正美教授デザイン) 4.1 研究室を6つに整備し、造園学研究室、造園計画学研究室、造園植物学第一研究室、造園植物学第二研究室、造園工学研究室、造園管理学研究室。 4.1 農場の「造園樹木係」を「造園係」と改める。造園実習が農場にて再開される。移植・竹垣・石組・作庭を4教程3班にわけ年間12回実施。実習担当の班編成は5班、220名が4年次で実施。1960年以後の卒業生の集い「60F」発会、機関誌『60F』1号発行。 11.3 造園学科教員・学生有志百余名が「自然保護＝人間保護」を提唱して緑の旗の旗のデモ行進(日比谷公園→銀座)を行い、新聞各紙が報道する。	都市再開発法 農業振興地域の整備に関する法律	アポロ11号月面着陸 東大安田講堂封鎖事件 東大・東教大(現筑波大)の4学部の入試中止 マンションブームと高層化 東名高速道路開通
昭和45年	1970	1.20 江山正美『造園学とは何か? 私たちが選んだ途の未来像』を全学生に配布。 3.25 1号館へ研究室を移転し、面積を拡張、施設整備を図る。 4.1 『造園学科指針』第1号を発行し造園学科と学生の学習に方向性を与える。 4.1 造園学科創立45周年を記念して「造園大賞」を制定し、5月18日第1回の授賞式(平井昌信)。 4. 戸野琢磨記念図書受入。 5.18 「平山勝蔵先生古稀祝賀会」を開催し、併せて造園学科の前身東京高等造園学校の授業開始日を記念してこの年以後毎年5月18日(後には前後の土曜に変更)に「造園学科卒業生の集い」を定例化する。造園学科創立45周年を記念して『現代造園用語辞典』、『造園学科抄史』を発行。 11.3 1号館スラローム型園路の中庭完成(江山正美設計)。 11.7 第2回の緑の旗デモ行進(世田谷公園→明治公園)を学科一体として実施、各新聞、放送局がとりあげる。	総合設計制度 水質汚濁防止法 海中公園の誕生 東京造園家協会設立 「季刊ランドスケープ」創刊	日本万国博覧会開催(大阪) 国鉄ディスカバージャパン 歩行者天国の試験的実施(銀座、新宿等) 国産初の人工衛星の打ち上げ成功 三島由紀夫、市ヶ谷の自衛隊内でクーデターを扇動、割腹自殺 核兵器拡散防止条約調印

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
昭和46年	1971	1. 「LALAの会」(造園学科女子学生の会)発足。1980年代頃まで活動。 3.25『造園学科指針』第2号を発行。 造園実習の5班専攻編成をやめ、学生を6班に分け、輪番制で実施。農場で金曜日に班ごと実習。この時より造園学科の教員も実習指導を担当。6班3教程(四ッ日垣・石組・作庭) 5.18 上原敬二著明治神宮の森造成の記録を『人のつぐった森』として造園学科より発行。 8. 井下清先生に名誉農学博士号が贈られる。 11. 緑の大旗、造園学科応援旗使用される。 10.17 造園学科が中心となって「農大を緑化する会」を組織し、有志の寄附金をもとにメタセコイア5本(図書館前)等でキャンパス緑化を図る(東京農業大学創立80周年記念)。	環境庁設立 日本造園建設業協会設立 特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約 『景観論』(G.エクボ)	沖縄返還協定 NHK総合テレビ・全カラー放送化開始
昭和47年	1972	1.20『60F』2号発行。 2.1『造園学関係雑誌索引集其の二』発行。 4.1 研究室の名称の一部を変更し、系統化する(カッコ内は旧名称)。造園計画第一研究室(造園学)、造園計画第二研究室(造園計画学)、造園計画第三研究室(造園管理学)、造園植物学第一研究室、造園植物学第二研究室、造園工学研究室。 4.1 造園学科指針第3号『現代社会と造園学』を発行。	自然環境保全法 都市公園等整備緊急措置法 都市公園等整備5カ年計画発表 「庭」創刊 広域公園の設置開始	沖縄復帰(沖縄県復活) 日中国交正常化 田中角栄「日本列島改造論」 高松塚古墳で極彩色壁画発見 国連人間環境会議 山陽新幹線、新大阪〜岡山間開業
昭和48年	1973	4.1 造園学科指針第4号『環境計画の科学』発行。 10. 農大主庭(図書館前)をスロームを基調に設計整備(江山正美設計)、園路広場植栽が完成し、その間にNHK・テレビがとりあげた。 10.16 造園学科『本学の環境整備について』を全学に配布し、大学全体の環境整備の基本を示し、理解を求めた。 12. 父兄会の援助により造園学科監修の学術映画『環境計画の科学—これからの造園学』を完成。	資源エネルギー庁設立 都市緑地保全法 工業立地法改正 日本緑化センター設立 日本道路緑地保全協会発足 日本植木協会設立 日本造園組合連合会設立 緑の国勢調査開始 造園技能士制度制定 「緑化産業新聞」創刊 「グリーンエイジ」創刊	オイルショック 江崎玲於奈・ノーベル物理学賞受賞 東独、北ベトナムと国交樹立
昭和49年	1974	4.1 大学院農学専攻内に造園学特論が新設され、造園の修士、博士課程が発足。 4.1 造園学科指針第5号『環境計画の科学』発行。 8.18 造園学科創立50周年を記念して「アメリカ文明の長短をさぐる一研修旅行」を実施、卒業生25名参加(9月1日迄、カナダ、アメリカの国立公園、都市公園、広場等を視察)。 10.31 造園学科創立50周年を記念して、大学に礎石(Milestone、江山正美設計・本小松石を建立、除幕寄贈(併せて収穫祭優勝杯2個を農友会に贈呈)。 11.28 造園学科創立50周年記念式典挙行(京王プラザホテル)、併せて上原先生に50周年を記念して記念品(卒業生からの寄金)を贈呈。	国土庁設置 国土利用計画法 生産緑地法公布 日本公園緑地管理財団設立 ナチュラリスト制度(富山県) 東海道自然歩道開通 国立公害研究所設置 国営武蔵丘陵森林公園(初の国営森林公園・明治百年記念)	地価高騰 佐藤栄作ノーベル平和賞受賞 山陽新幹線開通
昭和50年	1975	4.1 造園学科指針第6号『未知に挑む』発行。 4.1 農場の園芸部造園係を造園部と改める。 10. 造園学科創立50周年記念事業として『東京農業大学造園学科卒業生名簿』発行。 11.8 上原敬二先生、名誉教授となる。 『造園研究』No.1発行。	文化財保護法改正(重要伝統的建造物群保存地区制度)、環境庁第1回緑の国勢調査発表、日本造園組合連合会発足、造園施工管理技術検定制度制定、宅地開発公団設立	沖縄国際海洋博覧会開催 新幹線博多まで運転開始 ベトナム戦争終結
昭和51年	1976	4.1 学科学生定員が80名から120名に。 6.7 本学科創立者上原敬二先生からの御芳志を基金として、優秀な卒業論文を対象とする『上原賞』を設定した(昭53以降は江山賞ができたので造園植物部門の卒業生を対象とするようになった)。 11. 井下清記念図書受入。	都市公園法改正 都市緑化対策推進要綱 日本造園景景協会発足(旧ガーデン協会) 『日本庭園史大系』(重森三玲・完途)完結	ロッキード事件発覚 天皇在位50周年式典開催 郵便料金値上げ 公共事業による遺跡の破壊増加で埋蔵文化財保存の訴訟増加
昭和52年	1977	2.5 江山正美教授退職記念講義で“Cherish your SCAPETECTURE”を語る。 3. 江山正美先生古稀祝賀記念事業委員会による記念出版として『スケープテクニク・明日の造園学』発刊。 3.17 18期生の寄金と林弥栄教授の御厚意により、農大主庭にベニバナトチノキを移植。 4.1 小澤知雄(農学博士)学科長就任。(学科主事・77.4-79.3 永嶋正信/79.4-81.3 平井昌信/81.4-83.3 進士五十八) 5. 江山正美先生、名誉教授となる。 5. 内山正雄教授、日本造園学会会長就任(-79.4)。 11. 造園学科全教職員参加によるプロジェクト研究「生活環境における花と緑の心理的効果に関する調査研究」が行われた(東京農業大学農学集報・特別号第1号、1978.1)。	三全総 「緑のマスタープラン策定の推進について」都市局長通達 『日本公園緑地発達史』(佐藤昌) 『スケープテクニク』(江山正美)	日本人の9割が中流意識 アジア初の社会主義インターナショナル会議を東京で開催

◇東京農業大学造園科学科の設立と歩み◇

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
昭和53年	1978	4. 従来の『造園学科指針』の考え方を受け継ぎ、新たに『造園学科案内』を発行。 4.1 造園実習のクラス編成をA・Bクラスに分け、金曜・A・B隔週、終日で年10～12回実施(根巻・移植/整姿・剪定/圃場管理・支柱工/踏躰/石張工/四ツ目垣/石組/作庭/機械/土壌調査及び分析検定)。 5. 13号館屋上庭園(江山正美設計:ちえいの庭)完成。 6. 故 江山先生東京農業大学造園学科葬挙行。 6. 故 江山先生(1978.6.20逝去、本学名誉教授、元造園学科長)の御遺族からのご芳志を基金に、優秀な卒業論文(特に造園計画・施工部門)を対象とする『江山賞』を設定した。 7. 8『東京緑友会』発足。これ以前京都、神奈川、東海に、これ以後、北海道、埼玉、福岡、千葉等に、造園OB中心の同窓会が結成される。 7. 1号館(旧)南西隅に故江山正美名誉教授遺愛のイヌシデを植樹(2014年現在、樹齢48年)。	都市緑化のための植樹等5ヵ年計画 『造園ハンドブック』(日本造園学会) 『日本公園百年史』(日本公園百年史刊行会)	日中平和友好条約調印 成田空港開港
昭和54年	1979	4. 『造園学科案内』(1979年版)を発行。 10. 1 植樹委員会(小澤知雄、林弥栄他)により農大キャンパスの植樹計画が策定され、以降約3,400本が植栽された。 10. 旧1号館中庭を造園学科の設計で広場型に改造。	特定住宅市街地総合整備促進事業 環境庁・富士山グリーン作戦 『緑の東京史』	インベーダーゲーム大流行 元号法施行 大学共通一次試験実施 奈良市で太安万侶の墓誌出土、
昭和55年	1980	8. 1 新築11号館として造園学科研究棟完成移転、6研究室、演習室、製図室等同棟内に配置し、研究室名称を改称(カッコ内は旧名称)。 庭園学・造園学原論研究室(計1)、都市緑地計画学研究室(計2)、風景計画学研究室(計3)、造園地被・植栽学研究室(植1)、造園樹木学研究室(植2)、造園工学研究室(同)。主な施設/第一製図室(120名収容)/第二製図室(80名収容)/造園工学演習室(100名収容)/造形演習室(100名収容)/造園実習園場(本学厚木農場内) 9. 『造園学科案内』(三訂版)を発行。 10. 中国林業技術交流団が農大造園学科を訪問。	地区計画制度(都市計画法改正) 日本造園設計事務所連合を日本造園コンサルタント協会に改称 住宅・都市整備公団設立	イラン・イラク戦争 衆参初の同日選挙 民法及び家事審判法改正 東大寺大仏殿大修理
昭和56年	1981			スペースシャトル打ち上げ
昭和56年	1981	2. 11号館前にハナミズキとソメイヨシノが列植される。 4. 推薦入試制度による初の新入生入学。以後この制度が多様な学生入学の契機となる。 4. 『林弥栄先生の古稀を祝う会』による記念出版として『樹木とともに五十年—林弥栄先生古稀記念論文・業績集』発刊。 5. 小澤教授、日本造園学会会長就任(—83.4)。 5. 中国林業教育考察団が学科を訪問。 5. 25期卒業生が造園学科旗を寄贈。 7. IFLA世界学生競技設計(テーマ:フロンティア・ランドスケープ)に造園学科・都市緑地計画学研究室の学生作品が2席に入選する。 11. 故上原敬二先生(1981.10.24逝去、享年92歳。叙勲四等旭日小綬章、叙従五位、本学名誉教授、元造園学科長)の葬儀挙行。	日本住宅公団と宅地開発公団が合併改組され、住宅・都市整備公団が発足 広場公園(ポケットパーク)を公園緑地整備事業のひとつとして制度化	初の「北方領土の日」開催 ローマ法王ヨハネ・パウロ2世来日 福井謙一・ノーベル化学賞受賞
昭和57年	1982	3. 造園学科記録82—1～3号として佐藤昌、高橋進、針ヶ谷鐘吉各先生の著作目録発行。 4. 編集も新たに『造園学科指針』と『造園学科案内(リーフレット式)』を発行。 4. 造園に関わるあらゆる図面や作品記録を収集し、教育・研究で活用できるよう検索システムを備えて保存することを目的として造園学科内に「造園図面ライブラリー」を開設。 5. 29 高橋進先生の著作『風景美の創造と保護』出版記念会開催(風景計画学研究室+造園観光研究会主催)。 5. 29 北京市園林緑化考察団が農大造園学科を訪問。 6. 造園学科記録82—4～6号として上原敬二、江山正美、林弥栄、各先生の著作目録発行。 9. 造園学科記録82—7号『平山勝蔵先生の著作』を発行。 10. 『造園学論集第1号特集「造園大賞」業績・作品』80p.を発行。 10. 故上原敬二名誉教授の蔵書が大学に寄贈され、図書館に『上原敬二氏記念文庫』開設。	昭和記念公園(東京) 桂離宮・初の全面解体修理 横浜みなとみらい21開発に着手	五百円硬貨発行 東北新幹線(大宮～盛岡)、上越新幹線(大宮～新潟)開業 フォークランド紛争
昭和58年	1983	1. 『造園学論集第2号優秀卒業論文要旨(1975年度—1975年度)』23p.を発行。 3. 『造園学論集第3号優秀卒業論文要旨(1976年度—1981年度)』147p.を発行。 4. 1 金井格学科長就任。(学科主事・83.4—85.3近藤三雄)。 造園実習内に「花壇実習」をとり入れる。 8. 造園学科記録83—1号『戸野琢磨先生の著作』を発行。 11. 日本造園学会関東支部設立総会、第1回支部大会を農大で開催(支部長に金井格教授就任)。造園学科内に日本造園学会関東支部の事務局が置かれる。以後、支部大会、例会、部会、幹事会が農大内を中心に活発に開催される。	市街地住宅総合設計制度 HOPE計画制度 東京ディズニーランド開園(千葉)	ファミリーコンピュータ発売 全国初の比例代表制選挙

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
昭和59年	1984		湖沼水質保全特別措置法	第3セクター設置ブーム
昭和59年	1984	2.28 本間啓教授逝去。 3. 造園学科記録83-2、3号として龍居松之助、永見健一両先生の著作目録発行。 4. 小澤知雄教授、日本芝学会会長就任。 4. 造園学科内に「学科史料室」を開設。 4. 1年生学外オリエンテーション(於:富士農場)に、造園フィールドゼミを導入。 7. 造園学科創立60周年記念事業として『東京農業大学造園学科卒業生名簿』および『造園学科六十年史』を出版。 10.1 小澤知雄教授(一89.3)、農大成人学校長就任。造園学科各教員も園芸・造園科の講義を担当。	東京都・「緑の倍增計画」を策定 建設省・都市景観懇談会設置	コアラ来日 グリコ社長誘拐事件(グリコ・森永事件に発展)
昭和60年	1985	3.『造園学論集第4号』発行。(以降86.3『第5号』、87.3『第6号』、88.3『第7号』、89.3『第8号』発行) 4.1 鈴木忠義(農学博士)学科長就任。(85.4-87.3 学科主事・荻茂寿太郎) 3.造園学科指導の学術映画『用と景～現代造園の視点～』(農大父兄会+図書館制作)完成。 5.22 IFLA日本大会国際造園学生競技設計(テーマ:環境と創造)審査会開催 於造園学科。造園学科3年生学生グループ作品入選。 6.7 北京林業大学孟兆禎先生の講演会開催(演題:中国造園事情・中国庭園の構成と技法)。 6.造園学科創立60周年記念事業として『造園用語辞典』(535p、解説語彙2300語、彰国社刊)出版。 9.21 龍居松之助先生生誕百年記念会開催(農大旧図書館内視聴覚ホール)。 11. 緑友会の全国組織「東京農業大学緑友会」発足。	オゾン層保護に関する条約 『宗教緑地論』(前島康彦)	つくば科学万博開催(茨城) 奈良斑鳩の藤ノ木古墳より朱塗りの家形石棺出土
昭和61年	1986	2.25-3.3 造園学科「造園特別教育プログラム」のセミナー開催。台湾の研修生18名に修了証。	公園施設賠償保険 「季刊ジャパンランドスケープ」創刊	チャルノブイリ原発事故 男女雇用機会均等法 ハレー彗星接近
昭和62年	1987	4.1 平野侃三(農学博士)学科長就任。(学科主事87.4-89.3麻生恵/89.4-91.3小林章) 5. 内山正雄先生、客員教授となる。5.塩田敏志教授(農学博士)、日本造園学会会長就任(一89.4)。 10. この年、造園学科1年生の体育実技は農大旧浦和総合運動場にて実施。 11. 造園学科記録87-1号『内山正雄先生の著作』発行。 11.25 内山正雄先生退職記念会開催。内山正雄編『都市緑地の計画と設計』出版。	四全総 総合保養地域整備法(リゾート法) 集落地域整備法	国鉄民営化 利根川進・ノーベル医学・生理学賞受賞
昭和63年	1988	3.25 韓国ソウル大専攻農科大学にて造園学科の学生と風景計画学研究室の学生を中心に交流会。 4.1 造園総合演習Ⅰ～Ⅳを柱とし、造園学科のカリキュラムを改定。 7.塩田教授、日本学術会議会員就任(一91.6)。 10. 造園観光研究会『観研30年史』発行。	特定物質の規制等によるオゾン層の保護に関する法律	青函トンネル開業・瀬戸大橋開通 ベレストロイカ 「ふるさと創生」1億円交付決定 リクルート事件
昭和64年 平成元年	1989	4. 小澤知雄先生、名誉教授となる。 4. 造園総合演習Ⅰ(ランドスケープ・ウォッチング入門)開始。2年生のフィールドでの学習を充実。新カリ造園実習開始(飛石・つくばい、樹木の栽培管理、修景地維持管理、機械、丁張、垣根)、従来の4年次から2年次担当に。 9.25-27 造園総合演習Ⅱ開始。2年生120名と担当教員が富士畜産農場に宿泊、集中演習開始。 10.24 小澤知雄先生の退職記念会開催。『グラウンドカバープランツ』出版。 11. 造園学科記録89-1号『小澤知雄先生の著作』刊行。	土地基本法	1.6昭和天皇崩御(平成に改元) 天安門事件 ベルリンの壁崩壊 消費税スタート 佐賀で吉野ヶ里遺跡発見
平成2年	1990	4.1-9.30 国際花と緑の博覧会、大阪にて開催。造園学科教員も審査員等で参画。 4.1 大学院農学研究科造園学専攻(修士課程)発足。塩田教授専攻主任就任。(91.4-専攻主事 荻茂助教授) 4.1 造園総合演習Ⅰテキスト『ランドスケープ・ウォッチング入門』(農大出版会)出版。 4.6 造園学科新入生202名、そのうち女子54名。造園学専攻修士1年生(M1)8名入学。 4. 造園総合演習Ⅲ開始。3年生が厚木中央農場を対象に計画演習。 9. IFLAノルウェー大会・国際学生競技設計(テーマ:水と出合う空間)に造園学科学学生グループ作品がNLA受賞。 9.25 造園総合演習Ⅱテキスト『キャンプ場の計画入門』出版(2版より『サイトプランニング入門』と改題)。 10.8 タイ王国チェンマイ大学農学部長が農大国際交流センターを通じ造園学科訪問。 11.14 「造園OB大専攻」を東京緑友会が開催(第1回近藤三雄教授、以降各教員が講義)。	多自然型川づくりの通達 うるおい・緑・景観モデルまちづくり制度	バブル崩壊 国際花と緑の博覧会(大阪) 東西ドイツ統一

◇東京農業大学造園科学科の設立と歩み◇

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
平成3年	1991	4.1 永嶋正信学科長就任。(91.4-93.3学科主事濱野周泰) 4. 造園総合演習Ⅳ開始、4年生が安行、塩山(次年度から福田)の産地見学、作品見学、石組モデル、実施設計。造園特別演習も開始、卒論の演習や多彩な非常勤講師陣の演習、造園実習の内容に創造実習を追加。 4. アシスタントシップ(TA)制を採用。大学院生が演習・実習のティーチングアシスタントとに採用 5. 平野侃三教授、日本都市計画学会会長就任(-93.1)。 5.18 東京農業大学創立百周年記念式典開催。造園学科教員は百周年記念事業の各部門に活躍、造園学科OBも協力。 10.1 進士五十八教授、学生部長就任(-93.9)。	樹木医認定制度発足	湾岸戦争 ソ連解体 雲仙岳で火砕流発生
平成4年	1992	3. 造園学専攻から初の修了生、アジア地域初のMLA。造園学卒業生が7000名を超える。この年、従来の「卒業証書」から「学位記」に変更。 3. 『造園学論集9号』発行。 4. 臨時定員増により造園学科学科の定員は200名に(平成11年度まで)。 4. 造園実習の内容に作庭実習を追加。 10. 日本造園学会関東支部10周年記念大会開催 於農大。農大学生が呼びかけ、学会内に学生セッションを初めて設ける。	都市計画法改正(市町村マスタープラン制度) 定期借地権創設(借地借家法) 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律	地球環境サミット 日本が「世界遺産条約」を締結 国連環境開発会議(アジェンダ21)の採択) 生物の多様性に関する条約 PKO協力法案可決
平成5年	1993	4.1 近藤三雄教授学科長就任。(93.4-学科主事鈴木誠) 4. 学士編入および他大学からの編入学生の受け入れを開始。共に2年次、3名編入。 4.16 オーストラリア、クィーンズ大学のジョージ・ウィリアムス先生造園学科を訪問。 10.1 進士五十八教授、総合研究所長就任。 10.1 平野侃三教授、富士畜産農場長就任。 10.1 金子忠一講師、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学に1年間の依命留学。 11. 北沢清助教授労働大臣「功労賞」受賞(技能検定委員として)	環境基本法	Jリーグ開幕 北海道南西沖地震 東京サミット
平成6年	1994	2.25 小澤知雄先生、勲四等瑞宝章叙勲祝賀会開催。 4. 大学教養課程の改組に供ない、従来の6研究室に「造園共通研究室」が加わり、7研究室体制となる。 5.18 造園学科学科70周年記念式典。『東京農業大学創設70周年記念卒業生名簿／七十周年史』発行。	「緑の基本計画」制度化 日本造園学会誌「造園雑誌」を「ランドスケープ研究」に改称	青森県で三内丸山遺跡発見 関西空港開港 大江健三郎・ノーベル文学賞受賞
平成7年	1995	10. 進士五十八教授 農学部長に就任。近藤三雄教授 学生部長に就任。 10. 蓑茂寿太郎教授造園学科学科長就任。(学科主事-96.3鈴木誠、96.4-高橋新平) 12.18 号館完成にともない1階に200人収容の学部共通演習室、3階にコンピューター演習室を整備。12.『造園学論集別冊第1号』発行	生物多様性国家戦略 地方分権推進法 「季刊ランドスケープデザイン」創刊	阪神・淡路大震災 地下鉄サリン事件
平成8年	1996	4.『造園学科学科指針』をB5版に改定。 5. 造園学科学科70周年を記念し、卒業生の寄付金を基に企画された「造園情報センター」が11号館5Fに開設。 5. 1995年度の卒業論文の要旨をまとめた「卒業論文要旨集」が編集される(以後毎年編集される)。 8. 高校生向けのキャンパス見学会(毎夏開催オープンキャンパス)に際し学科教員・学生有志が学内美化のためのグラウンドワークを開始。	文化財保護法改正(文化財登録制度創設) 日本造園学会『ランドスケープ大系』発刊開始	原爆ドームが世界遺産に登録 O-157が全国で猛威
平成9年	1997	3. 「造園学論集」別冊第2号発行。 6. 風景計画学研究室が長年関与してきた新潟・巻機山での景観保全活動が第15回朝日森林文化賞(巻機山景観保全ボランティアーズ)を受賞。 11. 日本造園学会と韓国造園学会による初の日韓国際シンポジウム「ウォーターフロントのランドスケープ」を東京農業大学にて開催。 12. 「造園学論集」別冊第3号発行。	環境影響評価法、地球環境問題に関する行動計画	温暖化防止京都議定書締結 アイン文化振興法成立 英領香港が中国に返還
平成10年	1998	3. 「造園学論集」別冊第4号発行。 4. 学部改組に伴い、地域環境科学部(森林総合科学科、生産環境工学科、造園科学科)が発足。進士五十八教授 初代地域環境科学部長に就任(-99.7)。 4. 蓑茂寿太郎教授初代造園学科学科長に就任(学科主事98.4-00.3金子忠一、00.4-鈴木貞次郎)。従来の7研究室から3分野12研究室体制がスタート。造園学科学科臨時定員増(120名定員を200名に、平成10~11年度)。大学院造園学専攻修士課程定員を8名から12名に改定。学科教育の一環として公務員志望者、留学生・留学希望者、造園業後継者・起業者を対象として特別プログラム(チューター制)を導入。	五全総 地球温暖化防止に関する法律 中心市街地活性化法	農政改革大綱 NPO法

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
平成11年	1999	5. 進士五十八教授 日本造園学会会長就任(-01.5)。 7. 第10代東京農業大学学長に進士五十八教授就任(短期大学長を兼任)。 第7代東京農業大学成人学校校長に近藤三雄教授就任(-04.3)。 9. 11号館4階に大学院生用ネットワークルーム整備。 9. 鈴木誠助教授、米国・カリフォルニア大学バークレー校に1年間の依命留学。	日本造園コンサルタンツ協会がランドスケープコンサルタンツ協会に改称	PF1法 食料・農業・農村基本法
平成12年	2000	3. 大学院造園学専攻修士課程10周年を記念し『造園学論集第12号修士論文要旨集1992-2000』発行。	大深度地下の公共的使用に関する特別措置法 国際園芸・造園博覧会(淡路島)	地方分権、循環型社会形成基本法 旧石器発掘ねつ造事件 白川英樹・ノーベル化学賞受賞
平成13年	2001	3. 「造園学論集第13号」、「造園学論集 別冊第5号(博士論文梗概集1)」発行。 4.1 根本正之教授学科長就任(学科主事02.3-鈴木貞次郎、02.4-服部勉) 4. 「造園学論集 別冊第6号(博士論文梗概集2)」発行。 5. 「造園学論集 別冊第7号(博士論文梗概集3)」発行。 5. 日本造園学会全国大会を東京農業大学にて開催。 7.11号館6階大学院生ブース、5階GISルーム整備。 8. 『1級造園施工管理技士試験短期総仕上げと演習問題』(東京農業大学造園技術研究会 編)刊行 12.20 金子忠一講師「都市公園の管理計画指針の基本構造に関する研究」によりわが国初の「博士(造園学)」を授与される。	東京における自然の保護と回復に関する条例	小泉内閣発足 省庁再編 国立研究所等の独立行政法人化 能楽が世界無形文化遺産に登録 アメリカで同時多発テロ事件発生
平成14年	2002	3. 造園科学科から学位記「学士(地域環境科学)」初の卒業生。 4. 学部共通テキスト『地域環境科学概論』刊行。 5. 『造園用語辞典 第2版』刊行。 9. 『地域環境科学概論 II』刊行。 9. 荒井歩助手、英国・リトルカレッジに1年間の依命留学。 10. 日本造園学会関東支部第20回支部大会を開催。 11. 東京農業大学地域環境科学部造園科学科プログラム(農学一般関連分野)として日本技術者認定機構(JABEE)の試行審査を受審。	都市再生特別措置法 登録ランドスケープアーキテクト(RLA)制度 文化財庭園保存技術が国の選定保存技術に選定	日本・北朝鮮、初の首脳会談
平成15年	2003	3.11号館6階ランドスケープ資源植物分野実験室整備。 4.1 麻生恵教授学科長就任(学科主事-04.3服部勉、04.4-阿部伸太) 5. 『1級造園施工管理技士試験短期総仕上げと演習問題 第二版』刊行 6. 進士五十八教授 日本都市計画学会会長就任。 10. 日本造園学会関東支部第21回支部大会(設立20周年記念)を開催。	指定管理者制度発足	有事関連三法成立
平成16年	2004	3. 「造園学論集第14号」、「造園学論集 別冊第8号(博士論文梗概集4)」、「造園学論集 別冊第9号」発行。 4. 蓑茂寿太郎教授 東京農業大学副学長(大学改革推進担当)に就任。 4. 樹木医補資格養成機関に認定。 4. 近藤三雄教授、(社)日本芝草学会会長就任(-08.3) 5. 造園科学科80周年記念式典。80周年記念事業の一環として造園科学科教授8名による東京農大カレッジ講座「庭園から都市の緑の創造へ～造園学の80年」を開講。(-04.7、全8回)。 6. 近藤三雄教授 日本芝草学会会長就任。 11. 東京農業大学地域環境科学部造園科学科プログラム(農学一般関連分野)として日本技術者認定機構(JABEE)の本審査を受審。 11. 天空の和みの庭(農大一高、屋上庭園制作、都市緑化技術研究室・造園地被学研究室) 12. 美しい国づくりランドスケープアーキテクト展(食と農の博物館、代表・蓑茂寿太郎教授-05.3)	景観緑三法、文化的景観創設 独立行政法人都市再生機構発足	自衛隊、イラクへ派遣 新潟中越地震発生
平成17年	2005	3. 本年度卒業生よりJABEE、樹木医補の認定が開始される。 3. 大学院造園学専攻修士後期課程より初の「博士(造園学)」3名が誕生。 3. 『東京農業大学地域環境科学部造園科学科八十年史』発行。 3. 「海外の日本庭園シンポジウム～海を渡った日本庭園のこれまでとこれから～」を鈴木誠助教授をはじめ海外からの研究者を交え開催。 4. 小林章教授学科長就任(学科主事-06.3 阿部伸太、06.4-栗田和弥) 4. 榎田信彌講師、日本桜草展開始(「食と農」の博物館、植物生態学研究室)、以降毎年恒例となる。	愛・地球博開催(愛知)	郵政民営化法成立

◇東京農業大学造園科学科の設立と歩み◇

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
平成18年	2006	1.「造園学論集 第15号」発行。 3. 目黒十五庭(目黒区役所屋上庭園制作、都市緑化技術研究室・造園地被学研究室) 3.「造園学論集 第16号」発行。 4. 本年度入学生より、測量士補の資格習得が適用される。 4. 麻生恵教授、エクステンションセンター長就任(-24.3)。 5.「造園学論集 別冊第10号」発行。 11. 環境誌展(「食と農」の博物館、造園樹木学研究室-19.4)	防災公園の創設	改正教育基本法成立
平成19年	2007	4. 屋上緑化・壁面緑化展(「食と農」の博物館、都市緑化技術研究室・造園地被学研究室-11.) 4. 巻機山展(「食と農」の博物館 巻機山企画展実行委員会-8.) 4. 進士五十八教授、紫綬褒章を受章。 5. 荻茂壽太郎教授、(社)日本造園学会会長就任(-09.5) 5. 『1級造園施工管理技士試験短期総仕上げと演習問題 第三版』刊行。 9. 高橋新平准教授、豪州・西オーストラリア大学に1年間の依命留学。 9.「京都研修」(京都迎賓館、桂離宮、修学院離宮)進士五十八教授の企画で開始。 9.「造園学論集 別冊第11号(博士論文梗概集5)」発行。 10. 日本造園学会関東支部第25回支部大会を開催。	21世紀観光立国戦略、文化庁・歴史文化基本構想の策定推進開始	参議院選挙で自民党大敗 高松塚古墳の石室解体 石見银山遺跡・世界遺産に登録
平成20年	2008	2.「造園学論集 別冊第12号」発行。 4. 鈴木誠教授、学科長就任(学科主事-10.3荒井歩) 4. 小林章教授、短期大学部環境緑地学科長就任(短期大学部教授併任-09.3) 4. 麻生恵教授、日本レジャー・レクリエーション学会理事長に就任(-14.3) 9.「造園学論集 別冊第13号(博士論文梗概集6)」発行。 11. 2009年の上原敬二先生・生誕120周年を記念し、地球を庭にした「造園」の仕事と魅力展を開催(「食と農」の博物館、造園科学科-09.5)	観光庁設置、地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律(歴史まちづくり法)公布	北海道洞爺湖サミット
平成21年	2009	3. 馬事公苑前緑地整備(世田谷区との協働事業として壁面緑化などを制作、都市緑化技術研究室・造園地被学研究室)3.造園科学科紹介DVD初版完成(東京農業大学教育後援会制作) 3.30 造園科学科ブログ「ランドスケープの広場」開設。 5. 『「造園力」で地球を庭に』刊行。 5. 改訂版『人のつくった森—明治神宮の森「永遠の杜」造成の記録』刊行。 9. 阿部伸太准教授、仏国・ポーヴェ・ラ・サール・ポリテクニク学院に1年間の依命留学。 9.「ランドスケープデザイン30年の軌跡」展～都市に暮らし、自然と遊び、歴史に学ぶ～(「食と農」の博物館、造園科学科客員教授 戸田芳樹)	都市公園安全・安心対策緊急総合支援事業創設 歴史的環境形成総合支援事業創設	裁判員裁判開始
平成22年	2010	3.「造園学論集 別冊14号(博士論文梗概集7、修士論文要旨集2)」発行。 4. 濱野周泰教授、学科長就任(学科主事-12.3山崎元也)。 4. 神奈川県川崎市環境局と地域環境科学部間で「かわさき多摩丘陵グリーン・コンソーシアム」を締結。1年生の造園体験演習などの教育や研究の場として活用開始。 4.花ひらき、美しく舞う緑の「造園文化」～江戸・明治に見るはじめての物語り～(-9. 「食と農」の博物館、近藤三雄教授企画) 9. 11号館各研究室改装整備。 11. 鈴木貢次郎准教授、中国・中国科学院昆明植物研究所に半年間の依命留学。	都市公園技術標準改正 東京臨海広域防災公園開園 生物多様性自治体会議(COP10)が名古屋で開催	平城遷都1300年祭 東北新幹線が青森まで延伸
平成23年	2011	3.「造園学論集 別冊15号」(博士論文梗概集8、修士論文要旨集3)発行。 4.『造園用語辞典 第三版』刊行 5. (社)日本造園学会 東日本大震災復興支援緊急集会開催。 7. 新1号館竣工(旧体育館跡) 8. 近藤三雄教授ら、福島県郡山市で新しい方法による芝生の除染の実証実験実施。 11. (社)日本造園学会 平成23年度全国大会を開催(東日本大震災の延期を受けて開催)	屋外広告物法改正 平泉・小笠原諸島、世界遺産に登録	東日本大震災 福島原発事故発生 九州新幹線全面開業

年号	西暦	東京農業大学・造園科学科のあゆみ	造園関係事項	社会背景
平成24年	2012	<ul style="list-style-type: none"> 2. 東京農業大学国際日本庭園研究センター設置(代表鈴木誠教授)。 3. 「造園学論集 別冊16号」発行。 4. 金子忠一教授学科長就任(学科主事-14.3水庭千鶴子) 4. 麻生恵教授、地域環境科学部長就任。 4. 鈴木誠教授、エクステンションセンター長就任。 6. 鈴木誠教授、日本庭園学会会長就任。 9. 服部勉准教授、米国・ポートランド日本庭園(オレゴン日本庭園協会)に1年間の依命留学。 9. 第29回全国都市緑化フェアTOKYO(井の頭恩賜公園会場)に「心と体を豊かにする庭」を造園科学科として制作・出展。 9. 「造園学論集 別冊17号」発行。 	<ul style="list-style-type: none"> 都市公園法運用指針の改定 社団法人日本造園学会が公益社団法人化 	<ul style="list-style-type: none"> 山中伸弥、ノーベル生理学・医学賞受賞 東京スカイツリー完成
平成25年	2013	<ul style="list-style-type: none"> 3. 本年度卒業生より自然再生士補の資格取得が適用される。 3. 目黒天空庭園(大橋ジャンクション屋上庭園制作、近藤三雄教授 企画・設計監修) 10. 日本造園学会関東支部第31回支部大会(設立30周年記念)を開催。 12. 北京林業大学園林学院と学術協定を締結。 	<ul style="list-style-type: none"> 富士山が世界遺産に登録 JLAU(一般社団法人 ランドスケープアーキテクト連盟)発足 三陸復興国立公園創設 	<ul style="list-style-type: none"> 2020年の夏季オリンピック・パラリンピックが東京に招致決定
平成26年	2014	<ul style="list-style-type: none"> 1. 農大アカデミアセンター利用開始(図書館・事務棟) 2. 旧1号館解体完了 2. 『1級造園施工管理技士試験短期総仕上げと演習問題 第四版』刊行。 3. 造園科学科紹介DVD第2版完成(東京農業大学教育後援会制作) 4. 高橋新平教授、学科長就任(学科主事-國井洋一) 4. 金子忠一教授 学生部長就任。 4. 濱野周泰教授、生物環境調整室長就任。 5.11 造園科学科90周年記念式典。 	<ul style="list-style-type: none"> 3. 慶良間諸島国立公園(沖縄・渡嘉敷村、座間味村)わが国31番目の国立公園に指定 	<ul style="list-style-type: none"> 4. 消費税8%に引き上げ
令和6年	2024	東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科創立100周年		

2. 教育カリキュラム

2-1 カリキュラムの大枠

東京農業大学地域環境科学部造園科学科の教育カリキュラム構成を分野や実際の学年配当に沿って示したのが表2-1です。地域環境科学部を構成する3つの学科に共通するプログラムとして「総合教育科目」と造園科学科の「専門教育科目」それに「全学共通科目」との複合的な構成となっています。学部共通科目は、地域環境科学部に属する学生としての資質を身につけるために、基礎的な知識教育としてなされます。ここでは、地域環境を構成する基本要素（植物、土、水）に係わる基礎教育、地域環境問題に関する見方の教育を行い「学習の動機づけ」をねらいとしています。

それに併行して開講される造園科学科の専門教育科目は、「環境計画・設計」、「ランドスケープ資源・植物」、「景観建設・技術」の3分野の専門科目を基幹として、分野横断的な基礎の科目、総合化の科目で構成され、これより「ランドスケープ空間と手法の知識教育」を実施しています。また東京農大の実学主義の精神を踏まえ、総合化の科目として位置づけられる分野ごとの演習や「造園総合演習」「専門特化演習」が1年次から4年次まで配され、「統合と自信づけ」をねらいとした教育を進めます。

2-2 地域環境科学部で開講する学部共通科目

地域環境科学部の教育は、生物に対する深い理解を基調として、自然と人間の調和あるいは地域環境と生物資源の保全・利用・開発・整備・管理のための科学技術の確立を目指すものです。

そこで、次のような学問分野が基本となり、それぞれの系から学部共通科目が設定されています。①導入科目：地域環境科学を学ぶにあたり、基礎となるものの見方を学びます。②人間関係科目：地域環境科学の本質や倫理について学ぶ科目です。なお、「技術者倫理」は造園科学科の必修科目です。必ず履修して下さい。③社会関係科目：地域環境科学を社会的要素と社会システムとして教育する科目です。④自然関係科目：地域環境科学を自然要素と自然のシステムとして理解する科目です。また課題別科目として、社会において注目されている地域環境科学や農学全般における諸問題・課題を取り上げる各種講義が開講されています。

以上の他、語学科目として英語（必修）および英語関連科目、中国語、ドイツ語などが開講されています。またスポーツ関係科目、就職準備科目、リメディアル教育科目も設定されているので、後述する履修モデルを参考に自分の興味や進路を考慮しながら履修して下さい。

2-3 造園科学科のカリキュラム

カリキュラムの各科目の内容は、毎年4月に配布される「講義要項（シラバス）」、あるいは大学のホームページに詳しく説明されていますので、ここでは造園学教育の全体像が理解できるように、専門科目のねらいを系統分野別、配当学年順に説明します。表2-1と対照しながら内容を理解して下さい。なお（ ）内のFは前期配当、Lは後期配当を示しています。

■総合教育科目

導入科目

フレッシュマンセミナー（1年F必修）

大学での学習、学生生活の過ごし方などキャンパスライフの基礎知識を理解するとともに、造園学を学ぶにあたり、充実したキャンパスライフと明確な大学生活の目標を築くことと、造園を学ぶ上での基本となるモノの見方、考え方といった姿勢を身につけことを目的とする。

共通演習（1年L必修）

大学生活に必要な基礎的学習技術の習得を目的とする。レポート作成・ディスカッション・プレゼンテーションの基礎的な技術を身につける。少人数制グループ学習を基本とし、充実したキャンパスライフにおけるサポートも併せておこなう。

情報基礎（一）（1年F必修）

コミュニケーションの一手段としてのコンピュータを活用した文書、データ作成、プレゼンテーション、あるいは通信に関する基礎的技術を習得する。

情報基礎（二）（1年L必修）

コミュニケーションの一手段としてのコンピュータを活用した文書、データ作成、プレゼンテーション、あるいは通信に関する応用的技術を習得する。

スポーツ関係科目

スポーツ・レクリエーション（一）（1年F選択）

ストレスの多い現代社会にあって、健康を維持・増進するためには、栄養・運動・休養が不可欠であることを様々なスポーツを通して体験的に学習する。

スポーツ・レクリエーション（二）（1年L選択）

学校生活において自己の健康を管理する能力と豊かな生活を営む能力をつけるために、レクリエーションスポーツやゲームを体験する。

■外国語科目

英語（一）（1年F必修）

国際的なコミュニケーションをおこなうための基礎的な言語能力のうち、リスニング（聞き取り）、会話（英会話）を中心とした知識と表現能力を修得する。

英語（二）（1年L必修）

国際的なコミュニケーションをおこなうための基礎的な言語能力のうち、リーディング（読解）あるいは文書作成（英作文）を中心とした知識と表現能力を修得する。

英語（三）（2年F必修）

国際的なコミュニケーションをおこなうための基礎的な言語能力のうち、リーディング（読解）およびリスニング（聞き取り）を中心とした知識と表現能力を修得する。

表 2-1 造園科学科のカリキュラム

区分	1年次		2年次		3年次		4年次	
	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期
	F	L	F	L	F	L	F	L
導入科目	フレッシュマンセミナー	情報基礎(一)	情報基礎(二)					
人間関係科目 (2科目選択必修)	哲学	科学の歴史 文学概論				技術者倫理		
社会関係科目 (2科目選択必修)				日本国憲法 地域と文化	現代社会と経済	国際関係と社会問題		
自然関係科目 (2科目選択必修)	生物学 化学 地学	物理学	統計学					
外国語科目	英語(一) 英語リーディング 中国語(一) ドイツ語(一)	英語(二) 中国語(二) ドイツ語(二)	英語(三)	英語(四)	TOEIC英語初級 科学英語	TOEIC英語中級		
スポーツ関係科目	スポーツ・レクリエーション(一)	スポーツ・レクリエーション(二)						
就職準備科目			キャリアデザイン	ビジネスマナー		インターンシップ		
演習科目		共通演習						
専門共通・創生型科目	地域環境科学概論	地球環境と炭素循環	環境学習と体験活動 源流文化学					
分野横断的な基礎科目	造園科学概論 造園体験演習	環境デザイン基礎演習 花・緑演習	測量実習 CAD及びGIS基礎演習 緑の経済論 ランドスケープ作品論					
環境計画・設計分野の科目		景観論	造園計画学 近代造園史 ランドスケープデザイン論	都市緑地計画学 風景地計画学 日本庭園論 公園マネジメント論 観光計画論	自然保護論 都市および農村計画 ランドスケープ政策論			
ランドスケープ資源・植物分野の科目		植物の生活と活用 造園樹木学	グラウンドカバープランツ 造園植栽学	緑地生態学 造園植栽学	芝生論 植栽基礎論	樹木の保護と管理 緑地の生きもの		
景観建設・技術分野の科目			造園工学基礎演習 測量学	造園施設材料 造園植栽演習	造園工学 造園工学演習	造園施工論 造園施設設計		
学際領域・総合化の科目				造園植栽演習	造園工学演習	造園総合演習 専攻研究	専門特化演習(一) (植物学) 専門特化演習(一) (都市緑化) 専門特化演習(一) (自然再生) 専門特化演習(一) (環境デザイン)	専門特化演習(二) (植栽基礎) 専門特化演習(二) (建築デザイン) 専門特化演習(二) (エンvironmental) 専門特化演習(二) (伝統技法) 造園総合論 卒業論文(卒業制作)(T)
随時開講科目	食料生産と自然環境(農学部) 食の安全(応用生物科学部) 環境と人間(地域環境科学部) 世界の中の農(国際食料情報学部) オホーツク学(生物産業学部) 特別講義(一) 特別講義(二) 特別講義(三) 特別講義(四) インターナショナルスタディーズ(一)(二)		リメディアル教育科目 基礎生物 基礎化学 基礎物理 基礎数学 文章表現		T: 通年科目 ■ 必修科目、選択必修科目			

英語(四)(2年L必修)

国際的なコミュニケーションをおこなうための基礎的な言語能力のうち、リスニング(聞き取り)とリーディング(読解)を中心とした知識と表現能力を修得する。

英語リーディング(1年F選択)

実務において必要な海外の専門的知識を得るための語学

力を養うことを目的とする。読むことを中心に演習を進め、英語力の訓練と、英語圏の文化や社会の紹介の双方を兼ねた演習とする。

TOEIC 英語(初級)(3年F選択)

TOEIC形式のリスニングとリーディング問題の演習を通して、社会で求められている英語の水準を理解する。さ

らに TOEIC 試験を視野に入れた演習をおこなう。

TOEIC 英語 (中級) (3 年 L 選択)

TOEIC 形式の問題演習を通して、社会で求められている英語の水準を理解する。さらに TOEIC 試験を視野に入れ、TOEIC の得点力をつけるべくリスニング・リーディングの力を総合的に伸ばす。

科学英語 (3 年 F 選択)

科学に関する英語文献の読解力を養う。“専門的知識を深めるための英語”を確認し、文献の読み方や専門用語の扱われ方などについて修得する。

中国語 (一) (1 年 F 選択)

初心者向けの入門レベルとし、中国語にとって非常に重要な発音と四声を重点に進める。目、口、耳を使い、基本的な表現を繰り返し練習することによって発音と四声を定着させ、さらに簡単な文型を生かして表現したいことが表現できるようにする。

中国語 (二) (1 年 L 選択)

中国語 (一) で学んだことを基礎に、発音、四声の定着と聴解力・会話力の向上を目指す。文法は中国語 (一) よりやや複雑になるが、ポイントをしっかりおさえ簡単な自由会話ができるようする。

ドイツ語 (一) (1 年 F 選択)

ドイツ語の基礎を学ぶことを目的とし、発音を重視し、基本的な文法事項の学習、日常会話・作文による表現練習、聞き取り、平易なテキストの読解などをおこなう。また学習を通して、ドイツ語圏の社会・歴史・文化に対する理解を深める。

ドイツ語 (二) (1 年 L 選択)

ドイツ語 (一) で学んだことを基礎に、読み、書き、聞き、話す力を総合的に養うことを目標とし、基本的な文法事項の学習、日常会話・作文による表現練習、聞き取り、平易なテキストの読解などをおこなう。また学習を通して、ドイツ語圏の社会・歴史・文化に対する理解をいっそう深める。

■専門教育科目

人間関係科目 (4 科目中、技術者倫理およびもう 1 科目を選び必修とする)

技術者倫理 (3 年 L 必修※)

造園の業務を進める中で造園技術者として守るべき技術者倫理や環境倫理について体系的に整理し、幅広い観点から理解し修得する。また、今日の社会における造園の職能と幅広い職域についての理解を深め、進路選択や造園技術者としてのプロ意識の喚起を促す。

※技術者倫理は造園科学科の必修科目に位置付けられているので必ず履習する。

哲学 (1 年 F 選必)

哲学の主題は、真理、本質、普遍性、論理、因果などである。物事の本質に迫る倫理的思考力・探究力を養うことを目的とし、哲学の主題についてその定義や性質、複数の立場・見解の整理について論じる。

科学の歴史 (1 年 L 選必)

自然科学の歴史的経過、発展軌跡について学ぶ。科学理論の発見に関する歴史に留まらず、発見時の文化や社会との関連も併せて考察する。科学の歴史とは技術の歴史とも関連するため、併せて言及する。

文学概論 (1 年 L 選必)

文学とは芸術であり、審美的な目的や形式を持つものである。東西の文学に親しむことにより、人間とそれらを取りまく環境としての自然の関わりについて考える契機とする。

社会関係科目 (4 科目中から 2 科目を選び必修とする)

日本国憲法 (2 年 L 選必)

憲法の発展の中で日本国憲法の概要や特色を学ぶとともに、大衆社会・資本主義社会・近代化における民主主義や自由主義の意味を考える。

現代社会と経済 (3 年 F 選必)

地域環境の構成要素の中で大きな位置を占める社会的要素、とりわけ経済的条件やそれと密接に関わる地域政策や産業との関係について学ぶ。その中で、地域問題、地域経済政策、地域資源の管理問題について理解を深める。

地域と文化 (2 年 L 選必)

諸地域の習慣・儀礼などを学び、人間の営みの中で伝承されてきた現象の歴史的な変遷について習得することにより、現実社会に生起している問題について考える。伝統的な農村社会との関わりについての理解も促す。

国際関係と社会問題 (3 年 L 選必)

グローバル化が進む現在、国際的問題および関連する国内問題、経済学的、社会学的知見をも含めて国際関係を理解する必要がある。国際社会の諸事象について学ぶとともに、国家間の問題や国境を越えた経済活動についても理解を深める。

自然関係科目 (5 科目中から 2 科目を選び必修とする)

生物学 (1 年 F 選必)

生物学を基礎においた専門科目の講義に対する理解力を深めるとともに、専門科目を履修する際の応用的な学力を養うことを目的とする。特に、植物の構造と機能、植物の生活を中心としながら、自然科学的な法則や原理を理解する。

化学 (1 年 F 選必)

自然界を構成する化学物質に着目し、その性質とその変化を学ぶ。特に、土壌学、分子生物学、植物の環境浄化機能など造園学に必要な基礎的学力を養い、環境や生活に関連する基本的な化学の原理や法則を学習する。

物理学（1年L選必）

造園学における総合的環境エンジニアリングでは、橋梁・土構造物の構造設計および評価をおこなう。そのために必要な力学、水理学などを理解するために、物理の基礎的な内容を学ぶ。

地学（1年F選必）

造園学における土地利用計画などに必要な地質学を学ぶ。

統計学（2年F選必）

造園学における調査分析の対象や方法の基本を理解するとともに、造園計画や各種実験において要求される数理的なものの考え方・捉え方を修得する。具体的にはデータの特徴を数量的に把握する記述統計学の方法と、母集団の標本からその特徴を推定する推測統計学の方法を学ぶ。

この他に、各学部や社会が直面している課題について扱う「課題別科目」、就職活動に必要な情報やマナーを習得する「就職準備科目」、高等学校までの未修得科目を補う「リメディアル教育科目」が設定されている。「講義要項（シラバス）」、または大学のホームページを参考に内容を確認すること。

■専門共通科目

地域環境科学概論（1年F必修）

地域環境科学部が対象とする地球レベルから地域レベルまでの空間体系の中で、地域および地域環境科学の概念、地域環境の捉え方、問題点や課題、地域環境科学の目標を整理し、環境計画の視点から問題解決や目標達成に向けて考える能力を修得する。

地球環境と炭素循環（1年L選択）

環境について学ぶ上での基礎となる身近な問題から地球規模の問題まで幅広い知識を修得する。環境問題に対する世界的議論の成果や推移を理解するとともに、地域環境科学における有効な緑化技術について学ぶ。

■創生型科目

環境学習と体験活動（2年F選択）

様々な現場における環境に関する体験活動を通して、ボランティア活動・市民活動の社会的意義や環境に関する理解を深めるとともに、活動を評価し、コーディネートする能力を養う。

源流文化学（2年F選択）

山村地域の文化、自然、農業など全体的に学ぶ。「流域」を視점에現在農山村がおかれている社会的現状や課題を理解すると共に、課題解決のための対策についても学ぶ。

■分野横断的な基礎科目

造園科学概論（1年F必修）

造園科学の全体像を理解するための科目である。造園科学の対象と領域、造園科学の定義を学ぶ。さらに造園科学の本

質、生物的自然や地球環境に対する造園科学の意義などを踏まえ、造園家の活動と社会からの期待について学ぶ。

造園体験演習（1年F必修）

造園空間に立ち、景観に関心をもちながら、植物材料や土壌、無機材料を実際に触れる。それぞれの材料の特徴（性質）を肌で感じ、空間におけるその存在の意義を知ることを目的とする。当演習を修得後、造園学の各分野を学ぶための動機付けとして位置付けられる演習である。

環境デザイン基礎演習（1年L必修）

造園の計画図・設計図・施工図、報告書などを作成する上で必要な技術の修得を目的とする。形態・寸法・材料によって示される設計図表現、概念・システムが示される計画図表現、地形模型を用いた地形断面の理解、平面および立面のデザインなどを学ぶ。

花・緑演習（1年L必修）

造園空間を特徴づける植物材料としての樹木、草花について、屋外における観察演習を通して実物に触れる。実物を認識することで専門科目としての造園植物関連講義科目の内容に対する理解力を深めると同時に、植物材料に精通した造園設計ができる基礎的および応用的能力を養う。また生理、生態、形態の特徴に基づいた造園植物の取扱いを具体的に体得する。

測量実習（2年F必修）

測量学で学んだ知識をフィールドにおいて体得することを目的とする。トランシット、平板、レベルの器具を用いて測量作業をおこなう中で、基本的な測量の原理や方法、器械操作を体得し、次いでトータルステーション、工事測量（測設）について修得する。

CAD及びGIS基礎演習（2年F選択）

造園分野におけるコンピュータCAD（Computer Aided Design）及びGIS（Geographic Information System）導入の現状とその課題を理解するとともに、汎用CADソフトウェアを用いたいくつかの演習課題を通してCADの実際について学ぶ。具体的には、造園施設の詳細設計、公園施設のデザインシミュレーション、公園の設計などが演習課題となる。

緑の経済論（2年F選択）

造園科学に関する経済的側面についての理解を深める。造園関連企業の経営的課題からみどりの経済的価値や緑地の維持に関わる経済的課題など社会的課題まで学ぶ。さらに世界的視野における環境経済のあり方についても扱う。

ランドスケープ作品論（2年F選択）

造園活動は作庭や住宅地計画からリゾートの企画開発まで、広範な分野への広がりがみられ、それぞれに独自の能力やノウハウが求められる。こうした造園家の創作活動について、多様な活動領域、その役割や使命を理解し、造園作品の制作プロセス、造園家の思想とデザインについて、現在活躍中の代表的造園家による実作品を通じて、モノづくりの心と技術のあり方を学ぶ。

■環境計画・設計分野の科目

近代造園史（2年L必修）

近代および現代の造園の発達について理解し、今後の造園活動への指針を学ぶ。近代造園学／ランドスケープ・アーキテクチャの発祥である「イギリス風景式造園」の流れと「ヨーロッパの近代造園」、その系譜の中で誕生した「アメリカ近代の造園」を学び、これからの造園科学の行方を洞察する。日本の造園史については近代前史としての江戸時代末期以後現代までとする。

造園計画学（2年F必修）

造園の広範多岐にわたる対象の範囲をふまえ、造園計画・設計の目標および手法について、その発展の経緯とともに、造園計画の概念を規模とシステムの確定として学ぶ。計画論、効用論、保全論、利用論、空間論、規模論、参加論、管理論、設計論から造園計画の基礎理論について理解するとともに、造園計画の実際について学ぶ。

都市緑地計画学（3年F必修）

都市の緑地計画の目標と緑地計画の概念、緑地計画の歴史、緑地計画の範囲の理解を目的とする。併せて都市環境保全、都市景観構成、都市防災さらには都市レクリエーションの系統計画の原理と方法、さらに内外における都市の公園緑地の歴史的展開と、それらの計画手法の実際について学ぶ。

風景地計画学（3年F必修）

国立公園などの自然公園や自然性豊かな観光地、リゾート等で代表される自然風景地について、その歴史的展開や社会的役割（環境倫理を含む）、現行制度等を概観する。同時に、資源としての自然環境や景観の取り扱いと、レジャー・レクリエーションや自然教育を中心とした風景地の利用のあり方、さらにそれらを総合した計画の策定方法、施設の設計指針などについて学ぶ。

日本庭園論（3年F必修）

現在「庭園」は、人類の誇るべき文化遺産ともなっている。本講義では、日本をはじめ、西洋・東洋の庭園の歴史や景観構成上の特徴を理解することで、庭園の形態・利用・デザインが自然・風土・社会背景によってどのように成立・発展・変化してきたのかを探究する能力とこれからの庭園・造園の進むべき方向性を理解する能力を得ることを主目的とする。

景観論（1年L選択）

「景観（landscape）」についての基本的知識の理解、歴史的に培われてきた景観文化の知恵、その典型的成果である「風景論」と、そこに見る風景の生かし方、読み方、つくり方、法制度等について学ぶ。また近年になって研究の進展が著しい「科学的景観論」や「景観解析法」、さらには解析・評価と連続した「景観創出手法」への関心を促す。

ランドスケープデザイン論（2年L選択）

デザインの定義と分類、デザインの評価、デザインの性格、空間デザインの特性について学ぶ。さらに、ランドスケープデザインの実践について、その展開史やランドスケープの基本形式と技法、そしてランドスケープデザイナーに注目し、

デザインにおけるコンセプト・メイキング、すなわち概念操作の方法を修得する。

自然保護論（3年L選択）

自然環境保全の概念、歴史的な展開、現状の課題等を理解するとともに、環境アセスメントや自然保護計画など、環境保全、自然保護に関わる技術、実践的な運動、関連する法制度について諸外国の事例を含めて学ぶ。また自然保護教育と環境学習、計画論に触れ、技術者の立場から自然保護のあり方を捉える。

観光計画論（3年F選択）

観光計画の現代的意義と、これを受け止める地域に及ぶ諸関係の認識を深め、観光地計画の基本的考え方を修得する。観光による地域振興のための地域特性の重要性やそれらを活かした地域振興プランの考え方、観光行動（利用）のとりえ方、そして実現化のためのアプローチなどについても学ぶ。

公園マネジメント論（3年F選択）

豊かな地域環境の創造やレクリエーション活動の場として重要となる「公園」の管理運営論について学ぶ。「公園・レクリエーション管理論」を基本理論として、公園資源の保全と活用、利用者サービスの向上、地域の活性化などを目標として、公園緑地を適正かつ最善に維持し、管理運営するためのパーク・マネジメント論の考え方と、その実現のための方法を修得する。

都市および農村計画（3年L選択）

都市と農村の概念、都市化、都市問題、都市計画などの切り口から都市および農村を分析的にみる「地域認識能力」、および地域ブランド化のテクニックを学ぶ。豊かで住み良い環境の創造手段について、特に都市計画の手法、キーワード・農村計画の考え方を理解することを目的とする。今日の問題に対処する基本的考え方や諸外国の都市計画制度を紹介し、造園家として取り組むべき課題について学ぶ。

ランドスケープ政策論（3年L選択）

都市政策や環境政策の現状と動向を造園の視点から学ぶ。また大都市や先駆的な自治体におけるランドスケープ事業の具体的事例を通して、ランドスケープ政策の実際について理解する。さらに諸外国における先駆的なランドスケープ政策の知識について学ぶ。

■ランドスケープ資源・植物分野の科目

植物の生活と活用（1年L必修）

環境問題を含む造園学を学ぶための基礎学として位置付けられる生物学基礎を、応用（利用）を意識しながら学習する。特に花・緑演習と連繋しながら、身近にある植物を主とする生物は、どのような考え方に基づいて分類されているのか理解する。これによって植物の体のしくみやその機能、遺伝的性質や環境との関係を修得する。

造園樹木学（1年L必修）

造園技術者には最低限300種類ほどの樹木に関する知識が要求される。造園で取り扱われる国内外の主要樹木のそれぞれ

◇教育カリキュラム◇

れについて、基本的な分類・生態・生理・生態的特性、応用の視点からの天然・植栽分布、配植や管理法（剪定、施肥）、繁殖法などについて学び、さらに空間別、用途別、立地別等の植栽に関する知識や、健康管理などについて修得する。

グラウンドカバープランツ（2年F必修）

芝生や様々な地被植物による緑化が注目され、また新しい品種が次々に開発されている。こうした地被植物（グラウンドカバープランツ）の定義や種類、地被植物による緑化が注目されている背景、生育特性、各環境地別環境適性、地被植物の用途つまり平面・のり面・垂直面の具体的緑化手法、植栽・管理上の要点、生産と繁殖ならびに地被植物による緑化の効用について学ぶ。

緑地生態学（2年L必修）

在来草本植物や侵入外来植物（雑草）の生理・生態的な特徴を学ぶことで、造園計画・設計の対象となる都市や田園の半自然植生をエコロジカルに利用・管理するための基礎を修得する。具体的な半自然植生の構造と機能について学び、次にそれらの植生の特徴を明らかにするための調査手法や植生（緑地）の評価法について修得する。さらに、伝統的な緑地の復元あるいは植物の多様性に富んだ緑地の造成に必要な植物生態学的知識についても理解する。

造園植栽学（2年L必修）

植物材料関連の基礎科目で修得した知識を様々な造園空間の具体的な植栽の場面に応用することを目的とする。造園植栽の基本的な考え方、拡大多様化する植栽空間での植栽上の留意点、効果的な配植手法、植栽計画、設計の要領、ならびに植栽工事、植栽基盤整備、養生管理の要点など、快適な植栽空間を創出するための手法を学ぶ。

芝生論（3年F選択）

都市公園内の芝生地や各種の競技場（ゴルフ場等含む）などで用いられる主要な芝草類（ターフ）を対象に、その生育特性、生育と環境要因、造成方法、材料生産・繁殖、栽培について学び、公園や競技場の芝生地計画・設計・造成・管理に反映させることを意図する。

樹木の保護と管理（3年L選択）

造園植物を健全に維持するための育成、抑制、保護（農業の取扱い含む）、養生などに係わる管理手法および緑地全体を維持するための植物の管理方法について基礎知識を修得する。特に造園植物は草本（主に芝草等）と木本（樹木）では形質が違うことにより、病気に対するそれぞれの病徴やそれに対する管理方法も異なる。樹病学の視点からの健康についても理解する。

緑地の生き物（3年L選択）

緑地空間は、構成する植物によって草原から森林まで多様である。そこに生息する生き物も多様であるが、特に動物は食物連鎖の出発点あるいは生態系の基点にある植物（生産者）に依存して生活している。植物と動物の関係の中で、特に緑地生態系の物質循環に関与する昆虫の機能、また緑地管理の

中で、昆虫に関わる緑地保護、希少種の保全などについて修得する。

植栽基盤論（3年F選択）

拡大・多様化する緑化空間に、緑化用植物を健全に育成させるための植栽基盤の基礎的条件と緑化用植物の生育との基本的関係、ならびに植物の土壤環境の調査・整備手法、肥培管理のあり方について学ぶ。また、土壤の物理性や化学性、あるいは肥料に関する知識も修得する。

■景観建設・技術分野の科目

造園工学（3年F必修）

造園空間の計画、設計を具現化する建設土木を含む総合的環境エンジニアリングとして造園工学を位置づけ、総合的視点からのシステムズ・アプローチと共に、敷地の造成法や造園関連構造物の基礎と応用、園路の造成や土量計算、構造物の設計にかかわる材料や土の構造力学を学ぶ。

造園工学基礎演習（2年F必修）

景観建設技術分野の設計・施工の対象となる造成、舗装、排水、あずまやなどわかりやすい事例を使って、基礎となる数学、物理学、構造力学、水理学、土質力学などの基礎的事項を学ぶとともに、計算を中心とした演習により理解を促す。

造園施設材料（2年L必修）

生きた植物材料を除く、造園施設の設計・施工に関わる多彩な材料について学ぶ。石材、木材、コンクリートその他について、材料の分類や性質を学び、要求される性能を把握し、規格や利用の方法を知る。さらに産地と地域性の関係、各種材料・施設メーカーと造園産業との関わりについても学ぶ。

造園施工論（3年L必修）

造園建設工事の基礎的事項として、造園工事の特徴と、造園における施工の重要性、施工管理の意義を理解し、工事を構成する工種と工種別の施工法、工事を進めていく工程、施工管理の手法について概要を知る。また設計図、仕様書、施工図、竣工図の相互関係や、工種・工法と施工機械・資材の関係も学ぶ。

測量学（2年F必修）

造園計画や設計段階において必要となる土地の計測手法、図化、数値化について学ぶ。具体的には造園における測量の位置付けや測量の体系、器械・器材、線測量、多角点測量、平板測量、水準測量、さらにGIS（地理情報システム）やGPSを応用した土地測量について学ぶ。

造園施設設計（3年L選択）

多様化・専門化する造園施設の機能・形態・構造について現状と今後のあり方を理解した上で、各種の造園施設の計画や設計について事例をまじえて、そのポイントや問題点、設計にあたっての環境共生への配慮について学ぶ。また、具体的設計にあたっては、コンセプトから基本構想、計画へと移行させていくプロセスについて学ぶ。

■学際領域・総合化の科目

造園植栽演習（2年L必修）

造園空間の構成要素として不可欠な植物材料を駆使するための理論と技術の習得をねらいとする。個々の植物の観察を通して、生き物の生活を捉え、植物相互の組み合わせを分析することから植生の仕組みを理解し、その知識、理論を応用しながら植物の配植へと展開させる。

造園工学演習（3年F必修）

造園エンジニアリングが必要とする橋、園路などの対象を具体的に取上げ、実際に図を描く演習を行いながら理解を深める。また併せて調査・計画・設計という造園プロジェクトの流れを体験的に学び、表現法、発表方法、協働作業によるプロジェクトワークの技術などについても課題を通して修得する。

造園総合演習（3年L必修）

造園の計画および造園設計の実際を学ぶ。造園計画の諸領域、例えば土地の扱い方から人間行動までの特性を理解し、土地利用計画、敷地計画、施設計画に対応した造園計画の枠組をマスタープランの策定、さらには基本計画及び基本設計の方法と手法を1/1000～1/200スケールの課題を通して体得する。

専攻研究（3年L必修）

造園科学科の専門性をふまえ、4年次の卒業論文（卒業制作）や卒業後の進路も見据えて一研究室を選択し、調査や研究に取り組む。環境計画・設計分野、ランドスケープ資源・植物分野、景観建設・技術分野の研究室がすすめている諸研究やゼミナールに実際に参画することによって、専門的知識・能力を養う。

専門特化演習（一）（4年F選必）

植物の遺伝、植物の基本形態、植物の繁殖生態、植物の物質循環について学び、木本・草本植物の生理生態に関する実験をおこなう「植物学」、特殊緑化（人工地盤、室内緑化、高架下等）の緑化に関する演習をおこなう「都市緑化」、里山管理やビオトープづくり、生き物管理に関わるフィールド演習をおこなう「自然再生」、空間形態を提案する企画力、デザイン力に特化したデザインワークをおこなう「環境デザイン」の中から1コースを選択する。

専門特化演習（二）（4年L選必）

造園における土壌学（植栽基盤）に関する実験をおこなう「植栽基盤」、建築に関わる地形の読み方や簡単な構造物のデザイン演習をおこなう「建築デザイン」、造園施設や小規模な建築物・構造物に関する詳細かつ実施可能な設計をおこなう「エンジニアリングデザイン」、日本庭園の構成に関する基本的な知識と技術的側面の理解と構築を主眼としたフィールド演習をおこなう「伝統技法」の中から1コースを選択する。

造園総合論（4年L必修）

造園学のまとめとして、1～4年次に修得した思想、政策、経済的問題、意匠、設計、計画、施工技術などの全学習内容を

を連繋し、まとめるための理論構築法を学ぶ。

卒業論文（卒業制作）（4年通年必修）

4年間の学習の総仕上げとして、研究テーマを設定し、研究の着眼点を学ぶと同時に、研究計画のたて方、研究の進め方、調査分析の方法、取りまとめ方、研究発表の方法等を修得する。その過程において、それぞれの問題への対処の仕方や問題解決能力を担当教員による指導を通して養う。

2-4 造園科学科の学習・教育目標

造園家としての知識・能力を養うために9つの具体的な学習・教育目標が設定されています。これはJABEEの定める技術者としての修得すべき知識・能力（第6章参照）とも連携するものです。

表2-2は、造園科学科の授業科目と学習・教育目標との関係、表2-3は学習教育目標を達成するための授業科目の流れを示しています。

大学のウェブ・ページ（学生ポータル）から閲覧できるシラバスに表示されている「学科の掲げる学習・教育目標」は、このA～Gの目標を意味しています。

(A) 地域レベルから地球レベル、並びに地域社会から国際社会に至る幅広い視点から造園学をとらえ、その沿革、社会的使命、将来の目標や課題を理解し、その発展に貢献できる能力を修得する（地球的視野・社会的使命）

① 大学・学部の及び学科の理念である地域レベルから地球レベルにいたる幅広い視点から地域と環境を認識するために、「地域環境科学概論」、「造園科学概論」、を配当し、その補完として、「インターナショナル・スタディーズ（一）（二）」、「特別講義（一）～（四）」、「地球の環境と炭素循環」、「緑の経済論」を配当している。また、造園学の専門領域を理解するために、「風景地計画学」、「都市緑地計画学」を配当し、造園学の果たすべき役割と社会的使命を総合的に学ぶために「ランドスケープ政策論」、「造園総合論」を配当した。

② 造園学の発達を理解し、造園学の定義と意義を世界的・歴史的な視点から学ぶために、「近代造園史」、「ランドスケープ作品論」を配当し、その基礎的知識、社会背景を得るために「哲学」、「科学の歴史」、「文学概論」を配当している。

③ 地域環境科学部造園科学科プログラムの学習目標を明確にするとともに、プログラムを主体的に学ぶ姿勢を身につけるために「フレッシュマンセミナー」を配当し、技術者としての国際的な社会的責務を認識できるよう「国際社会と社会問題」、「技術者倫理」を配当する設計としている。

(B) 社会に対して造園家としての使命感と責任（環境倫理・技術者倫理）をもって取り組める能力を修得する（技術者倫理）

① 環境と地域について、「地域環境科学概論」、「造園科学概論」、「科学の歴史」で学び、造園技術者としての使命（職能）を考える動機付け・基礎として、「フレッシュマンセミナー」、「哲学」を配当した。更に「技術者倫理」、「造園総合演習」、「造園総合論」において、その責任と取り組む能力を総合的・体

◇教育カリキュラム◇

系的に取得するよう設計している。

② 更に各分野においてことなる技術者の使命（職能）と責任を学ぶために、環境の計画・設計に関わる「造園計画学」、生物資源に関わる技術者の使命（職能）と責任を学ぶために、「造園植栽演習」、「造園植栽学」、自然環境に関わる技術者の使命（職能）と責任を学ぶために、「風景地計画学」、建設工学に関わる技術者の使命（職能）と責任を学ぶために、「造園工学演習」、「造園施工論」を配当し、造園建設工学分野の取りまとめとして、専門性の高い「専門特化演習（二）（エンジニアリング）」を配当している。

(C) 幅広い造園学の対象領域とそれらを司る原理（数物・自然）やシステム（造園空間の特徴、構成要素、自然のシステム、社会や経済のシステムなど）を理解し、造園学を学ぶための基礎的能力を修得する（基礎能力の修得）

① 植物を主体とした生物資源に関する生物学的な基礎知識を得るために「植物の生活と活用」、また「造園体験演習」による実践的活動で修得を行なう。その基礎知識として「生物学」、「地学」、「化学」を配当した。

② 野外における観察である「花・緑演習」を通じて造園植物の識別能力を取得し、その種類と形態的・生理的特性を、「造園樹木学」、「グラウンドカバープランツ」、「緑地生態学」、「造園植栽学」、「造園植栽演習」を経て、「芝生論」、「植栽基盤論」、「緑地の生き物」など関連分野の専門科目を学び、専門特化演習（一）（植物学）（都市緑化）、専門特化演習（二）（植栽基盤）においてより専門性の高い修得を目指すよう配当した。

③ 数理的・物理的な基礎知識として、「情報基礎（一）（二）」、「物理学」、「造園工学基礎演習」を配し、「測量学」、「測量実習」、「造園施設材料」、「造園工学」、「造園工学演習」、「造園施工論」を通じ、造園空間の創生に向けた工学的知識と技術の修得に努め、「専門特化演習（二）（エンジニアリング）」を配当することで専門性を高めるよう配当した。

④ 身近な空間や地域の問題の所在について「地域環境科学概論」、「造園科学概論」、「特別講義（一）～（四）」、「景観論」、「地球環境と炭素循環」、「源流文化学」、「環境学習と体験活動」、「ランドスケープ作品論」、「地域と文化」、「国際関係と社会問題」から学び、その調査と問題解決に向けての記録、表現力を養い、造園技術者としてのモノの見方・考えをまとめる基礎として「共通演習」を配当した。

⑤ 造園計画の概念・意義を理解するために「造園計画学」を配当し、自然的環境・社会的環境・歴史・文化的環境を理解する上で必要となる法体系の基礎として「日本国憲法」を、またその調査・解析手法に必要である「統計学」、概念としての「緑の経済論」、「現代社会と経済」、「日本庭園論」を配当し、総合的な見地からの問題解決する能力を養うべく「造園総合演習」を配当した。

更に各分野における高次の計画手法の能力を修得すべく、専門特化演習（一）（自然再生）・（環境デザイン）・（建築デザイン）、専門特化演習（二）（伝統技法）、「造園総合論」を配当した。

(D) 造園家として必要な言語（外国語を含む）、図面等による表現能力、コミュニケーション能力を修得する（コミュニケーション能力）

① 国際的なコミュニケーションを行なうための基礎的な言語能力として、「英語（一）（二）（三）（四）」、「ドイツ語（一）

（二）」、「中国語（一）（二）」、「英語リーディング」、語学検定の「TOEIC 英語初級・中級」、専門性の高い「科学英語」、を配当している。

② 図面によるコミュニケーション能力の基礎として、「造園体験演習」、「環境デザイン基礎演習」、「CAD 及び GIS 基礎演習」、「測量実習」を配当し、それらの能力を高めるために「造園植栽演習」、「造園工学演習」、より専門性の高い「専門特化演習（一）（環境デザイン）」、「専門特化演習（二）（建築デザイン）（エンジニアリング）」を配当している。またチーム内でのコミュニケーション能力を涵養するため「スポーツ・レクリエーション（一）（二）」を配当している。

③ 日本語による論理的記述や討議の能力のために「文学概論」を、説明するための基礎的な技術と手法を得るために「共通演習」を配当し、「造園技術者として必要な総合力を養うために「造園総合演習」、「専攻研究」、「卒業論文（卒業制作）」を配当した設計となっている。

④ IT や ICT を活用した情報収集やコンピューターを取り扱う基礎技術の基礎知識として「情報基礎（一）（二）」を配当している。

(E) 造園空間創成に向けて問題や課題を調査・分析し、それらの解決手段の総合化（プランニング）技術とその具現化手法であるデザイン技術を修得する（計画能力）

① 造園学の視点から各種造園空間の創成にむけての計画的なアプローチの視点、デザイン技術能力を取得するために「造園計画学」、「ランドスケープ作品論」、「緑の経済論」、「ランドスケープデザイン論」、「都市緑地計画学」、「風景地計画学」、「公園マネジメント論」、「都市および農村計画」、「自然保護論」、「観光計画論」を配当している。

② 課題の認識と理解を具体的に計画・設計するための技術を得るために「造園工学演習」、「造園総合演習」を配当し、その基礎を養うために「環境デザイン基礎演習」、「共通演習」を配当した。更に専門性の高い、実践的な技術と能力の取得のために「専門特化演習（一）（二）」を配当した設計となっている。

また造園技術者として必要な総合力を養うために「専攻研究」、「卒業論文（卒業制作）」を配当した設計となっている。

(F) 造園空間の創成に必要な植物（種類、生理生態、美観的特性）について理解し、技術と手法（植栽、育成管理）を修得する（技術・手法）

① 造園空間の構成要素である植物の種類・形態・生理的特性を「植物の生活と活用」、「造園樹木学」、「グラウンドカバープランツ」を配当して修得する。

② 造園植物の生態・効用・植栽技術・管理に関する技術を修得するために、基礎的な「造園体験演習」、「花・緑演習」を配当し、更に「造園植栽学」、「造園植栽演習」、「緑地生態学」、「芝生論」、「植栽基盤論」、「緑地の生きもの」、「樹木の保護と管理」で得た技術を「専門特化演習（一）（植物学）（都市緑化）（自然再生）」、「専門特化演習（二）（植栽基盤）」においてより高度な技術力の修得に励む設計となっている。

③ 造園空間を創成するための各種技術・手法（材料、工法、建設技術、管理技術）の総合実践として「専攻研究」、「卒業論文（卒業制作）」を位置づけている。

(G) 造園空間を創成するための具体的手法（工学的知識、計測技術、建設・施工）を修得する（技術・手法）

① 造園施設材料の種類と特性などに関する知識として「造園施設材料」を配当し、建設工学、施工管理に関わる理論・手法・技術を「造園工学」、「造園工学演習」、「造園施工論」、造園施設設計」で修得する。またその基礎的理論として「景觀論」、計測手法の基礎として「造園工学基礎演習」、「測量学」、「測量実習」を配当している。またここで修得した技術の総合化として「造園総合演習」を位置づけ、高度な技術力取得のために「専門特化演習（一）（環境デザイン）」、「専門特化演習（二）（建築デザイン）（エンジニアリング）（伝統技法）」を配当した設計となっている。

② 造園空間を創成するための各種技術・手法（材料、工法、建設技術、管理技術）の総合的実践として「専攻研究」、「卒業論文（卒業制作）」を位置づけている。

(H) プロジェクト（研究調査等）を計画的・組織的に推進する実務的・実践的な能力を修得する（実学主義）（応用力）

① 造園空間の創出を課題としたプロジェクトを体験的に感じる「造園工学演習」を配当し、その基礎的能力・造園的思考・コミュニケーション能力を養うために、「造園体験演習」、「共通演習」、「測量実習」、「造園植栽演習」、「スポーツ・レクリエーション（一）（二）」、「源流文化学」を配当している。また技術者としてのマナー・倫理観の構築を「ビジネスマナー」、「技術者倫理」で得る配当となっている。

② 上記で修得した能力を応用的に発現するために「造園総合演習」を配当し、具体的な空間創造に欠かせない「造園施工論」、時に国際的な場所での施工も伴うことから「科学英語」や造園の企画・立案などを検討する能力を養う「ランドスケープ政策論」も配当し、社会貢献を意図した卒業研究テーマの発見や研究計画の設計、データ解析、考察を通して、実務的かつ計画的な解決能力を修得するために、「専攻研究」、「卒業論文（卒業制作）」、「専門特化演習（一）（二）」、「造園総合論」を配当する設計となっている。

表2-3 学習・教育目標を達成するための授業の流れ

学習・教育目標	1年		2年		3年		4年	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
A 地球レベルから地球レベルに至る幅広い視点から連関学をとり、その沿革、社会的使命、将来の目標や課題を理解し、その発展に貢献できる能力を修得する(社会的使命)	地域環境科学概論 連関学概論 ライフサイエンス 哲学	科学の歴史 文学概論	緑の経済論 ライフワーク作品論 センターシナリオプロジェクト(二)	近代連関史 センターシナリオプロジェクト(二)	風景地計画学 都市緑地計画学 技術者倫理 ライフワーク政策論	国際関係と社会問題 センターシナリオプロジェクト(二)	センターシナリオプロジェクト(二)	センターシナリオプロジェクト(二)
	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)
B 社会に對して造園技術者としての使命感と責任(環境倫理・技術者倫理)をもち取り組める能力を修得する(技術者倫理)	地域環境科学概論 連関学概論 ライフサイエンス 哲学	科学の歴史	連関計画学	連関植栽演習 連関植栽学	風景地計画学 連関工学演習 連関総合演習 連関施工論	技術者倫理 連関総合演習 連関施工論	センターシナリオプロジェクト(二)	センターシナリオプロジェクト(二)
	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)
C 幅広い連関学の対象領域とそれと向る原理やシステム(連関空間の特徴、構成要素、自然のシステム、社会や経済のシステムなど)を理解し、連関学を学ぶための基礎的能力を修得する(基礎能力の修得)	地域環境科学概論 連関学概論 生命科学 化学 地学 情報基礎(一)	共通演習 植物の生活と応用 連関樹木学 花・緑演習 物理学 情報基礎(二)	測量学 測量実習 連関工学基礎演習 グラフィック/カラー/フランク 連関計画学 統計学	地域と文化 連関施設材料 連関植栽演習 連関植栽学 緑地生態学 日本園藝法	現代社会と経済 日本連関論 連関工学 連関工学演習 植栽基礎論 芝生論 緑地の生き物	連関総合演習 連関総合演習 緑地の生き物	センターシナリオプロジェクト(二)	センターシナリオプロジェクト(二)
	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)
D 連関技術者として必要な言語(外国語を含む)、図面等による表現能力、コミュニケーション能力を修得する(コミュニケーション能力)	英語(一) 情報基礎(一) 連関体験演習	英語(二) 情報基礎(二) 共通演習 文学概論	英語(三) 測量実習	英語(四) 連関体験演習	英語(三) 測量実習	英語(四) 連関体験演習	英語(三) 測量実習	英語(四) 卒業論文(卒業制作)
	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)	特別講義(一)~(四)

2-5 実習・演習科目

造園科学科が開講するカリキュラムの最も大きな特徴は、演習と講義が密接な関係を保ちながら、換言すれば演習科目と講義科目が相互に補完し合いながら造園学の体系を理解するということです。演習では、専門分野の教員が複数で関わり、演習の進行段階に応じてそれぞれの立場から指導します。多くは講義と並行して、場合によっては講義より先行して演習がなされることもあります。それによって専門分化教育の

弊害を防ぎ、実学としての総合的な応用力を養います。また演習で具体的な課題をあらかじめ体験しておくことによって、講義を聞く耳を養うという意図があります。

実習・演習科目は、表2-4に示すように、I. 動機付けを目的とし造園への関心を高める（広める）段階、II. 基礎的知識を習得する段階、III. 造園学の最大の特徴である各専門分野を連繋して総合する段階、IV. 専門分野、総合化した分野に関わらず、修得した内容を展開、深化する段階、に分けて設けられています。

表 2-4 実習・演習科目の開講目的と科目名

目的	科目名	開講年	開講期	必修・選択
I. 造園への関心を高める(広める)	フレッシュマンセミナー	1	F	必修
	造園体験演習	1	F	必修
	共通演習	1	L	必修
II. 基礎的知識を習得する	情報基礎(一)	1	F	必修
	情報基礎(二)	1	L	必修
	環境デザイン基礎演習	1	L	必修
	花・緑演習	1	L	必修
	CAD 及び GIS 基礎演習	2	F	選択
	測量実習	2	F	必修
	造園工学基礎演習	2	F	必修
III. 連繋する, 総合する	造園植栽演習	2	L	必修
	造園工学演習	3	F	必修
	造園総合演習	3	L	必修
	専攻研究	3	L	必修
IV. 展開する, 専門性を深化する	専門特化演習(一)(植物学)	4	F	選必
	専門特化演習(一)(都市緑化)	4	F	選必
	専門特化演習(一)(自然再生)	4	F	選必
	専門特化演習(一)(環境デザイン)	4	F	選必
	専門特化演習(二)(植栽基盤)	4	L	選必
	専門特化演習(二)(建築デザイン)	4	L	選必
	専門特化演習(二)(エンジニアリングデザイン)	4	L	選必
	専門特化演習(二)(伝統技法)	4	L	選必



写真 2-1 環境デザイン基礎演習



写真 2-3 測量実習



写真 2-2 花・緑演習



写真 2-4 造園総合演習

2-6 学年進行と科目の配当

造園科学科のカリキュラムを構成する科目は、環境計画・設計分野、ランドスケープ資源・植物分野、景観建設・技術分野という分野別の括りとともに、造園科学教育の基礎となる基礎教養的な科目から、応用的な科目や総合化の科目があります。

各専門科目がそれぞれの内容や性格によって、それぞれの段階に応じて第1期～第8期まで系統的に並べられています。

表 2-1 (p.20) では、カリキュラム構成が4年間のタイムスケジュールに沿って示されています。例えば「ランドスケープ作品論」は2年次に配当されていますが、これは、早い時期から具体的な造園作品やそれぞれの分野で活躍する造園家に親しむという教育効果に配慮しています。

ただし、これらの並びは決められたものではありません。学習目的によっては、それぞれの学習内容に先行して学ぶ科目のある場合も起こります。また多くの知識や体験をした後に学ぶことが望ましい基礎的な科目がある場合も起こります。

2-7 選択科目の履修について

「必修科目」は造園科学を学ぶすべての学生が最低限修得すべき知識や技術に関わる科目であり、造園の各分野を広くカバーするように、かつ基礎から応用まで様々なレベルの知

識や技術が身に付くように体系的に選定されています。

それに対して、「選択科目」は低学年にあっては幅広い知識や教養を身につけるための、また高学年にあっては将来の進路（職能や職域）を意識して、各自の専門性をより深めるために必要な科目という視点から設けられたものです。

卒業に必要な単位数 124 単位の内、造園科学科では 2/3 程度が必修科目であり、残りについては選択科目を履修していくことになります。造園科学科のカリキュラム構成のねらいを十分に理解した上で、また自分の進路（将来の活躍分野）をよく考慮した上で、計画的な履修をおこなうよう心がけて下さい。

2-8 専門分野と専門家育成シナリオ

これらの履修科目は、卒業後希望する職能分野、あるいは自分の興味を考慮して、各自が選択できるようになっています。毎年4月にその年次に履修する選択科目を決めることとなりますが、カリキュラム構成の全体像を十分理解しておくことが大切です。

本学科のカリキュラムを構成する3つの分野は、社会で活躍する造園科学科卒業生の職能や職域を意識して設定したものです。

「環境計画・設計分野」は、都市計画・公園緑地のプランナー、環境計画コンサルタント、ランドスケープ・デザイナーなどの教育を目標に、環境行政、まちづくり・公園行政担当の公務員も視野に入れています。「ランドスケープ資源・植物分野」

◇教育カリキュラム◇

は、主に造園建設や緑化樹木生産の技術者、自然再生緑化コンサルタントなどの教育を目標に、自然保護行政や都市緑化行政担当の公務員にも対応させています。「景観建設・技術分野」は、造園設計事務所、造園建設会社、造園施設材料メーカーなどの技術者教育をねらいとして、景観行政、公園行政担当の公務員も意識したものです。

表2-5～2-7はそれぞれの職能領域、すなわち各分野を基礎とした履修モデルです。これらを比較するとわかるように、必修科目は3分野を横断するように、選択科目はそれぞれの分野の特性に応じて選定され、4年間を終えた時点でそれぞれの特徴と専門性を備えた人材が育つように工夫されています。

履修指導については、学部教育の特性に鑑み、幅広い造園総合教育を基本方針としています。

3年次からは卒業後の進路（就職する職域や職能）に応じた選択履修が可能ないように年次配当されています。履修指導については、1年次は「フレッシュマンセミナー」で、2年次以上は各学年の始まりに「ガイダンス講義」を行っています。また、外国人留学生、造園産業の後継者、公務員志望者等を対象に、日本の造園事情解説、現場見学などをおこなうチューター（特別の教育担当者）制と特別プログラムを実施しています。

表 2-5 「環境計画・設計分野」を基本とした履修モデル

	1年次	2年次	3年次	4年次
必修科目	フレッシュマンセミナー 情報基礎(一) 情報基礎(二) 共通演習 英語(一) 英語(二) 地域環境科学概論 造園科学概論 造園体験演習 環境デザイン基礎演習 花・緑演習 植物の生活と活用 造園樹木学	英語(三) 英語(四) 近代造園史 造園計画学 グラウンドカバープランツ 緑地生態学 造園植栽学 造園植栽演習 測量学 測量実習 造園施設材料 造園工学基礎演習	造園工学 造園施工論 都市緑地計画学 風景地計画学 日本庭園論 造園工学演習 造園総合演習 専攻研究 技術者倫理	造園総合論 卒業論文(卒業制作)
選択必修	哲学 文学概論 生物学 地学	地域と文化	現代社会と経済 国際関係と社会問題	専門特化演習(一)(環境デザイン) 専門特化演習(二)(建築デザイン)
選択科目	英語リーディング 地球環境と炭素循環 景観論	ランドスケープ作品論 ランドスケープデザイン論 CAD及びGIS基礎演習 緑の経済論	自然保護論 観光計画論 公園マネジメント論 都市および農村計画 ランドスケープ政策論	

その他の選択

表 2-6 「ランドスケープ資源・植物分野」を基本とした履修モデル

	1年次	2年次	3年次	4年次
必修科目	フレッシュマンセミナー 情報基礎(一) 情報基礎(二) 共通演習 英語(一) 英語(二) 地域環境科学概論 造園科学概論 造園体験演習 環境デザイン基礎演習 花・緑演習 植物の生活と活用 造園樹木学	英語(三) 英語(四) 近代造園史 造園計画学 グラウンドカバープランツ 緑地生態学 造園植栽学 造園植栽演習 測量学 測量実習 造園施設材料 造園工学基礎演習	造園工学 造園施工論 都市緑地計画学 風景地計画学 日本庭園論 造園工学演習 造園総合演習 専攻研究 技術者倫理	造園総合論 卒業論文(卒業制作)
選択必修	哲学 科学の歴史 生物学 地学	地域と文化	現代社会と経済	専門特化演習(一)(植物学)* 専門特化演習(一)(都市緑化)* 専門特化演習(一)(自然再生)* 専門特化演習(二)(植栽基盤)
選択科目	英語リーディング 環境と人間 地球環境と炭素循環	環境学習と体験活動 緑の経済論	科学英語 芝生論 樹木の保護と管理 緑地の生きもの 植栽基盤論	

その他、の選択

* 1科目選択

表 2-7 「景観建設・技術分野」を基本とした履修モデル

	1年次	2年次	3年次	4年次
必修科目	フレッシュマンセミナー 情報基礎(一) 情報基礎(二) 共通演習 英語(一) 英語(二) 地域環境科学概論 造園科学概論 造園体験演習 環境デザイン基礎演習 花・緑演習 植物の生活と活用 造園樹木学	英語(三) 英語(四) 近代造園史 造園計画学 グラウンドカバープランツ 緑地生態学 造園植栽学 造園植栽演習 測量学 測量実習 造園施設材料 造園工学基礎演習	造園工学 造園施工論 都市緑地計画学 風景地計画学 日本庭園論 造園工学演習 造園総合演習 専攻研究 技術者倫理	造園総合論 卒業論文(卒業制作)
選択必修	哲学 科学の歴史 生物学 化学 物理学 地学	地域と文化	現代社会と経済 国際関係と社会問題	専門特化演習(一)(環境デザイン) 専門特化演習(二) (エンジニアリング)* 専門特化演習(二)(伝統技法)*
選択科目	英語リーディング 地球環境と炭素循環 景観論	ランドスケープ作品論 ランドスケープデザイン論 CAD及びGIS基礎演習 緑の経済論	科学英語 造園施設設計 自然保護論 観光計画論 公園マネジメント論 都市および農村計画 ランドスケープ政策論	

その他の選択
* 1科目選択

2-9 特別教育プログラム

造園科学科ではチューター(tutor)制という、特定の目的をもつ学生のための指導担当教員制を採り、きめ細かな教育にあたっています。現在、公務員志望者、造園業等の後継者や経営者を目指す人、海外からの留学生のための3つの特別教育プログラムを設けています。

① 公務員志望者のためのプログラム

本学科卒業生の就職先として、公園緑地行政や自然保護行政、道路、河川行政など公務員を目指す学生のために、採用試験対策を目的とした特別講座を実施しています。

対象には国家公務員(国土交通省、環境省等)、地方公務員(都道府県、市町村等)のほか、独立行政法人(都市再生機構等)や公益法人(公園協会等の外郭団体等)なども含まれます。採用試験の日程は、国家公務員(1次試験)が5月上旬、地方公務員が6月中～下旬から始まります。

特別講座の実施方法としては、上記の試験日程を考慮して2年次の冬(1月～2月下旬頃)にガイダンスをおこない、公務員の仕事内容や全国の採用試験情報、講座の実施方法、各自の志望先に応じた勉強方法等を検討するほか、3年次の2月初旬～担当教員が専門分野別に試験対策講座を行っています。また適宜、卒業生や試験合格者を招いて、様々な役所の仕事内容や採用試験の体験談、面接アドバイス等を聞く機会を設けています。

なお、基本的には2・3年生を対象としていますが、他学年生も受講できるよう、学生の希望に柔軟に対応できるようにしています。

② 後継者・経営者を目指す人のためのプログラム

本学科在学生の2割程度は、将来は造園関係の建設業、コンサルタント業、植木生産業などの事業を後継する経営者をめざしています。そうした造園関係の事業を後継する意識・意欲を高めてもらうこと、あるいは新たに起業家をめざす意志を強くしてもらうこと、さらには将来全国に広がるであろう学生たちのネットワークづくりを支援すること、などを目的とし、プログラムを実施しています。

具体には、座談会や見学会などを通じて、各個人の見聞や体験を広めるプログラムを実施しています。座談会は、現在造園業で活躍している経営者や起業家の話を雑誌を交えながら話し合うことができます。実際の諸先輩方の体験談から現在の社会情勢、経営理念や造園の哲学など多岐にわたる質問にも回答いただき、各個人の相談なども対応しています。また、見学会では伝統的な庭木の生産や世界の植木情報を活用したナーセリーの現場を実際に見学し、植木生産の取り組みについて学びます。また、参加学生は学年を超えて交流ができるよう支援をしています。

③ 留学生のためのプログラム

本学科では外国人、特にアジア地域からの留学生が、各学年に数名ほど学んでいます。大学院生、研究生を含めれば20名近くが在籍していることとなります。一方で、毎年10名程度の日本人学生が、姉妹校をはじめとする大学に海外留学を希望しています。農大のプログラムとしても、姉妹校を拠点に庭園見学や農業・農村見学を含めた短期留学を実施しており、留学生でも短期に海外で学習する機会があります。

外国人留学生にとっては、日本庭園をはじめとする造園学を学ぶ上で、日本の生活・習慣・伝統などの文化的背景・風土を基礎知識として理解しておくことは重要です。しかし、日本人が多い講義・演習だけではそれらに接する機会は多くはありません。また、奨学金の申請などの日常生活における様々な問題・課題がありえます。さらに、同じ意志を持ちながら違う国から来ている留学生同士が顔を合わせる契機が少ないというのが実態です。一方、これら海外留学を目指す学生にとっても雰囲気慣れ、また様々な経験を持つ学生からの情報を入手することも大切です。そこで外国人留学生およびこれから海外留学を希望する日本人学生を対象としたプログラムを実施しています。

プログラムの一つとして、定期的な集まりを設けています。外国人留学生と、留学を希望する日本人の学生や留学経験を持つ学生、そして海外における造園事情にも精通しているスタッフが一緒になって、日本の文化・習慣・言葉などの疑問に答えたり、成績や進学、あるいは奨学金制度の活用についての相談やアドバイスをしたり、日常生活をサポートするのに必要な情報提供、また学生時代に海外留学を目指す学生のための相談、さらに海外の造園情報の交換など多彩な活動をおこなっています。

2-10 資格取得

□ 造園施工管理技士および土木施工管理技士の受験資格について

造園施工管理技士および土木施工管理技士はいずれも国家資格であり、有資格者は造園または土木工事における施工計画や、現場における工程管理、安全管理など工事施工に必要な技術上の管理などをおこなうことができます。施工管理技士には1級と2級の区分がありますが、本学科を卒業後1年以上の実務経験を経ることにより、造園および土木いずれも2級の受験資格が得られます。

詳細：一般財団法人全国建設研修センター (<http://www.jctc.jp/>)

□ 測量士補資格取得について—造園環境情報コース—

造園環境情報コースとは、測量やGIS（地理情報システム）といった空間情報技術について深く学習することを目的としたコースです。

空間情報技術は測量を基盤としたGIS等の最新技術を含む技術であり、主に土木工学や地理学、都市工学といった学問分野で発展してきました。従来より、測量は造園分野においてもものづくりの基盤として重要な役割を担っていますが、最近ではGISも造園計画や都市計画をおこなう上で欠かせない技術となりつつあります。このように、空間情報技術が造園分野においても身近なものに変化してきたことをうけ、本学科では空間情報技術に関連する科目の修得を奨励するため造園環境情報コースを設けることとしました。対象科目は38ページを確認してください。

本コースの全科目の単位を修得した学生は、卒業後に国土交通省国土地理院へ申請することにより、「測量士補」の国家資格を取得することができます。なお本コースは卒業要件とは無関係です。

詳細：公益社団法人日本測量協会 (<http://www.jsurvey.jp/>)

jp/)

□ 樹木医補資格取得について

樹木医補は民間資格「樹木医」の取得を目指すために、樹木学・樹病学・森林昆虫学などの基礎的な知識・技術を所定の大学等で習得した学生を対象に認定される資格です。樹木医とは、樹木の診断及び治療、後継樹の保護育成並びに樹木保護に関する知識の普及および指導をおこなう専門家であり、樹木医となるためには一般財団法人日本緑化センターが実施する選抜試験を経て樹木医研修を受講して、資格審査に合格する必要があります。通常、樹木医研修を受講するためには、樹木の診断、治療等に関する7年以上の業務経験が必要となりますが、樹木医補の有資格者は業務経験が1年以上に短縮されます。

本学科では、必修・選択の両方を含む対象科目の単位を修得し、卒業後に財団法人日本緑化センターへ申請することにより、樹木医補の資格を取得することができます。対象科目は、38ページ、39ページを確認してください。

詳細：一般財団法人日本緑化センター (<http://www.jpgreen.or.jp/>)

□ 自然再生士補資格取得について

自然再生士補は、国土の自然再生に対する柔軟な発想、知識、技術を持ち、国土の再生に向けた業務や活動をおこなう自然再生士の業務を補佐する能力が求められます。本学科で認定科目を履修・修得した者の申請に基づき、一般財団法人日本緑化センターが認定します。自然再生士補の有資格者は自然再生士の受験資格である業務経験年数が通常3年から1年へ短縮されます。対象科目については38ページ、40ページを確認してください。

詳細：一般財団法人日本緑化センター (<http://www.jpgreen.or.jp/>)

2-11 技術士および技術士補について

「技術士 (Professional Engineer)」は、産業経済、社会生活の科学技術に関する全ての分野 (21の技術部門) をほぼカバーし、先進的な活動から身近な生活にまで関わっています。技術士とは、「法定の登録を受け、技術士の名称を用いて、科学技術に関する高等の専門的応用能力を必要とする事項についての計画、研究、設計、分析、試験、評価又はこれらに関する指導の業務をおこなう者」のことです。科学技術の応用面に携わる技術者にとって最も大切な国家資格です。技術士補とは、「技術士となるのに必要な技能を修習するため、法定の登録を受け、技術士補の名称を用いて、技術士の業務について技術士を補助する者」です。

技術士補は、技術士を目指すものにとって最も近道な国家資格です。

造園科学科が行っている技術者教育については、6章を参照して下さい。

(<http://www.engineer.or.jp/>、<http://www.mext.go.jp/> 一部改変)

2-12 「登録ランドスケープアーキテクト (RLA)」および「RLA 補」

ランドスケープアーキテクトは、21世紀が求めている「質の高い社会資本の整備」に貢献する重要な職能です。人間が自然と共生し、美しく緑豊かで、しかも楽しい環境を実現する仕事を実行できるプロフェッショナルです。本資格は平成28年2月、国土交通省の「登録技術者資格」に登録されました。都市公園等の調査・計画・設計業務における「管理技術者」「照査技術者」になることが可能です。(一社)ランドスケープコンサルタンツ協会は以下のようにRLAの仕事を例示しています。

1. 自然環境の保全を目標に、緑・水・土などの自然要素を「命ある素材」として効果的に扱うデザイン
2. 快適さを指向する環境空間やレクリエーションの場のデザイン
3. 生態学的原理を土地利用計画に応用し、生態系の構造と機能を活かした環境のプランニングおよびこれに続くデザイン
4. 地域の歴史文化に根ざした空間デザイン
5. 市民・住民参加によるコミュニティ環境のデザイン

「登録ランドスケープアーキテクト (RLA)」の資格を取得するためには、登録ランドスケープアーキテクト資格制度試験に合格・登録することが必要となります。東京農業大学造園科学科は「RLA」受験の指定学科ですので、大学卒業後3年以上の実務を経て受験することができます。また、「RLA 補」の資格制度試験に合格すると、「RLA」の受験に必要な実務経験年数2年に短縮されますので、在学中の受験をお勧めします。

詳細は(一社)ランドスケープコンサルタンツ協会のHP等を参照して下さい。

樹木医補・測量士補・自然再生士補の資格取得について

樹木医補、測量士補、自然再生士補の資格取得については、地域環境科学部及び造園科学科開講の専門教育科目のうち、下表に定められたものを履修し、単位を修得することが必要となります。

●樹木医補：○が付いた科目のうち講義科目6分野14単位以上、実験実習科目4分野4単位以上の修得が必要です（別表参照）。

●測量士補：○が付いた全科目の修得が必要です。

●自然再生士補：○が付いた科目のうち6科目以上かつ12単位以上の習得が必要です（別表参照）。

表 2-8 樹木医補・測量士補・自然再生士補の資格取得に関わる科目の一覧

科目区分		区分	科目名	学年	単位数	学期	樹木医補	測量士補	自然再生士補		
専門教育科目	学部共通専門科目	専門共通科目	必 地域環境科学概論	1	2	F			○		
			地球環境と炭素循環	1	2	L			○		
	学科専門科目	専門基礎科目	必 造園科学概論	1	2	F	○	○			
			必 造園体験演習	1	2	F	○	○	○		
			必 環境デザイン基礎演習	1	2	L		○			
			必 花・緑演習	1	2	L	○	○	○		
			必 測量実習	2	2	F		○			
			CAD及びGIS基礎演習	2	2	F		○			
			緑の経済論	2	2	F			○		
			専門コア科目	必 近代造園史	2	2	L			○	
				必 造園計画学	2	2	F			○	○
				必 都市緑地計画学	3	2	F			○	○
		必 風景地計画学		3	2	F	○		○	○	
		必 日本庭園論		3	2	F			○		
		景観論		1	2	L			○		
		自然保護論		3	2	L				○	
		公園マネジメント論		3	2	F				○	
		都市および農村計画		3	2	L			○		
		ランドスケープ政策論		3	2	L			○		
		必 植物の生活と活用		1	2	L	○		○	○	
		必 造園樹木学		1	2	L	○		○	○	
		必 グラウンドカバープランツ		2	2	F			○	○	
		必 緑地生態学		2	2	L	○		○	○	
		必 造園植栽学		2	2	L	○		○	○	
		樹木の保護と管理		3	2	L	○		○	○	
		緑地の生きもの		3	2	L	○		○	○	
		植栽基盤論	3	2	F	○					
		必 造園工学	3	2	F				○		
		必 造園工学基礎演習	2	2	F			○			
	必 造園施設材料	2	2	L			○				
	必 造園施工論	3	2	L			○	○			
	必 測量学	2	2	F			○				
	造園施設設計	3	2	L			○				
	学際領域科目	選必 専門特化演習(一)(植物学)	4	4	F	○			○		
		選必 専門特化演習(一)(自然再生)	4	4	F				○		
		選必 専門特化演習(二)(植栽基盤)	4	4	L	○			○		
選必 専門特化演習(二)(エンジニア)		4	4	L			○				
総合化科目	必 造園工学演習	3	4	F			○				
	必 造園植栽演習	2	4	L	○		○	○			
	必 造園総合演習	3	4	L	○		○	○			
	必 専攻研究	3	2	L							
	必 造園総合論	4	2	L							
	必 卒業論文(卒業制作)	4	4	T							

●樹木医補について（別表）

講義科目：6分野14単位以上、実験・実習科目：4分野4科目以上を履修すること。

分野別	講義科目	実験・実習科目
樹木の分類	・造園樹木学（2）	・花・緑演習（2）
樹木の生態・整理	・植物の生活と活用（2）	・専門特化演習（一）（植物学）（4） ・緑地生態学（2）
立地・土壌	・造園植栽学（2） ・植栽基盤論（2）	・専門特化演習（二）（植栽基盤）（4）
植物病理	・樹木の保護と管理（2）	
昆虫・動物	・緑地の生きもの（2）	
樹木医学		
農薬化学		
造園学	・造園科学概論（2） ・風景地計画学（2）	・造園総合演習（4） ・造園体験演習（2）
樹木医補総合		・造園植栽演習（4）

注）1 表中の括弧内数字は単位数を示す。

- 2 卒業研究が樹木医学に係る研究である場合、他の履修科目と重複しないいずれか1分野の実験・実習科目として認定できる。ただし、その内容が当該分野に該当する樹木医学に係る研究であることを証明する指導教官等の証明書が必要である。

●自然再生士補について（別表）

実験・実習、講義分野に関係なく6科目以上12単位以上を履修すること。

実験・実習(演習)分野		講義分野	
指定分野	科目	指定分野	科目
①自然環境調査と分析、評価に係る実習・演習		①自然再生・自然環境概論	・地域環境科学概論(2) ・地域環境と炭素循環(2) ・自然保護論(2)
②動・植物同定調査に係る実習・演習(森林動物学実習、森林昆虫学実習を含む)	・花・緑演習(2) ・専門特化演習(一)(植物学)(4)	②自然再生・自然環境保全に係る計画(設計)学	・造園計画学(2) ・風景地計画学(2) ・都市緑地計画学(2)
③地域環境資源調査に係る実習・演習	・造園体験演習(2)	③自然再生・自然環境保全に係わる施工計画・施工学	・造園工学(2) ・造園施工論(2) ・造園植栽学(2)
④自然環境保全活動に係る実習・演習	・専門特化演習(一)(自然再生)(4)	④自然再生・自然環境保全に係わる維持管理計画・管理学	・樹木の保護と管理(2) ・公園マネジメント論(2)
⑤生態学実習・演習	・造園植栽演習(4) ・専門特化演習(二)(植栽基盤)(4)	⑤植物(草本類、木本類、水生植物等)分類・生態・生理学	・植物の生活と活用(2) ・造園樹木学(2) ・ゲラウド・ガ・ブラツ(2)
⑥プレゼンテーション・コーディネート能力育成に係る実習	・造園総合演習(4)	⑥動物(哺乳類、は虫類、両生類、昆虫、鳥類、魚類等)分類・生態・生理学	・緑地の生きもの(2)
		⑦環境リスクマネジメント学	
		⑧環境経済学	・緑の経済論(2)
		⑨環境社会学	
		⑩地域環境学・地域生態論	・緑地生態学(2)
		⑪環境関連法規	

注) 括弧内数字は単位数を示す。

3. スタッフのプロフィールと専門分野

3-1 教員のプロフィールと専門分野

造園科学科の教員は、造園に関する豊富な情報はもちろん専門分野の第一人者として学会等で広く社会で活躍しています。同時に人間性豊かな人格を備えており、学問に限らず生活面においてもきめ細やかな対応をしています。

〈環境計画・設計分野〉



教授 荒井 歩
ARAI, Ayumi

研究テーマ：文化的景観の構造解明と保存システムの構築
関心のある研究教育分野：景観論、文化的景観の保存調査
担当科目：景観論、環境デザイン基礎演習、造園体験演習、専門特化演習（二）（建築デザイン）ほか
所属：景観計画学研究室
出身：千葉県



教授 國井 洋一
KUNII, Yoichi

研究テーマ：動画像を用いた都市空間データの効率的取得と視覚化、デジタルスチルカメラを用いた3次元計測手法
関心のある研究教育分野：造園空間・町並みにおける3次元計測手法の開発、3次元CGを用いた景観シミュレーション
担当科目：測量学、測量実習、造園体験演習、造園工学演習、専門特化演習（二）（エンジニアリングデザイン）、造園工学基礎演習ほか
所属：ランドスケープデザイン・情報学研究室
出身：東京都



教授 服部 勉
HATTORI, Tsutomu

研究テーマ：日本庭園を中心とした造園史の研究
関心のある研究教育分野：江戸・東京の園芸文化、日本庭園、造園史、歴史的遺産の保全と利活用
担当科目：日本庭園論、造園植栽演習、ほか
所属：景観計画学研究室
出身：東京都



准教授 阿部 伸太
ABE, Shinta

研究テーマ：風致地区の計画手法に関する研究
関心のある研究教育分野：都市緑地の配置計画および保全・活用手法、再開発等の都市デザイン、公園計画、住宅地計画、地方活性化、景観づくり
担当科目：都市緑地計画学、都市および農村計画、CAD及びGIS基礎演習、造園総合演習、専門特化演習（一）（環境デザイン）ほか
所属：ランドスケープデザイン・情報学研究室
出身：埼玉県



准教授 福岡 孝則
FUKUOKA, Takanori

所属：ランドスケープデザイン・情報学研究室
出身：神奈川県

研究テーマ：グリーンインフラ、屋外公共空間のデザイン
関心のある研究教育分野：ランドスケープ・都市デザイン、オープンスペース、グリーンインフラ
担当科目：環境デザイン基礎演習、ランドスケープデザイン論、ランドスケープ作品論、造園工学演習、造園総合演習ほか



助教 栗田 和弥
KURITA, Kazuya

研究テーマ：市民参加による自然環境保全活動と高山～里山の自然保護
関心のある研究教育分野：山岳・原生自然の保全、わが国および世界の国立公園・保護地域内外の問題、環境教育・自然解説（インタプリテーション）、環境NPO
担当科目：自然保護論、造園体験演習、造園植栽演習ほか
所属：景観計画学研究室
出身：東京都

〈ランドスケープ資源・植物分野〉



教授 鈴木貢次郎
SUZUKI, Kojiro

研究テーマ：ユリ科植物の種子繁殖法
関心のある研究教育分野：植物利用、植物地理・分類、植物の遺伝的特性、天然記念物の樹木、環境問題
担当科目：植物の生活と活用、緑地生態学、専門特化演習（二）（植栽基盤）、造園体験演習、花・緑演習、造園植栽演習ほか
所属：造園植物・樹芸学研究室
出身：神奈川県



教授 高橋 新平
TAKAHASHI, Sinpei

研究テーマ：造園地被植物（グラウンドカバープランツ）と芝草の生育と生態
関心のある研究教育分野：芝草・地被植物・土と光と水のこと、植物の生理・生態学、形態学、植栽地の管理
担当科目：芝生論、グラウンドカバープランツ、造園体験演習、花・緑演習、専門特化演習（一）（植物学）ほか
所属：緑化植栽学研究室
出身：岩手県



教授 水庭千鶴子
MIZUNIWA, Chizuko

研究テーマ：植物を取り巻く環境とその相互作用に関する研究
関心のある研究教育分野：ヒートアイランド現象緩和のための緑地に関する研究、ファイトレメディエーション、快適な緑空間の創生・保全・利活用について
担当科目：造園植栽学、植栽基盤論、造園体験演習、花・緑演習、造園植栽演習、専門

特化演習（一）（都市緑化）、専門特化演習（二）（植栽基盤）ほか
所属：緑化植栽学研究室
出身：茨城県



准教授 金澤 弓子
KANAZAWA, Yumiko

研究テーマ：植物の生態と造園材料としての有用性
関心ある研究教育分野：植物の繁殖、生活史、地域資源の保全と活用
担当科目：造園体験演習、緑地生態学、造園植栽演習、専門特化演習（一）（植物学）ほか
所属：造園植物・樹芸学研究室
出身：東京都



助教 田中 聡
TANAKA, Satoru

研究テーマ：地被植物に関する研究
関心のある研究教育分野：地被植物、植物生態、土壌資材、芝草、雑草
担当科目：生物学、グラウンドカバープランツ、造園植栽学、花・緑演習、造園植栽演習、専門特化演習（一）（都市緑化）、造園体験演習ほか
所属：造園植物・樹芸学研究室
出身：兵庫県

〈景観建設・技術分野〉



教授 栗野 隆
AWANO, Takashi

研究テーマ：近代造園の歴史・意匠、歴史的庭園の保存修理技術、考古学遺跡の保存・整備・活用と造園計画
関心のある研究教育分野：庭園史・意匠論、庭園考古学、遺跡保存修復
担当科目：造園体験実習、環境デザイン基礎演習、近代造園史、造園施設材料、造園工学演習、専門特化演習（二）、（伝統技法）ほか

所属：庭園技法材料学研究室
出身：兵庫県



教授 齋藤 馨
SAITO, Kaoru

研究テーマ：風景認識原論、庭園技法とサイバースペース、自然保護のデジタル化
関心のある研究教育分野：庭を造り維持管理する人の意思、風景を観賞する人の心、サイバースペースの中の自然、感性情報によるランドスケープのデジタル化、景観の予測と評価、ランドスケープ情報学

担当科目：フレッシュマンセミナー、造園工学、専攻研究、卒業論文（卒業制作）
所属：庭園技法材料学研究室
出身：新潟県



教授 山崎 元也
YAMASAKI, Motoya

研究テーマ：道路の景観、都市の景観、VR（ヴァーチャルリアリティ）、CAD、GIS
関心のある研究教育分野：建設マネジメント
担当科目：造園施設設計、造園工学基礎演習、造園工学演習、CAD及びGIS基礎演習ほか
所属：庭園技法材料学研究室
出身：大阪府



助教 張 平星
ZHANG, Pingxing

研究テーマ：造園材料の産出と特性、庭園空間と景観設計における材料の活用
関心のある研究教育分野：日本庭園の造園材料、石造物、CAD及びGISを用いた景観分析
担当科目：造園施設材料、造園体験演習、測量実習、造園工学基礎演習、造園工学演習、専門特化演習（二）、（エンジニアリング）、専攻研究、卒業論文（卒業制作）

所属：庭園技法材料学研究室
出身：中国・南京市

〈地域環境科学部 教養分野〉



教授 上岡 洋晴
KAMIOKA, Hiroharu

研究テーマ：温泉利用と生活・運動指導を組み合わせた総合的健康教育
関心のある研究教育分野：老年科学（介護予防）、疫学（生活・運動）、温泉医学
担当科目：スポーツ・レクリエーション（一）・（二）
所属：身体教育学研究室（教養分野）
出身：栃木県

3-2 客員教授・非常勤講師（2021年度）

実業界の第一線で活躍しているデザイナーなど専門家を非常勤講師として招聘し、専任スタッフとの協同により少人数対応のきめ細かな実践的教育を実施しているのも造園科学科の特徴です。東京に位置する世田谷キャンパスならではの多彩な講師陣に大きな期待があります。また、国内外から造園科学科の教育・研究に対し、特別講義や研究連携、外部評価など専門的見地から様々に貢献していただくことを目的として、数多くの先生方に客員教授をお願いしています。

(客員教授)

有賀 一郎	木村 正一	小木曾 裕
小林 正典	中根 史郎	西田 正徳
洪 光杓	山本 富雄	濱野 周泰
李 樹華	和田 新也	

(非常勤講師：学科専門科目担当)

氏 名	科 目 名
池田 大樹	造園工学演習
石井 匡志	造園施工論 他
大場 淳一	造園体験演習
小黑 晃	造園植栽学

小池 孝幸	造園総合演習
小泉 祐貴子	専門特化演習（二） （伝統技法）
大隅 一志	観光計画論
金子 忠一	ランドスケープ政策論 ランドスケープマネジメント 詳論〈大学院〉
岸 孝	造園総合演習
児玉 卓士	専門特化演習（二） （建築デザイン）
齋藤 悟	造園体験演習
高木 悦郎	緑地の生きもの
高橋 靖一郎	専門特化演習（一） （環境デザイン）
高柳 裕則	造園体験演習
西田 正徳	専門特化演習（一） （環境デザイン）
西山 雅俊	CAD及びGIS基礎演習
服部 マリ	造園体験演習
濱野 周泰	造園樹木学 他 樹芸詳論 他〈大学院〉
平松 早苗	造園工学演習
松本 考世	造園体験演習
吉田 耕一郎	造園体験演習
高塚 敏	ランドスケープマネジメント 詳論〈大学院〉

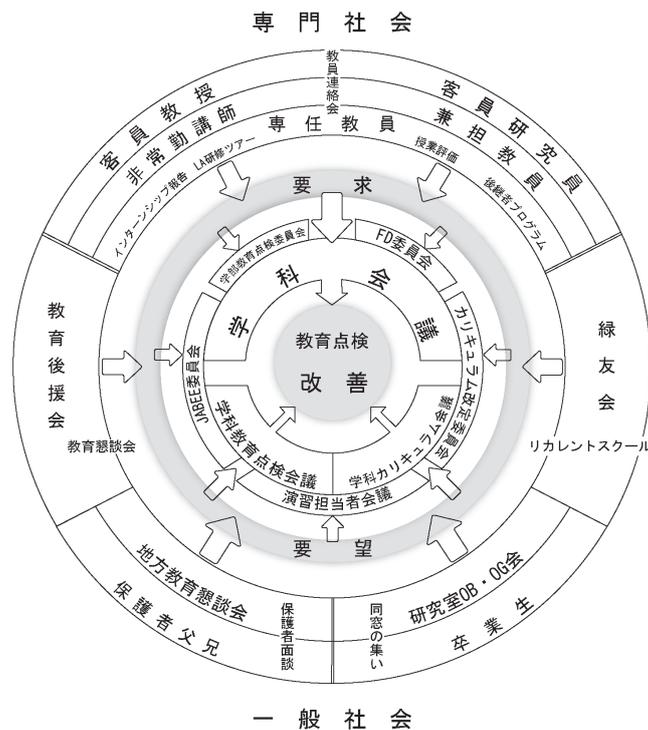
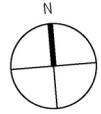
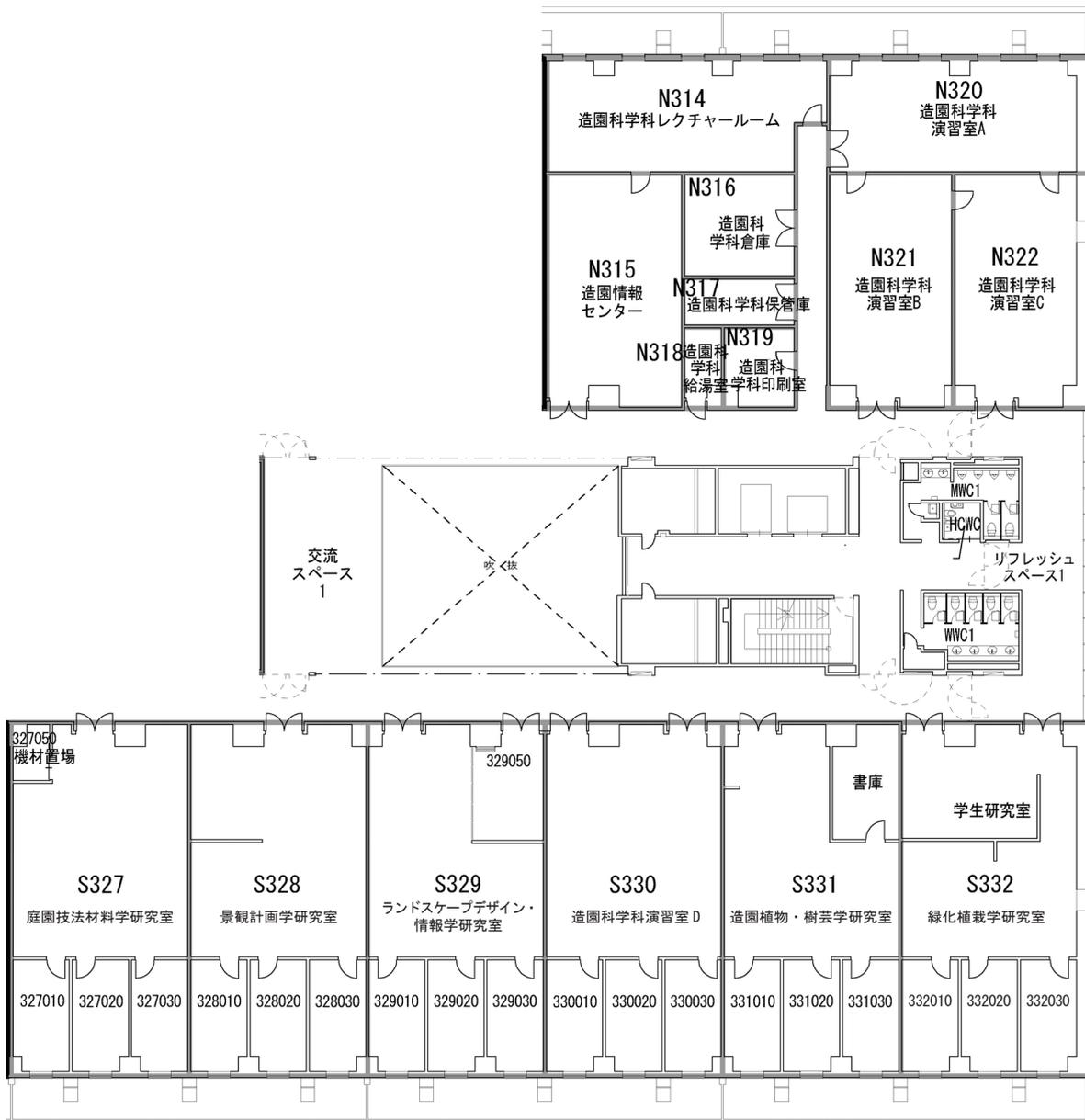


図 3-1 学科の教育点検における客員教授・非常勤講師の先生方の位置付け

3-3 造園科学科研究室位置図



<新研究棟 3階> : 造園科学科



3-4 学部事務室

東京農業大学あるいは造園科学科の学生としての様々な事務手続きや生活のためのサービスは、学部事務室が窓口となります。また学部事務室は、学生諸君が教員と連絡をとるときのインターフェース機能も備えています。

・緊急連絡先

学外での授業などの急な欠席連絡、不慮の事故に遭遇した場合は、03-5477-2911（学部事務室）へ報告して下さい。

□ 教務関係

・履修の手続き等の相談

前学期と後学期に履修する科目の申請は教務課でおこないますが、その相談等窓口になります。履修届は学生ポータルで電子的におこないます。

・在籍に関わる手続き

休学、復学など学籍に関わる各種手続き書類の提出窓口になります。

・レポートの提出

授業に関わるレポートは、教務課や教員の所属研究室へ提出してください。

□ 学科内施設・設備の利用

・利用申請

学科内の施設・設備の利用にあたっては、事前に所管教員の許可が必要になりますが、その利用申請の申込窓口となります。

□ その他

・掲示物の申請

造園科学科の掲示板を利用して学生行事などを広報したい場合は、掲示物をもって、造園科学科主事に申請して許可を受けてください。

・大学経由の配布物の受け取り

大学で実施した模試や調査などの結果の返却、刊行物「農業」（大日本農会出版）は学部事務室で配本します。

4. 研究室ガイド

環境計画・設計分野

景観計画学研究室

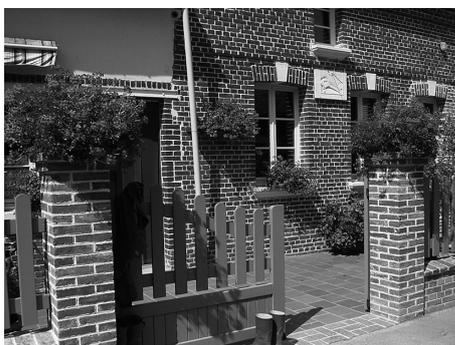
服部 勉 教授、荒井 歩 教授、栗田和弥 助教



地域固有の景観の特性を解明する
(世界遺産 白川郷)



高山植生の復元と景観保全の活動を43年間継続している日本百名山・巻機山(まきはたやま)



「花のある景観」を意識して計画されたまちづくり(フランス)

研究室の使命：

私たちを取り巻く環境は、都市の庭、公園、緑地、河川、都市近郊に残る里地里山、中山間地の田園や森林、自然公園や自然風景地、原生自然など多様な空間・景観として存在します。これらの優れた環境を計画的に保全、保護、活用、運用することで、自然と人間が共生する地域環境を創出することを私たちの研究室は目指しています。

景観とは、人とそれをとりまく環境との関係として表れるため、景観の捉え方には様々な側面があります。

私たちの研究室における風景・景観へのアプローチは、主に環境に対する人の認識や体験を風景・景観として扱うスタンスでおこなっています。調査・研究対象は都市域から自然地域までと広範囲であり、造園計画学、風景地計画学、景観論、自然保護論、ランドスケープマネジメント論、レクリエーション論、観光論などの観点から研究をおこなっています。

研究テーマ：

私たちの研究室では、主に以下に示す3つの柱を軸に研究をおこなっています。

①風景・景観づくりに関する景観解析の研究

人々の生活や生業のながめである文化的景観の特性解明の研究、再生可能エネルギー施設(風力発電、太陽光発電など)に関する景観アセスメント(環境影響評価)手法の研究、近郊都市および中山間地における農業景観の保全に関する研究、景観まちづくりにおける市民協働や合意形成手法に関する研究などをおこなっています。

②自然環境保全に関するマネジメント的視点からの研究

優れた自然環境の保全ならびに自然保護に関する研究、観光地やリゾート地などの変遷ならびに管理・運営計画に関する研究、山岳地の自然再生活動におけるプログラム内容の整理および活動史に関する研究などをおこなっています。

③造園空間の活用・運営に関する考現学的視点からの研究

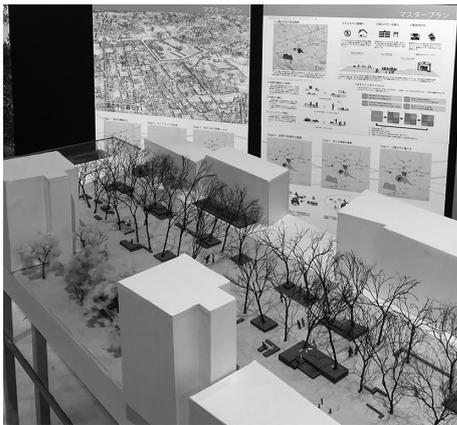
庭園や公園の価値に着目した利用と活用に関する研究、日本文化から歴史まちづくり、環境デザインへの応用手法の研究、自然地や公園でのレクリエーション・プログラム手法に関する研究などをおこなっています。

ランドスケープデザイン・情報学研究室

國井洋一 教授、阿部伸太 准教授、福岡孝則 准教授



オープンスペース(屋外空間)を活かした住みやすく、持続的な都市の創成



世田谷区における屋外公共空間提案の展示



レーザースキャナによる庭園の測量

研究室の使命：

本研究室では、人口減少、都市の縮退、気候変動への適応といった課題を解決し、オープンスペース(屋外空間)を活かした住みやすく、持続的な都市の創成に貢献する研究を行います。持続的な都市の実現に向けて、屋外空間の計画・設計と空間情報学が融合するランドスケープデザインを探索します。快適な生活環境を形成するランドスケープ空間を計画的に保全、活用、創出、運営することを目標として、都市および農山村の地域環境まで、さまざまなフィールドを対象として、ランドスケープデザイン及び空間情報学の理論と技術を探求しています。具体的には、庭、空地、公園緑地、街路、農地など、小空間から都市まで幅広いスケールにおける調査・計画・設計理論と技術の探求、さらにはICTやGISによる分析・視覚化、空間の質を検証するシミュレーション解析などのデジタル技術を活用し、社会課題解決のためのランドスケープデザインに挑戦します。学生は調査研究や実践的な取り組みを通じてランドスケープデザイン・情報学の基礎的な技術を修得し、自然・歴史・文化を活かした都市づくりに貢献することを目指します。

研究テーマ：

都市および農村地域の緑地の保全・活用・回復に関わる計画や制度の研究、GIS(地理情報システム)を活用したグリーンインフラの評価・計画手法の研究、UAV(ドローン)やレーザースキャナを用いたランドスケープ空間把握の研究、屋外公共空間のデザイン手法、ICTやAI、GISによる分析・視覚化、空間の質を検証するシミュレーション解析などのデジタル技術を活用した研究など、ランドスケープデザイン・情報学の基礎研究から応用研究までに取り組んでいます。特に、最近空間情報技術を利用したオープンスペースの実態把握に取り組み、ランドスケープデザインに資する情報の蓄積を行うことで、より快適な空間の構築を目指す研究に取り組んでおります。また、研究室活動では、フィールドサーベイ等による実態把握、先端技術を活用した地域環境の調査解析、デザインワークを通しての問題意識の高揚、課題解決のためのコンセプトメイキングとデザインの具現化など、実践的な活動を通して、計画およびデザインの理論と技術の応用力も養っています。

ランドスケープ資源・植物分野

造園植物・樹芸学研究室

鈴木貢次郎 教授、金澤弓子 准教授、田中 聡 助教



子どもたちへの環境教育



樹木医の实地研修見学



里山での竹林管理

研究室の使命：

人々の快適な生活（都市的生活）は、自然と人の調和によってもたらされます。自然を壊しながら都市化が進んできましたが、多くの生物が生育・生息する自然を破壊しながらも、人々の生活にとって必要（重要）となれば、自然を保護したり、保全したりしてきました。その一部の自然が、現在も辛うじて私たちの身の周りに残っているとさえいえます。生物を失った都市では、美的な感性を取り入れながら、身の周りに植物を導入（植栽）することによって、自然と人の生活のバランスを取り戻そうとしてきました。

植物を主とした生物の保護と保全、利用および管理を図るために、造園空間を構成する植物を対象として、その基礎である分類学、植物地理学、生理学、生態学を生かし、社会的背景（文化、経済等）を鑑みながら、樹芸（芸は蕨の当て字：植物を植え不要な部分を切り捨てて形よく育てる）への応用学を目論んだ造園植物の繁殖・増殖、応用生態、樹木医に関わる研究をおこなっています。

研究テーマ：

①造園植栽に供される自生・外来の樹種や草本の天然分布、生育適地、繁殖、遺伝的な変異などについて生態・地史、植物地理、遺伝学的に解明する「造園植物の生育環境」に関する研究。②里山、庭園、都市緑地、生垣、街路樹、巨木、サクラ等、衣食住に関わる造園文化、あるいは民俗における植物の関わりや役割を、フィールド調査や実験を通して解析する「植物に関する民俗性と文化」に関する研究。③稀少植物や林床植物の保護・保全のための繁殖生態、植物の増殖、栽培化、苗木や成木の生産、販売、流通に関わる諸問題を経済や文化、自然科学的側面から解明する「植物の繁殖技術と流通」に関する研究。④樹木が種子発芽の段階から老木に至るまでの間にどのような経路で樹体をつくりあげていくのかを形態学的に追究する「樹体構築」に関する研究。⑤幼児をはじめとして小・中学生、高校生への植物教育の現状とそのあり方について、カリキュラム等の教育環境から実践を通して探る「植物教育と社会」に関する研究。などがあります。

緑化植栽学研究室

高橋新平 教授、水庭千鶴子 教授



卒論のフィールドの1つであるグラススキー場の芝生を見学



地被植物が作庭や人間心理に及ぼす影響について解説を受講



山岳地帯の国営公園の立地の概要を受講

研究室の使命：

人々の生活環境において、植物は様々な重要な役割を果たしています。都市空間において、さまざまな植栽地をはじめ、建物の屋上や壁面、室内のアトリウムなどの緑は、身近な生活空間の質を高めています。また、公園にある芝生、ゴルフ場やサッカー場などのスポーツターフは、休憩や運動など様々な用途にも利用されています。こうした場所では地表面を被覆する芝草や地被植物(草花、つる植物および低木等の総称)を欠かすことができません。しかし、こうした場所は植物にとっては健全な生育が困難な環境であることが多いのです。植物を大別すると、木の仲間(木本類)と草の仲間(草本類)に分けられます。高木などに成長する木本類に比べ、地表面を被覆する草本類は、草高が低いので、人に踏まれることによる踏圧、冠水や乾燥といった環境条件の変化による影響を、より顕著に受けやすいといえます。

より良い環境を創出し、社会に貢献することを使命として、芝草や地被植物をはじめとする緑化植物に関して、緑化技術(造成・維持管理)の開発および研究を基礎から応用までおこなっています。研究フィールドは、都市空間はもちろんのこと、沙漠地や災害地等の過酷な環境まで、人々が生活活動する場所のすべてが対象になります。

研究テーマ：

環境要因と地被植物の生育特性(成長量や糖・イオン等の体内分布等)との関係といった基礎的研究から、花や緑が人間心理に及ぼす影響および殺風景な都市環境に与える効果といった応用的研究まであります。具体的には、①造園地被植物や緑化用植物の生理・生態の解明(芝草の生育の比較研究、芝草・緑化用植物の耐踏圧性、耐暑性、耐寒性、耐乾性、耐湿性、耐陰性、耐潮性、冠水抵抗性など諸環境圧に対する耐性の解明)②植栽管理に関する研究(ゴルフ場のグリーンやサッカー場、公園芝生地等、利用目的やプレー特性に応じた状態に維持するための効果的な管理手法の研究)③屋上・壁面・室内などの建築空間域の緑化手法の開発④荒漠地・乾燥地および沙漠地に生育する植物に関する基礎的な調査・研究などがあります。

景観建設・技術分野

庭園技法材料研究室

山崎元也 教授、斎藤 馨 教授、栗野 隆 教授、張 平星 助教



左官技術を応用した日本近代の擬木制作の様子



採石場における造園石材の産出時の色彩・形状・節理の調査

日本庭園には、庭石、石橋や延段、石造物など、岩石の特徴を最大限に引き出す知恵が多数あります。採石場まで造園石材のルーツを探ることで、庭園の本質の一部を突き止めることができるでしょう。



オンライン SNS のための日本庭園 360 度全周 VR 映像音声デジタル化

日本庭園を 360 度全周アクションムービーカメラと 360 度 VR オーディオレコーダを使って、映像と音による感性情報を SNS に発信すれば、世界のどこからでも日本庭園が鑑賞できます。日本庭園がもっと身近になり、様々な公開庭園に足を運ぶようになることでしょう。

研究室の使命：

思想・芸術・技術の総合体というべき日本庭園は、土・石・木といった自然材料の特性を発揮させる知恵と、地形・光・風・水・音を活かす技法から成り立っています。当研究室は、庭園の工法（庭園の創造、育成、維持、管理に関する技術）、材料（石材・木材・竹材・左官材料の種類、産地、特性、加工）、施設（庭園建築、石造物、垣根等）の研究を通して、庭園の保存修復と技術の伝承とともに、先人の知恵と工夫の現代の造園空間への応用に挑戦します。さらにデジタル技術を駆使し、視覚と聴覚に関する環境情報から地形・光・風・水・音が人に与える影響を測定・評価し、刻々と変化する庭園景観の再現等、風景認識に関する学理的研究を推進します。

研究室活動としては、学生が造園の技術家に必要な堅実な理論と時空間に対する確かな視野を備えるべく、庭園と材料産地のフィールドサーベイ、技術に関する実地研修、庭園の調査修復ワーキング、デジタル技術の研修等を展開します。

研究テーマ：

当研究室のテーマは、庭園の工法、材料、施設、歴史・意匠・空間原理、デジタル化を扱い、たいへん多岐にわたります。

①庭園の工法に関する研究として、土工・地形造成方法、池泉・水工、石の運搬・据え付け、庭園施設の工作・組み上げに関する伝承造園技術の解明と失われた造園技術の実験考古学的再現、②庭園の材料に関する研究として、造園石材の産地の調査や全国の庭園に多用される庭石の種類と用途の調査にもとづく地質の視点からの庭園文化論の構築、③庭園の施設に関する研究として、石灯笼、層塔、石橋、舟着場等の写真測量による詳細把握とカタログングにもとづく編年作成、④歴史・意匠・空間原理に関する研究として、東アジアにおける日本庭園の影響、東京の近代庭園の立地特性と眺望景観の復元、⑤デジタルな庭園技法研究として、360 度全周 VR 映像音声などの日本庭園デジタルコレクションとリアルな庭園とを融合し、新たな花鳥風月と季節の移ろいの表現や壮大な自然の写実写意による新しい庭園鑑賞技法の開発、などの具体的なテーマに取り組んでいます。

5. 造園の職能と卒業生の活躍

◇造園の職能と卒業生の活躍◇

はもちろん、早めに意思決定をして準備を進めるとともに、公開形式で行われる修士論文発表会（年間2～3回開かれています）に参加してみることをおすすめします。

なお、上記の日程や大学院造園学専攻主催の各種公開ゼミ、

講演会の案内については、11号館5階造園科学科事務室前の掲示板、あるいは大学院のインターネット・ウェブ・サイト（<http://zoen-nodai.jp/graduate-jp/>）にて確認して下さい。

表 5-1 博士前期・後期課程の授業科目

博士前期課程	
造園計画・設計学特論	造園調査法詳論
造園施設材料・施工学特論	造園調査法詳論演習
造園植物・植栽学特論	日本庭園詳論
造園学特別演習Ⅰ	観光計画詳論
造園学特別演習Ⅱ	ランドスケープマネジメント詳論
造園学特別演習Ⅲ	ランドスケープデザイン詳論
造園学特別演習Ⅳ	樹芸詳論
研究倫理特講	芝生詳論
論文英語	ランドスケープ空間情報詳論
博士後期課程	
特別研究指導Ⅰ	造園計画学後期特論
特別研究指導Ⅱ	造園設計学後期特論
特別研究指導Ⅲ	造園植物学後期特論
論文英語作成	造園植栽学後期特論
	造園施設材料学後期特論
	造園施工学後期特論

5-3 卒業生の活躍

表5-2は最近の本学科の卒業生の就職先を示したものです。

まず、造園空間の計画設計にあたる「造園コンサルタント」（計画コンサルタントや造園設計事務所、環境調査会社など）があります。公園緑地に関わるものでは基本計画から実施計画、設計管理に至る一連の業務を担うことになります。また、計画コンサルタントの中には法定計画（法律により策定が定められた計画）され、全国の市町村で現在計画立案の作業が進められつつある「緑の基本計画」や「都市マスタープラン」などを立案したり、他分野の人と一緒に地域の振興計画を考えるといった業務をおこなうことが多くなっています。さらに環境アセスメント等に関わる環境調査（植生や野鳥等の調査）を専門にしている会社もみられます。

この数年間の傾向として最も多くの卒業生が就職しているのが、造園空間の建設に直接関わる「造園建設業」（いわゆる造園建設会社）です。大学卒業生の場合、その多くは入社後数年で現場代理人として、公園や緑地等の建設工事全体の指揮・監督に責任者として携わることになります。また「総合建設業」（いわゆる大手のゼネコン）の造園部門にも進出しています。

一方、「公務員」（国、自治体等の公園緑地行政、自然保護行政等）は近年、特に造園職や総合土木職の求人が増大しつつあり、これまでも農大造園が安定的に人材を送ってきた職種といえます。国家公務員（I種）では国土交通省における公園緑地行政、環境省における自然公園行政があるほか、農

林水産省で活躍する者も多く、都道府県や区市町村における公園行政・環境行政には多くの卒業生が進出しています。さらに公務員に近い職域として都市再生機構などの独立行政法人や「財団法人・社団法人」（県や市の公園協会、公園財団などの法人）があります。

後者は公園緑地等の管理運営に当たるほか、身近な自然の保護活動や文化遺産の管理運営などをおこなっています。

その他、「緑化（造園）資材生産・流通業」（緑化用植物の生産販売会社、造園資材の流通会社など）や造園空間の「管理・運営業」（ゴルフ場のグリーンキーパーやレジャーランドの運営業）などに進む卒業生も少なくありません。また、最近ではガーデニングの講師や花卉販売など、園芸分野との境界領域で活躍する女性造園家も増えてきました。

「教育・研究」部門では農業高校の「造園部門」で教鞭をとる卒業生が、さらに最近のガーデニングブームの中で生涯学習や社会人教育の任に当たっている卒業生もみられます。

このように造園科学科を卒業した後、その専門知識と技量をもとに活躍する範囲は広範であるといえます。昨今の世界的な経済・社会の変化によって、広範といえども就職環境は刻々と変化しています。社会的状況の変化を常に認識し、将来の目標を常に意識する態度が求められます。

各学年ごとに実施されるガイダンスやチューター制などを通して将来の進路に関する相談にも応じていますので積極的に活用して下さい。

表 5-2 造園科学科卒業生の進路

職 域	具 体 例
造園コンサルタント	計画コンサルタント、造園設計事務所、環境調査会社（植生調査等）
造 園 建 設 業	造園建設会社（(株)〇〇緑地建設、(株)□□造園土木等）
総 合 建 設 業	総合建設会社（ゼネコン等）
公 務 員	国家総合職（国土交通省、環境省等）、国家一般職、都道府県庁（公園緑地課、自然保護課、都市計画課等）、東京都特別区・市町村（公園緑地課等）
独立行政法人、 公益法人	都市再生機構、（一財）公園財団、（公財）日本自然保護協会 （一財）日本緑化センター、都道府県・区市町村の公園協会等
教 育 ・ 研 究	中学教員（理科）、高校教員（理科、農業（造園））、専門学校教員
緑化資材生産・流通業	緑化材料生産会社、種苗会社、花卉販売会社、造園施設材料メーカー等
管 理 ・ 運 営 業	住宅団地等の管理会社、ゴルフ場、テーマパーク等の管理運営会社等
進 学	大学院（農大造園学専攻等）、海外留学等

5-4 東京農業大学緑友会

造園科学科の卒業生、大学院造園学専攻の修了生ならびに造園関連の職域に携わっている農大卒業生で組織し、活動しているのが「東京農業大学緑友会 (Alumni of LATUA)」です。校友会の事業に積極的に参加するとともに、造園関連実務に関連する情報、技術の交流等を通じ、会員相互の啓発、造園領域の向上と発展に資することを目的としています。

東京農業大学緑友会の主たる活動の一つとして、造園CPDプログラムの企画・運営があります。造園CPDは、造園に関連する分野の技術者が、日々自分の技術向上や知識の幅を広げる努力(継続教育:CPD = Continuing Professional Development)をおこなうもので、認定された講習会や研修会などの受講や自己学習により、専門的な知識や技術の研鑽を継続していくことです。技術士やRLA(登録ランドスケープアーキテクト)などの有資格者の継続認定条件の一つになっているほか、企業によっては職能育成の一つに義務付けられているところもあります。

具体的なプログラムとしては、毎年5月に東京農業大学で

開催される「緑のフォーラム」における講演会、ポスターセッションの共催のほか、リカレントスクール(東京緑友会)のように各地域の緑友会が主催しているものもあります。

緑友会では、このような講演会や研修会(造園CPDプログラムを含む)をはじめとして、会員相互のコミュニケーションを積極的に図るために、さまざまな活動をしています。これらの講習会や研修会には、造園科学科の学生のみなさんも参加することもできます。また、緑友会の方々には、各地域の就職活動の相談窓口にもなっています。

なお、いくつかの都道府県では、地域別の緑友会もつくられていて、現在は、北海道緑友会、岩手緑友会、宮城グリーンクラブ(宮城県)、栃木県緑友会、東京緑友会、神奈川緑友会、千葉県緑友会、埼玉緑友会、茨城県緑友会、東海グリーンクラブ(三重・岐阜・愛知)、静岡県緑友会、山梨緑友会、滋賀緑友会、京阪神緑友会、広島緑友会、福岡緑友会、熊本緑友会、鹿児島緑友会などが組織されています。

最新情報は、緑友会ホームページをご覧ください。

<http://nodaiweb.university.jp/alumni/>

6. 造園科学科の技術者教育と JABEE

6-1 JABEE の目的

JABEE とは、Japan Accreditation Board for Engineering Education（日本技術者教育認定機構：http://www.jabee.org/）の略称で、通称「ジャビー」と呼ばれ、わが国を代表する技術者教育認定団体として、大学や学協会・関連各省と密接に連携しながら、技術者教育プログラムを審査・認定する非政府団体です。

JABEE の目的は、大学の技術者教育プログラムを統一的基準に基づいて審査・認定を行い、高等教育機関で行われて

いる技術者教育プログラムの品質が満足すべきレベルであること、そして、その教育成果が技術者として活動するために必要な最低限度の知識や能力の養成に成功していることを認定することです。

また、各教育機関に独自の教育理念と教育目標の公開を要請し、新しい教育プログラムや教育手法の開発を促進し、日本や世界で必要とされる多様な能力を持つ技術者の育成を支援することです。

6-2 JABEE 認定と技術者の資格

JABEE に認定されると、プログラム修了者は、「修習技術者」の資格を持つことになり、技術者として会社で活躍するための第一歩になります。

技術者の資格として「技術士」がありますが、これは科学技術に関する高度な応用能力を備えている「技術士法」に基づいて試験により認定するものです。

修習技術者は、（公社）日本技術士会（http://www.engineer.or.jp/）への登録により、技術士補を称することができます。

なお、技術士および技術士補は、技術者倫理を十分に守って業務をおこなうよう課されています（60-61 頁資料参照）。

また、JABEE は、ワシントンアコードに加盟しており、認定されたプログラムの修了者が、技術者として国際的に活躍できる知識と能力をもつことを意味しています。ワシントンアコード Washington Accord（http://www.washingtonaccord.org/）とは、技術者教育の質的同等性を国境を越えて相互に承認し合う協定で、1989年に締結されたものです。現在、日本、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、アイルランド、南アフリカ、香港、シンガポール、台湾、韓国が加盟し、インド、マレーシア、スリランカ、ロシア、ドイツの5カ国の暫定加盟が認められています。

6-3 「技術士」の資格取得までの仕組み

技術士は、「技術士法」に基づいた国家試験に合格して、（社）日本技術士会に登録した人に与えられる称号です。

JABEE に認定されたプログラム修了者、すなわち修習技術者は、この資格試験の第一次試験が免除となり、第二次試験までに必要な実務経験期間も短縮されます。具体的には、

（1）技術士補に登録し、技術士補として通算4年以上、技術士を補助することによって、もしくは（2）技術士補となる資格を有した日から、通算4年以上、科学技術に関する専門の応用能力を必要とする事項についての計画、研究、設計、分析、評価又はこれらに関する指導の業務をおこなう者の監

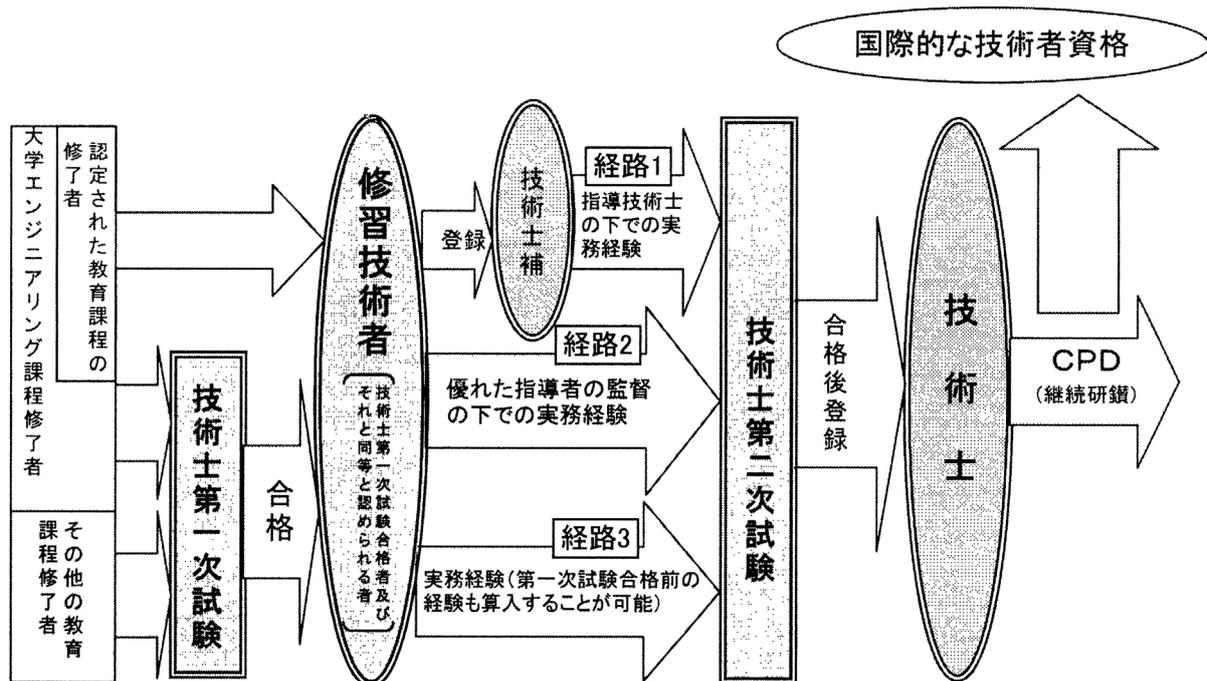


図 6-1 「技術士」の資格取得の流れ

督のもとに当該業務に従事することによって、第二次試験を受験することができます。また、大学院（修士号）を有する者は、2年を限度として、期間を短縮することができます。

第二次試験は、建設部門、環境部門、農業部門、森林部門、総合技術監理部門など21の技術部門ごとに、当該技術部門の技術士となるのに必要な専門的学識及び高等の専門的応用能力が問われます。（総合技術監理部門第二次試験を受験す

る場合は、7年以上の実務経験が必要になります。）

本学科の卒業生は、建設部門あるいは環境部門を受験することが多く、第二次試験の選択科目についても、前者では「都市及び地方計画」、後者では「自然環境保全」を選択することが多いです。なお、第一次試験の免除は部門とは関係なく、いずれの技術部門の第二次試験も受験することができます。

6-4 JABEE プログラムの修了生

造園科学科の皆さんは、入学（含む編入学）と同時に JABEE プログラムに登録され、卒業と同時に JABEE 認定プログラム修了者となります。

造園科学科プログラムは、国際水準を意識した技術者教育に向けて、時代と社会の要請に応じた学習・教育目標の設定と造園学の本質を据えた体系的なカリキュラム編成、さらにその成果の達成を実感できる教育システムとなっています。

皆さんは、プログラムの学習・教育目標を理解し、その目標を達成することが必要です。具体的には、造園科学科カリキュラムの (a) 総合教育科目（必修科目）7単位、(b) 外

国語科目（必修科目）8単位、(c) 専門教育科目（必修・選択必修・選択科目）88単位、(d) 選択科目21単位以上合計して卒業要件である124単位以上を修得することです。

造園科学科プログラムの学習・教育目標は、実学主義と「食糧」、「環境」、「健康」、「資源」、「エネルギー」という地球的視点からの東京農業大学の教育・研究への取り組み、また地域環境科学部の主要テーマである地域レベルでの自然との共生社会・循環型社会等への対応、さらに充実した造園学教育を目指す本学科の方針を踏まえて、8つの目標（A～H）を設定しています。

6-5 JABEE の定める技術者として修得すべき知識・能力

- (a) 地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養
- (b) 技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、および技術者が社会に対して負っている責任に関する理解（技術者倫理）
- (c) 数学、自然科学および情報技術に関する知識とそれらに応用できる能力
- (d) 該当する分野の専門技術に関する知識とそれらに応用できる能力
- ① 基礎能力：生命科学、生物環境科学、生物生産科学、生物資源科学の各関連科目の修得によって得られる理論的知識。
- ② 実験または調査を計画・遂行し、データを正確に解析・考察し、かつ説明する能力。
- ③ 専門的な知識および技術を駆使して、課題を探究し、組み立て、解決する能力。
- ④ 技術者が経験する実務上の問題点と課題を理解し、適切に対応する能力と判断力。
- (e) 種々の科学、技術および情報を利用して社会の要求を解決するためのデザイン能力
- (f) 日本語による論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力、および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力
- (g) 自主的、継続的に学習できる能力
- (h) 与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめる能力

れた専門技術者としての自負を持ち、本要綱の実践に努め行動する。

（品位の保持）

1. 技術士は、つねに品位の保持に努め、強い責任感をもって、職務完遂を期する。

（専門技術の権威）

2. 技術士は、つねに専門技術の向上に努め、技術的良心に基づいて行動する。また、自己の専門外の業務あるいは確信のない業務にはたずさわらない。

（中立公正の堅持）

3. 技術士は、その業務をおこなうについて、中立公正を堅持する。

（業務の報酬）

4. 技術士は、その業務に対する報酬以外に、利害関係のある第三者から、不当な手数料、贈与、その他これらに類するものを受け取らない。

（明確な契約）

5. 技術士は、業務を受けるにあたり、事前に相手方に自己の立場、業務の範囲などを明確に表明して契約を締結し、当該業務遂行上両者間で紛争が生じないように努める。

（秘密の保持）

6. 技術士は、つねにその業務にかかる正当な利益を擁護する立場を堅持し、業務上知り得た秘密を他に漏らしたり、または盗用しない。

（公正、自由な競争）

7. 技術士は、公正かつ自由な競争の維持に努める。

<参考資料>

■技術士倫理要綱

（(公社)日本技術士会 / 昭和36年3月14日理事会制定・平成11年3月9日理事会改訂）

技術士は、公衆の安全、健康および福利の最優先を念頭に置き、その使命、社会的地位、および職責を自覚し、日頃から専門技術の研鑽に励み、つねに中立・公正を心掛け、選ば

(相互の信頼)

8. 技術士は、相互に信頼し合い、相手の立場を尊重し、いやしくも他の技術士の名誉を傷つけ、あるいは業務を妨げるようなことはしない。

(広告の制限)

9. 技術士は、自己の専門範囲以外にわたる事項を表示

したり、誇大な広告はしない。

(他の専門家等との協力)

10. 技術士は、その業務に役立つときは、進んで他の専門家、あるいは特殊技術者と協力することに努める。

付 属 資 料

- 1 レポート・課題の作り方と表現方法
- 2 卒業論文・卒業制作ガイド
- 3 ポートフォリオの作り方
- 4 定期刊行物一覧
- 5 造園科学科ホームページ

1. レポート・課題の作り方と表現方法

講義や演習では授業時間以外に、課題が課せられることがあります。課題の内容は、テーマが与えられますので、まずテーマ内容を十分に理解することが重要です。そして様々な本や資料を調べて、データを示しながら自分の意見や考えをレポートとしてまとめたり、実際の造園空間に足を運び、その現況を写真や図面を使用してパネルとして表現したり、植物の状況を詳しく観察して、その特徴をスケッチで表現したりなど、実に様々です。

それぞれの課題では、どのような大きさの用紙を使用し、どのように表現すべきかが示されることが一般的です。レポートについては、特別な指示がない場合は、下に示した書き方を基本ルールとして参考とし、不明な時は担当教員に確認してください。

最近はインターネットなどを利用すると簡単に情報を得ることもできます。しかし、その情報源が不適切なものも少なくありません。またコピー&ペーストでネット上に示された情報や他の人の意見をそのまま写したりするのはレポートや課題の意味がありませんので、このような行為は当然大学生として慎まなくてはなりません。また「指定された提出場所」や「提出期限を守ること」は絶対に忘れないでください。

□ 表紙の書き方とレポートのまとめ方

図-1のように、右上に授業の科目名、レポートの課題名、サブテーマがある場合は、課題名の下に横棒—●▲■について—やカッコ【●▲■について】などを利用して記入します。中央やや下にレポートの提出年月日、その下に学科名、学年、学籍番号、さらに行をかえて氏名を記載します。なお、所定の表紙が配られている場合には、それを使用します。

レポートの本文をとめる時は、しっかりとめる時には左側2ヶ所、枚数が少なく簡単にとめるには左上1ヶ所をホチキス止めする場合があります。枚数が多く、ホチキスでとまらない時にはダブルクリップなどを使用してください。

□ 本文の書き方

a) ワープロを利用する場合

A4判用紙を縦使いで使用する時は、文字の大きさは10.5ポイントか11ポイントとし、1行に35～40文字、1頁を35行～45行でレイアウトすることが一般的です。また頁番号は中央下、余白は上:30mm、下:25mm、左:25、右15mmが標準的です。

b) 手書きの場合

手書きの場合、最も重要なことは、「読みやすい文字」で読み手が正しく理解できるように「正確内容」を表現することです。筆記用具としては、黒のボールペンや水性ペンなどを使用、消えるインクのボールペン、鉛筆やシャープペンシルは一般的ではありません。ごくわずかな誤字や間違いの時は、修正ペン・テープを利用して修正しますが、間違いの箇所が多い時などは必ず新たに書き直してください。

A4判レポート用紙を用いる時には、1行おきに横書きすると読みやすく、美しく仕上がりますが、レポート用紙の罫線の幅が広いものは、1行おきにしないで書いてください。ホチキスなどでとめること考え、左側を3cm程度、右側を2cm程度あけてください。また1行の文字数は30～35字程度が目安とし、ページ番号は中央下に付けてください。

□ 図・表・写真のタイトルの書き方

図・表・写真を入れる場合は、図-1、表-1、写真-1のように番号を付けて、タイトルを記入します。タイトルの位置は、表は上部に、図・写真は下部に入れます。また、自分が作成あるいは撮影したものではないものについては、出典を明記してください。

例) 表-1 世田谷区の緑地面積 (出典:世田谷区(2010):「水と緑の基本計画」)

□ 引用文の扱い方

他の人の研究結果や意見、文章を使うことを引用と呼びます。例えば、「和辻哲郎は桂離宮について「……」(和辻1960)と述べている。」というように書き、その出典を論文やレポートの最後に引用文献として記載したり、「和辻哲郎¹⁾は」と肩カッコ数字を付けて、最後の文献リストの番号と合わせる記載も多く使われます。

近代造園史 2021

大正時代～昭和時代戦前期までの造園界の主な出来事
 — 制度・空間・デザイン (庭園・公園)、教育・出版、人物 —

2021年12月22日

造園科学科 年 学籍番号 _____

氏名 _____

図-1 レポートの表紙例

◇レポート・課題の作り方と表現方法◇

本文中に記載する著書名は『…』、論文名は「…」で示します。なお、〇〇氏、〇〇博士、〇〇教授などの敬称は省略しても失礼には当たりません。

□引用・参考文献の書き方

レポートを書くときに引用したり、参考にした文献がある場合は、必ず文末に文献名を記載する必要があります。文献の記載方法は、色々ありますが、基本的なものとしては次のような記載方法があります。

・一般書籍(図書)の場合

著者名、発行年、書名、発行所(発行機関)、使用した個所の頁を記載します。著者名の後ろに〇〇著とは書かないで、編、訳、編著のときに限って記入してください。複数の時は最初の1名のみ記し、〇〇〇〇ほかなどと略するときもあります。頁が1頁の時には、引用、参考とした頁をp.1、p.5とし、頁が連続する時にはpp.12-50と記載します。本1冊を参考とした時は、頁数を記載しないこともあります。

- 1) 山田太郎(1990):日本造園論:東京農業大学出版会、pp.350-360.
- 2) 川畑花子編(1991):東京公園論:公園緑地協会、p.50.
- 3) Gropius, Walter(1945):Rebuilding our Communities: Paul Theobald.
- 4) Gropius, Walter, 蔵田周忠他訳(1958):生活空間の創造,

彰国社, pp128-136.

[Gropius, Walter(1943):Scope of Total Architecture, Harper & Brothers.]

・学術雑誌(冊子)の場合

著者名、発行年、学術雑誌名、巻(号)、頁を記載します。発行機関名は一般的に省略しますが、地域情報誌など、ごく限定された地域でのみ刊行されているものなどについては、記載してください。

- 5) 山田太郎(1962):造園計画の基本問題について:ランドスケープ研究60(2)、15-20.
- 6) 高野正治(2005):輪島の垣根:能登の民俗と文化(2)、10-20、輪島の地域を学ぶ会
- 7) Gropius, Walter, 池辺陽抄訳(1951):コミュニティ再建について:建築雑誌756、101-120.

・インターネット上のウェブサイトの場合

アドレスを記入し、最後に閲覧・参照した日付を年月日の順でカッコ書きする。

- 8) http://www.nodai.ac.jp/kyoiku_F/noudai_web_kyoiku.html (2019年5月18日参照)

表-1 各軽量培土における、草丈・根長重量の測定値

	真珠岩パーライト	リサイクルパーライト(7%)	リサイクルパーライト(40%)
草丈(cm)	6.0	4.6 **	5.3
根長(cm)	18.6	5.2 **	6.5 **
生重量(g)	16.98	20.04 **	17.45
乾燥重量(g)	2.62	4.11	3.69
地上乾重(g)	1.29	2.01	1.73
地下乾重(g)	1.34	2.10	1.96

3 反復実験による平均値

**は分散分析により1%水準で有意差があることを示す。

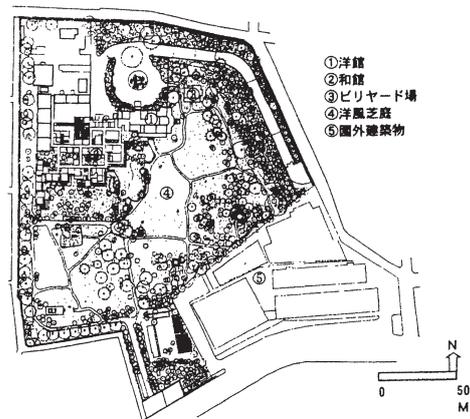


図-5 旧岩崎久彌本邸庭園復原設計平面図⁽¹⁾

図-2 図表およびタイトルの具体的な表示方法

2. 卒業論文・卒業制作ガイド

□卒業論文・卒業制作の意義

4年生になると、学科で学んで来た成果の「総仕上げ」として卒業論文または卒業制作を必ず全員が手掛けなくてはなりません。4年生になると、自分の希望する教員と相談しながら、ゼミという形式などで、個別指導を受けながら定められた提出期限までに深化させることとなります。一般的には3年生後半のガイダンスへの参加からスタートしますが、3年生前半から研究室に所属し、室員として活動しながら構想を深めたり、あるいは訪れたりしながら研究を始めることもあります。

大学は専門家を養成する教育機関であると同時に、それぞれの学問分野の発展や体系化に貢献する研究機関でもあります。このような大学で学ぶ皆さんが最後に卒業論文を手がけるということは、知識や技術の学習段階を一応終えて、初めて研究領域に一步踏み出すことを意味します。またそれを成し遂げてはじめて大学の卒業生であるという証、つまり「学士」の称号が卒業証書という形で授与されることとなります。この過程での経験は、実社会において未知の問題に遭遇した時に自らそれをどうやって解決するかという能力や、常に独創性を発揮して新たな発展を試みる態度・展開方法などを深める機会としてとても重要です。担当教員と十分に相談しながらも、学生自身の独創性が求められることとなります。また論理的な思考法や手際よくものをまとめる絶好の機会であるということも是非忘れないで下さい。

卒業制作は卒業論文と同様に位置づけられています。卒業論文がそれまでの学習とは異なって研究としての色彩が強くなるのと同様に、卒業制作はそれまでの演習課題とは異なり、制作自身の独創性と、制作作品が完成までの基礎資料の収集・分析、構想などのプロセスも極めて重要です。また詳細にわたっての技術的チェックや高度な表現技術も要求されます。内容としては、一般の造園計画や造園設計作品のほか、新しい計画設計手法の提案やレクリエーション利用プログラムの開発など幅広い成果がこれまでに提出されています。

□卒業論文の作成

研究論文としての要件や研究の進め方、制作の具体的な提出物等についてはそれぞれテーマによって異なりますので、各教員と十分に相談をおこなって実施してもらいますが、以下造園科学科としての卒業論文としての要件、学生・担当教員の双方が確認すべき評価基準、条件について紹介することにします。論文作成中はこの要件や基準を常に頭に置きながら作成に取り組んでください。

a) 卒業論文の要件

卒業論文が研究論文として価値を有するにはいくつかの条件を満たさなければなりません。その主な項目について整理してみます。

- ①未知の部分の解明を目指すこと：すでに研究済みのテーマを再びとりあげ、同じ方法で研究を試みたのでは何の意味もありません。方法を変えて別の角度から実施

してみたり、既往の研究に欠けていた未知の部分明らかにするなど、たとえわずかであってもその分野の研究成果の向上を図ることに意義があります。そうした意味で、対象となる研究テーマに関係して、過去にどのような研究がおこなわれ、またどのレベルまで研究が進んでいるのか、それらを十分に把握しておく必要があります。

その第一歩として、まず「造園情報センター」などに設置されている1995年度から刊行されている「卒論要旨集」を読んで下さい。どのような学生さんが、どのようなことが今までに研究されてきたか、また教員については、研究の対象や興味ある分野がどのようなものが良く理解出来ますので、授業のイメージだけにとらわれないで下さい。また4年生だけでなく、研究室選びや担当教員を考える際のとても良い資料となりますので、普段から是非活用して下さい。

- ②オリジナリティーの付与：すでに研究済みのテーマであっても、新しい視点や独自の発想にもとづく理論の発展がみられるものは価値がある研究といえます。

文献を中心としたものでも、自分の独自の考え方に基づき引用することにより独創性が生まれるのです。調査、実験を主体とする研究でも、着眼点や方法論を変えてみることによって、より価値のある研究が生まれることが多いのも事実です。

これらをまとめる際には、自分のオリジナルな部分とそれ以外の部分をはっきり区別して記述することが重要となります。

- ③体系化・総合化を目指す：オリジナリティーがあまり認められない論文であっても、ある特定の論理や主張、視点などで全体が系統的に説明されているものは、それなりに価値のある研究といえます。

一方、広範な内容を全体として捉え、これを分類整理したり、そこにみられる共通点を導き出ししたりする総合的研究も同様に論文としての価値は高いといえます。

b) 卒業論文(制作)の評価基準

- ①論文に記載された文章が解り易く、かつ適切に表現されているか。
- ②使用している用語、文体の統一、引用文献の表記など論文の表現、体裁が適切か。
- ③データ内容が信頼でき、図・表などにより適切に表現されわかりやすくまとめられているか。
- ④卒業論文(制作)として、テーマにオリジナリティーがあるか。調査・実験などのデータ採取に努力が認められるか。
- ⑤目的・方法・結果などが明解に示され、論文構成全体のバランスに偏りが無いか。

c) 記述の要領

①論文の構成

科学論文の場合、正式には論題、著者名、目次、総論（序論）、研究史、材料及び研究方法、実験成績（結果）、論議（考察）、結論、引用及び参考文献、摘要という順序になります。また内容に応じて、まえがき、研究目的、研究方法、結果、考察、結論、文献、摘要というように簡略化してもいいですが、総論、本論、結論という基本的な論文の枠組みは崩さないようにしましょう。

②論文の書き方

論文の記述の仕方や引用文献の書き方などは、「レポートの書き方」と同じですので、それを参考にしてください。ただし表紙の体裁や表紙文字の大きさは次項を参照してください。

d) 論文の要旨

卒業論文の内容を要約したもので、研究の目的、方法、対象、結果、考察、結論等の要点を具体的に、また簡潔にA4判用紙2ページにまとめ、学科や各研究室でも保存されます。頁数が少ないので、余白や不要な写真を掲載しないなど、限られた紙面を有効に効果的に使用してください。卒業制作の場合も必ず提出します。

内容の詳細については担当教員の指導を受けることが必要ですが、レイアウトについては次の通りとします。

- ① A4判、横書き2段組(22字×46行×2段)とする。ワープロ等によって作成し、設定は上余白:25mm / 下余白:25mm、左余白:20mm / 右余白:20mm、段間:8mm程度を標準とする。
- ② 第1ページ第1段(左)第1、2行目に論文題目を書き、第4行には学籍番号、氏名を右詰めで書く。本文は第6行目からはじめる。
- ③ 図、写真、表等を挿入する場合には、タイトルを入れる。タイトルの挿入位置は図・写真は下部、表は上部とする。
- ④ 本文の見出しは原則として統一する。

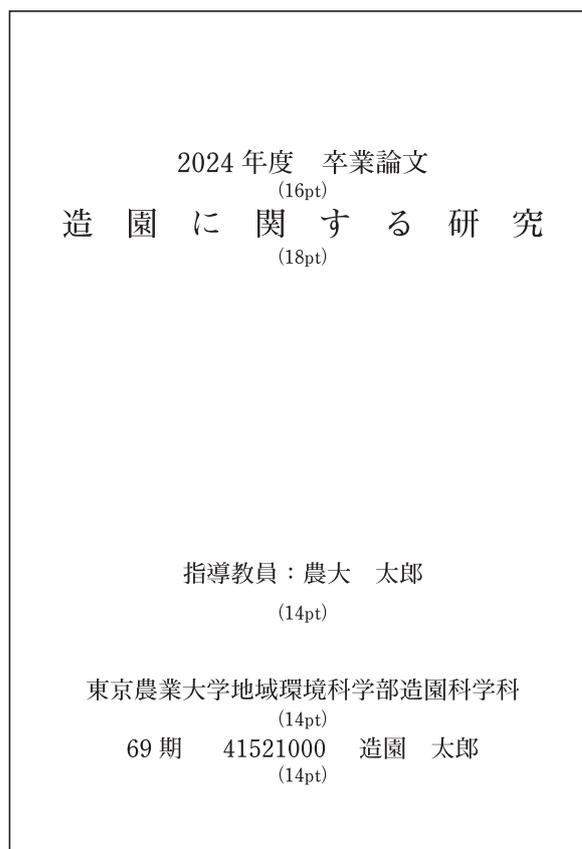


図3 卒業論文表紙の書き方

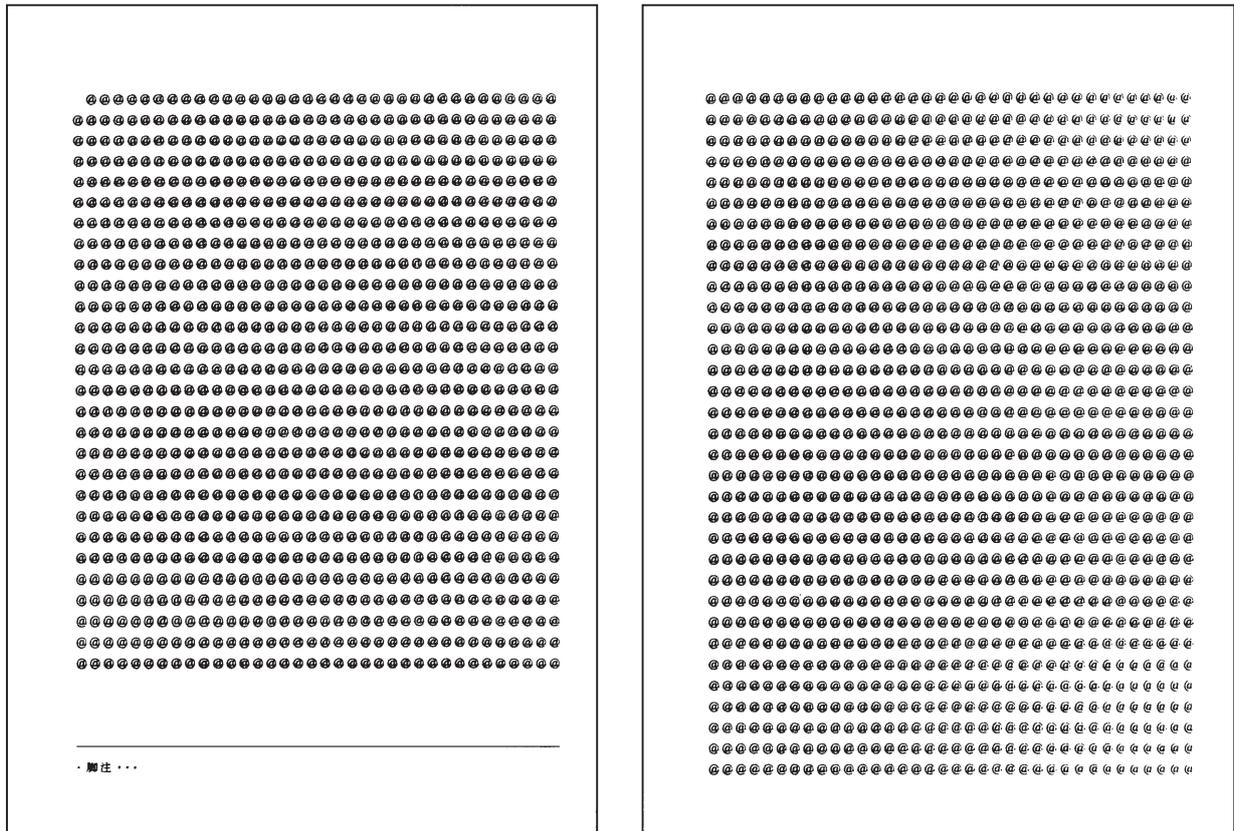


図 4 卒業論文ワープロ仕上げの体裁

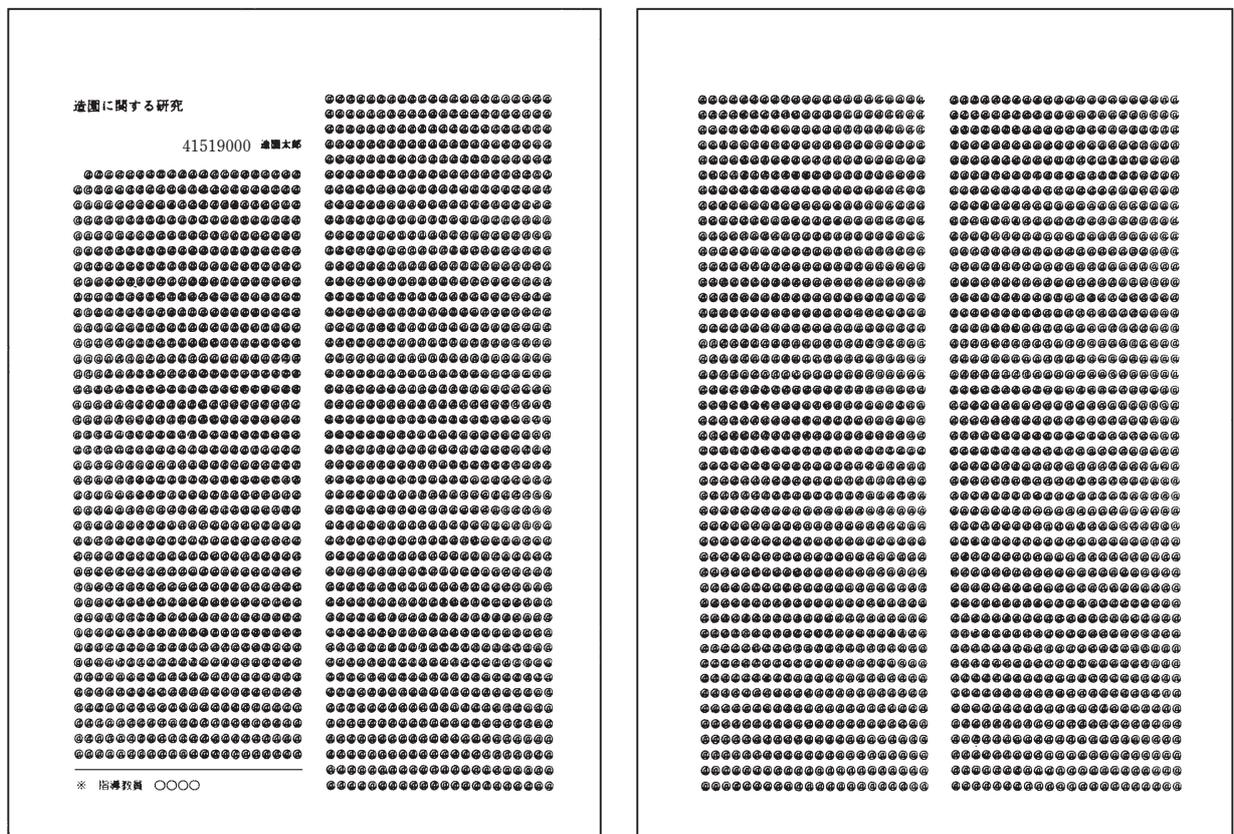


図 5 卒業論文要旨の体裁

3. ポートフォリオの作り方

ポートフォリオ (Portfolio) とは、学生時代の“学習歴”と各自の“個性”を表現する手段であり、専門性を持った学生の自己紹介書とも言えます。就職や進学などの活動の際に積極的に活用することになりますので、説得力のあるプレゼンテーションが大切です。

□ Step1 まずは作品づくりとその整理

ポートフォリオをつくるためには、まず、自分の作品が必要です。それには、実習、造演習等で作成した図面 (作品)、授業などの資料、レポート、ノート等、学内外で行われた講演会やシンポジウムなどの資料、メモ、写真、研究室活動 (研究、フィールドトリップなど) の資料や写真、コンペ応募作品、課外活動 (部活や同好会、ボランティア、ワークショップなど)、国内外を旅行した時のリーフレット、写真など、ほとんど全てのものが材料として使えるはずで、日ごろから整理しておきましょう。

□ Step2 作品の完成度を高めるには

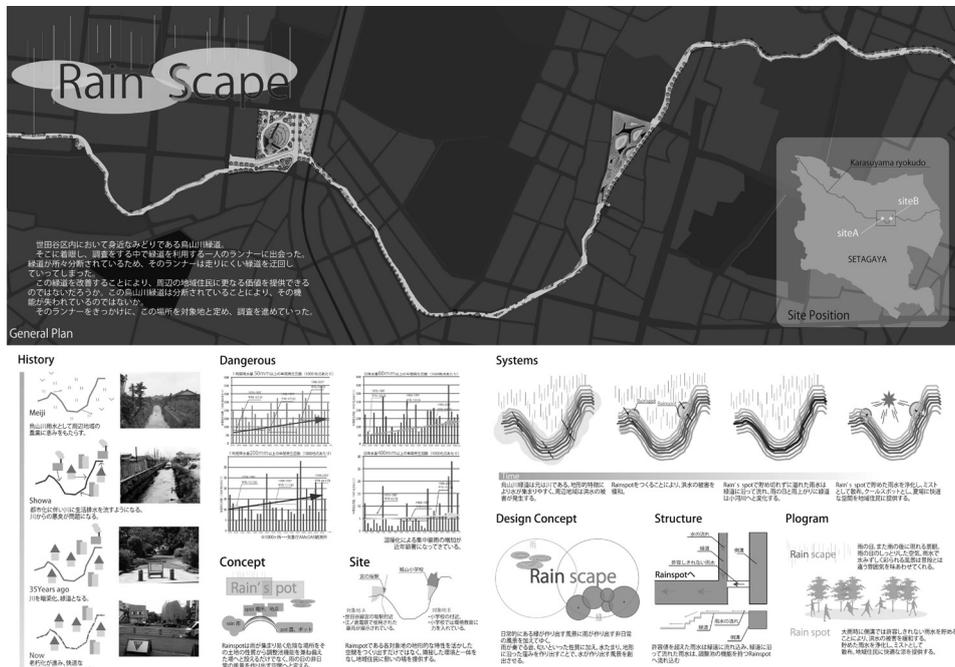
ポートフォリオの中心になるのは、実習、演習等の課題

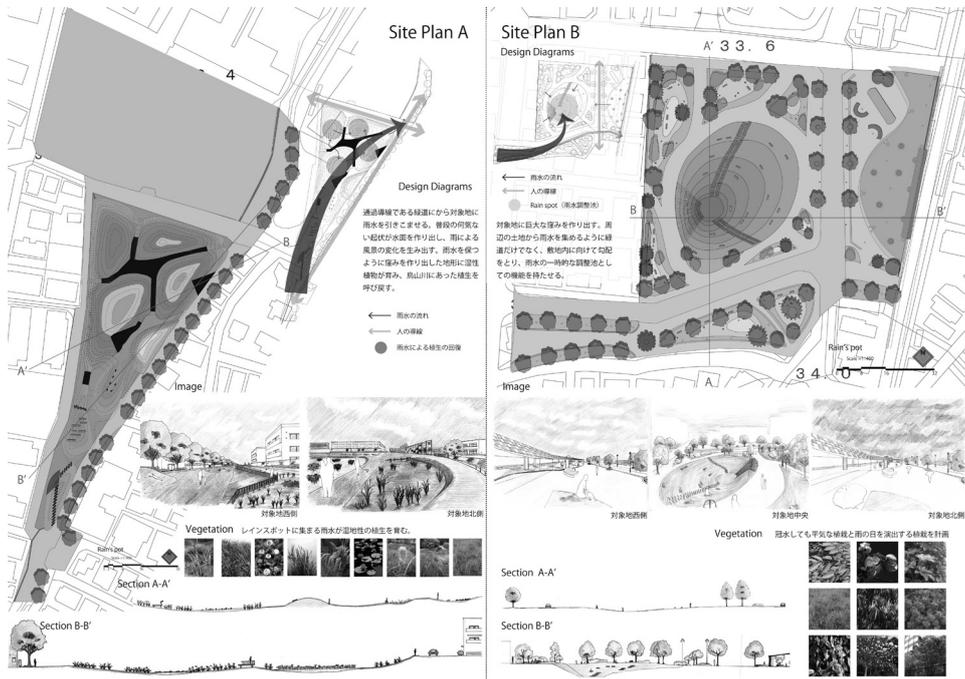
□ 造園総合演習作品例

作品になりますが、中には完成度の低い作品を使用する方もいます。これでは相手に自分の魅力や能力の高さを伝達するには逆効果となります。ポートフォリオ作成では課題なら何でもよい、というわけではありません。作成途中段階を示すエスキス、メンバーとのディスカッションなど、作品完成までのプロセスを入れたり、新たに描き改めたり、コンペなどに応募した自信作を入れるなど、各自で工夫し、完成度の高いポートフォリオを作成してください。

□ Step3 効果的なプレゼンテーション

プレゼンテーションには、そのままファイリングしたり、縮小コピーしてまとめたりと様々な方法がありますが、その基本は説得力のある効果的なプレゼンテーションの工夫にあります。また、ファイリングの方法は様々ですが、①クリアファイルに入れる②台紙に貼る③原図をそのまま使うなどがあります。いずれにしても見やすいように整理しておくことも大切ですが、造園家や建築家の作品展、コンペの展示、美術館などのレイアウトなどを実際見に行くことなどを普段から心掛けることも重要です。





4. 定期刊行物一覧

雑誌名	発行所		内 容
ランドスケープ研究(旧造園雑誌)	日本造園学会	季 刊	造園学会誌。造園学に関する学術論文、資料多数。
都 市 計 画	日本都市計画学会	隔 月	都市計画学会誌。都市計画に関する学術論文多数、文献紹介あり。
農村計画学会誌	農村計画学会	季 刊	農村計画に関する学術論文。書評、資料紹介あり。
土 木 学 会 誌	土木学会	月 刊	土木の基本的な問題から業界のことまで、広範な特集記事がある。論文も基礎理論から施工法まで多岐にわたる。論文報告集内容紹介、文献抄録、ニュース等あり。
建 築 雑 誌	日本建築学会	月 刊	建築学会誌。特集方式により建築関係の総説、学術論文を掲載。催し物予告記事あり。
日本草地学会誌	日本草地学会	季 刊	草地造成、草地改良、等の草地学に関する学術論文。
レジャー・レクリエーション研究	日本レジャー・レクリエーション学会	年2回	日本レジャー・レクリエーション学会誌。レクリエーション学に関する学術論文。社会学、心理学、体育学、造園学など研究方法は多様である。
日本緑化工学会誌	日本緑化工学会	季 刊	緑化工に関する調査、研究論文。工法、資材の紹介も多数。
芝 草 研 究	日本芝草学会	年2回	日本芝草学会誌。芝草全般についての研究論文、技術資料多数。
農業農村工学会誌	農業農村工学会	月 刊	農村計画にかかわる研修会テキストを兼ねた雑誌。資料多数あり、実務者向けである。
公 園 緑 地	日本公園緑地協会	隔 月	都市の公園緑地計画についての論説や都市公園についての行政的技術的資料を掲載した雑誌。海外資料もある。
都 市 公 園	東京都公園協会	季 刊	都市公園の設計（施設、植栽設計）、施工、管理についての情報誌。
新 都 市	都市計画協会	月 刊	都市計画についての論説や都市計画行政についての内容豊かな雑誌。
國 立 公 園	自然公園財団	年10回	国立公園の計画、保護管理、利用、歴史、海外事情、風景論など内容は広く、公園行政に関する資料も多い。
自 然 保 護	日本自然保護協会	隔 月	全国各地の自然破壊と保護の現状報告、環境教育、保護思想啓蒙等に関する記事が主な内容。
観光とまちづくり	日本観光振興協会	季 刊	観光地の計画論、開発論、観光利用の動向など観光全般にわたる時宜を得た記事を掲載。
Recrew(レクルー)	日本レクリエーション協会	月 刊	レクリエーション活動、余暇利用のあり方、あそびなど活動内容に関する記事が主体。
造 園 修 景	日本造園修景協会	年4回	造園界の動きや作品紹介等、特集方式で発刊。造園界のかかえる基本的問題等を扱う。
庭 園	日本庭園協会	不定期	庭園に関連した、歴史記事、作品紹介、作庭手法、作庭材料等々様々な内容をもつ。

建 築 と 社 会	日本建築協会	月 刊	関西を中心とした建築家の協会機関誌。特集方式で関西建築界の動きをはじめ、あらゆる建築関連記事を掲載。
森 林 技 術	日本森林技術協会	月 刊	広く林学、林業全般にわたっての研究事例、技術情報が掲載されている。造園の植栽に関する技術情報も多い。
グリーン・パワー	森林文化協会	月 刊	自然環境について全般的に掲載され、植物や動物に関するトピックス等も紹介される。資料が豊富な雑誌。
グリーン・エージ	日本緑化センター	月 刊	環境緑化全般にわたり研究例、技術情報が掲載されており、緑化の現勢を知るには格好の雑誌。
環 境 情 報 科 学	環境情報科学センター	季 刊	環境計画や環境アセスメント、特に環境指標、評価、解析についての内容が豊富。
ランドスケープ デ ザ イ ン	マルモ出版	隔 月	プロジェクトの特集等を通して造園家やその作品、デザインのあり方等を紹介。写真、図表多数。
緑 の 読 本	環境コミュニケーションズ	季 刊	緑化、公園、まちづくり、川、市民参加、文化遺産など造園に関する様々な分野のトピックスを毎月特集。 (休刊中、2013年7月)
まちづくり研究	首都圏総合計画研究所	季 刊	地区計画レベルでの各種施設の計画論、運営論等について事例をあげて論説。首都圏の統計資料あり。
水 利 科 学	森林科学研究所	隔 月	農業地域・都市域の多岐にわたる治水、利水の問題点をとりあつかう。
都 市 問 題	後藤・安田 記念東京都市研究所	月 刊	都市行政、都市問題、自治体問題等に関する論説。特集形式、文献紹介あり。
新 建 築	新建築社	月 刊	広く建築作品を記録・紹介した雑誌。巻末に月評という作品評価記事あり。
庭	建築資料研究社	季 刊	庭園に関連した記事多数あり。作品紹介・庭づくりの方法、材料、管理等に写真・図多数。
レジャー産業資料	総合ユニコム	月 刊	リゾート、観光地、スポーツ施設などの開発のノウハウや最新の動向を紹介。
ゴルフ場セミナー	ゴルフダイジェスト社	月 刊	ゴルフ場運営全般の雑誌であるが、記事の半分は芝生の造成・維持管理についての研究例、技術情報が掲載されている。海外事情、技術情報の紹介もある。
フ ロー リ ス ト	誠文堂新光社	月 刊	造園の植物材料（花物）の特性、アレンジメントに関連する記事が多く、内容も平易。
土 木 技 術	土木技術社	月 刊	土木施工技術を主な内容としている。工事報告、工法の紹介などが多く、最新の施工技術を知ることができる。写真・図表多数。
環 境 緑 化 新 聞	インタラクシオン	月 刊	造園界全体の動きをタイムリーに報じる。的確な官公庁・業界の情報豊富。
ビ オ シ テ イ	ブックエンド社	季 刊	生きものとの共生を目指したまちづくり、持続可能な社会の実現へ向けての記事を中心に構成。
TREEDOCTOR	日本樹木医会	年 1 回	各分野の専門家の論文をはじめ各種技術の情報が豊富。

造園関連の主なウェブサイト

学 会 関 連	
学術センター (NACSIS)	http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/
日本造園学会	http://www.jila-zouen.org/
日本建築学会	http://aij.or.jp/
土木学会	http://www.jsce.or.jp/
農村計画学会	http://lee1.en.a.u-tokyo.ac.jp/rural/
日本都市計画学会	http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/cpij/index.html
ASLA (LanD net) American Society of Landscape Architects	http://www.asla.org/asla/
国 の 機 関	
国土交通省	http://www.mlit.go.jp/
環境省	http://www.env.go.jp/
国会図書館	http://www.ndl.go.jp/
協会 (財団法人・社団法人等)	
(一社) ランドスケープコンサルタンツ協会	http://www.cla.or.jp/
(一社) 日本公園緑地協会	http://www.posa.or.jp/
(一社) 日本造園建設業協会	http://www.jalc.or.jp/
(一社) 日本造園組合連合会	http://www.jflc.or.jp/
(公財) 東京都公園協会	http://www.tokyo-park.or.jp/

詳細は、<http://www.nodai.ac.jp/land/> 参照のこと。

造園科学科指針

発行日：2021（令和3）年4月1日

編集：東京農業大学地域環境科学部造園科学科

発行者：鈴木 貢次郎

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1

TEL 03-5477-2911（地域環境科学部事務室）

印刷：創文印刷工業株式会社

©2021 Department of Landscape Architecture Science,

Tokyo University Agriculture

表紙イラスト 大山 佑